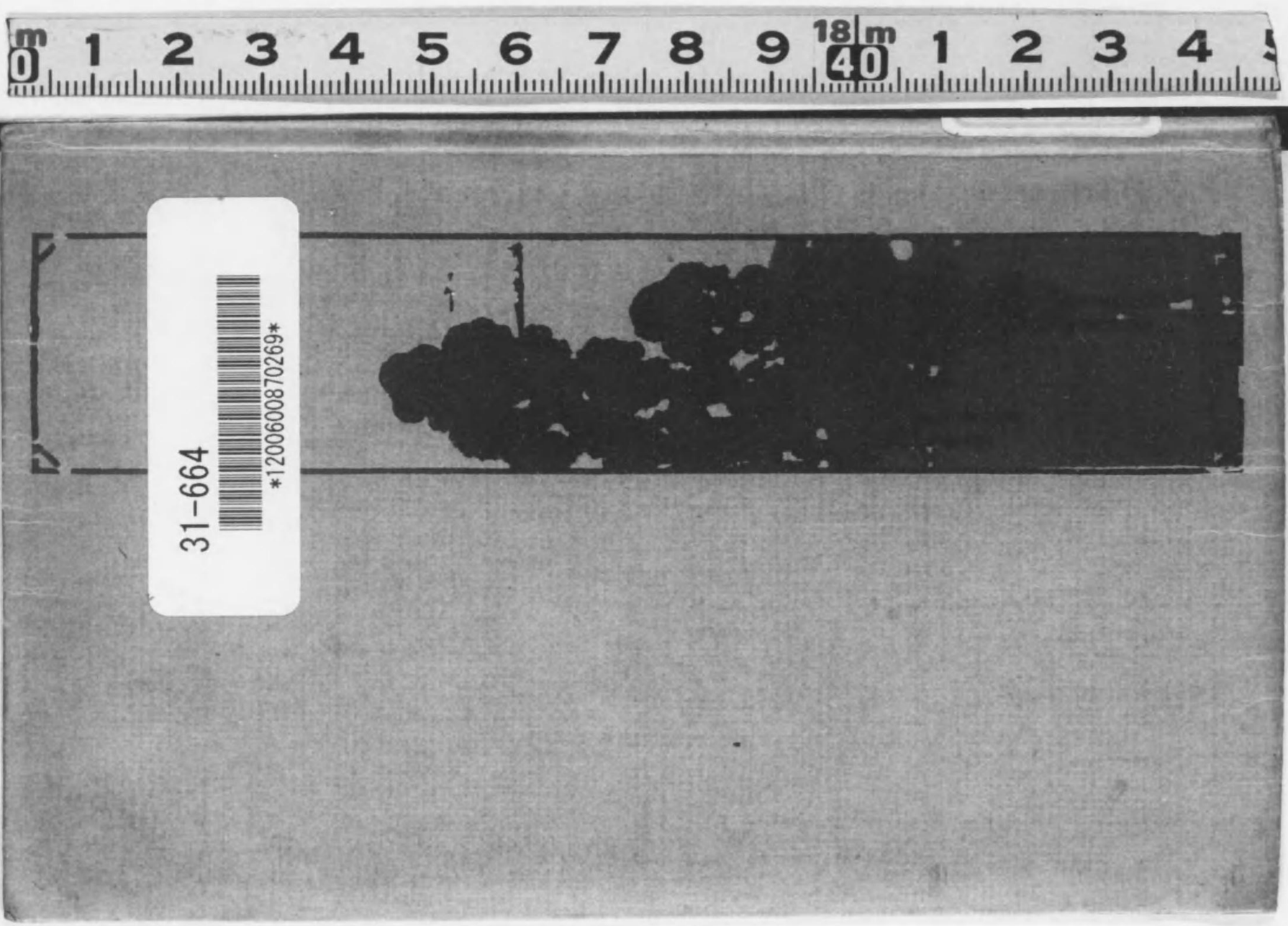

31-664
*1200600870269*

# 日曜日の散歩

前田　晁　譯

# 例言

一　原作者モウパッサンの小傳と文學史上に於ける位地とは、曾て『モウパッサン集』を公けにした時に、及び『歐洲近代小說家研究』を講說した時に、其の概略を述べて置いた。それ故茲にまた改めて繰返すことはしない。けれども、思ふに彼の爲人と閱歷と、そして其の作品の價値とは、最早繰返すには及ばぬほどに世間周知の事であらう。確に彼はそれほど世界的の作家である。



31
664
I種
W
*1200600870269*

一　『日曜日の散歩』は "Les dimanches d'un Bourgeois." の譯である。この Bourgeois といふ言葉は、凡庸な思想を有する中流人とでもいはんほどの意味を持つてゐる。日本には適當の譯語がない。『平凡人の日曜日』『中流人の日曜日』『一紳士の日曜日』などと、いろいろ試みて見たが、何れもぴたりと當てはまるとは思はれなかつた。それ故其の主人公が、日曜日毎にパリの郊外や市中を散歩するといふ作中の事實に依つて、『日曜日の散歩』といふ題にした。この作は其の形式に於いても、また作者の思想のあらゆる世間



の事象に廣く及んでゐる點に於いても、彼の作中でユニックの地位を占めてゐるものである。全體に漂つてゐる深いユウモラスな味ひが、中んづく譯者を喜ばせた。信ずらくは讀者をもまた喜ばすであらう。

一　其の餘の四篇の短篇も、それ〴〵に作者の觀照の多方面に渉つてゐた事を示すものとして譯者は選んで添へた。悲劇の底に潜む人性の種々相に對する彼の鋭い洞察と、徹底した批判と、それらにあたゝかい脈搏を與へた情熱と、そしてそれを澱澥と生かした鮮かな表現と、彼が短篇作家としての特色は、其

の何れを見ても容易く領くことが出來るであらう。

大正七年五月十一日

譯者



# 目次

日曜日の散歩……三
一　遠足の準備……三
二　最初の遠足……二一
三　訪問……四三
四　釣……六一
五　二名家……七九
六　祭の前……九九
七　悲しい話……一一六

八　戀の試み……一三五
九　晩餐會……一五〇
一〇　公衆大會……一七五
歸　村……一九五
棄てられた人……二二一
墓……二五七
聾爺さん……二七五



# 日曜日の散歩

# 日曜日の散歩

## 一、遠足の準備

パリで生れたパチツソ君は、アンリ四世大學を落第したので、煙草屋をしてゐた一人の叔母のお蔭である官省に奉職した。その省の屬官長が其處で煙草を買つてゐたのが手蔓となつたのだつた。彼の昇進はずゐぶん遲かつた。もし我々全體の上に氣をつけてゐる神の加護に依らなかつたら、彼は恐らく四等屬で一生を終つたであら

う。

五十二歳位になつた時に、彼はやつと遊歴者として、パリの城壁と本當の田舍との間に挾まつてゐるあのフランスの地方を探檢しはじめたのだつた。彼の昇進の履歴が多數の屬官達に有用であるかも知れぬと同じやうに、彼の遠足の叙述は小旅行を試みようとする多くのパリ人の參考になつて、不意に起つて來るさま〳〵の災難を避けさせることが出來るかも知れない。

千八百五十四年に、パチッソ君は一年にたゞ千八百フランを貰つてゐた。彼の一風變つた性質が上官の受けを惡くする種となつて、增俸といふ屬官の理想は、いつまで經つても望みのない待ちぼけと



なつてゐたのだつた。

彼は忠實に務めてゐたが、游泳術を知らなかつた。尤も自分では自尊心が强いのでそんなことはしないのだと言つてはゐたが。そして彼のいふ自尊心は、名さしては言はなかつたある同僚達のやうに、上官の前で腰を下げてお時儀をしないといふことであつた。彼はまた自分の無遠慮が多くの人を困らしたともいつてゐた。なぜなら、他のすべてのことゝ同じやうに、彼は其の省の事に不案内な外部の者に示された不正な事や依怙贔屓やを忌憚なく批評したからだと。けれども彼の憤怒の聲は彼が務めてゐた小さな部屋の戸から外へは決して出なかつた。

初めは屬官として、次ぎにはフランス人として、しまひには地位ある人として、彼は主義から轉じて次第に形式づくめのお役所風に固まつた。そして自分の上官以外の者の持つてゐる權力に對しては宗教的な尊敬を持つやうになつて來た。

彼は機會のある度毎に、皇帝の通御の見られる所に立つて、帽子を擧げるの光榮を得ようとした。そして國家の元首にお時儀をしたといふことを頗る得意にしながら立ち去るを常とした。

度々君主を仰いだ後で、彼は多くの市民の例にならつた。彼は陛下の髯の刈り方を、上衣の仕立て方を、髮の毛の恰好を、歩き方を、その癖までも眞似た。——あらゆる國に於いていかに多くの人々が



時の君主の複製に見えることぞ！　實際彼はまた幾らかナポレオン三世に似てもゐた。けれども彼の髮の毛は黑かつた。で彼はそれを染めた。すると目に立つほどに似寄つて來た。彼は往來などで、やはり君主に似てゐる男に出會ひでもすると、嫉妬を起して輕蔑するやうに其の男を睨みつけた。

ある高貴の人をまねるといふその欲望が、彼には病氣のやうになり出した。そしてチユイレリイ王宮の門番が皇帝の言葉つきを眞似してゐると聞くと、彼もまた次第に陛下の聲の抑揚を取り入れたりそののびやかな所を工夫したりした。

彼はたうとう人々がともすれば取り違へさうなほどにモデルと同

じになつた。省内の多くの人々は、高等官達でさへ、似てゐることに氣がつき出した。そしてそれを不埒な愚劣なことゝさへも見做してゐた。彼等がその事を大臣に話をすると、大臣は屬官を目の前に呼んで見た。所が大臣は皇帝そつくりなこの男を目にすると共に、噴き出して笑ひながら、幾度も繰り返した。「これは面白い、いや、本當に面白い！」と。この言葉があたりに響き渡つたので、次ぎの日パチッソの直接の上官は自分の部下の爲めに三百フランの增俸を申請した。それは直ちに許された。その時から、彼は猿眞似の力のお蔭で、きまつて昇進した。のみならず彼の上官達は、何か高い名譽がいつかは彼の身に來るかも知れぬと想像するやうになつて、



丁寧に彼に挨拶した。

所が共和政治が布告されると共に思はぬ不幸がやつて來た。彼は全く打ちのめされたやうな氣持がしてすつかりまごついた。彼は髭の毛を染めるを止めたり、皇帝の髯を剃り落したり、髮の毛を短く刈つたりして、そして極めて野暮な人の氣に觸らぬやうなおとなしやかな樣子を作つた。

すると上官達は長い間誤魔化されてゐた復讐をしやうとした。そして、自己保存の本能から共和黨になつて、彼をいぢめたり其の昇進を遲らしたりした。彼もまた政治上の信念を變へたけれど、共和政治は人がそれに似寄りを持つことの出來るやうな生物ではなかつ

たので、そして大統領は矢継ぎ早やに更迭したので、彼は全く戸惑ひして模倣の本能にも見限られたやうな氣持がした。一つは、最後の理想であつたチエエル氏を眞似ようとする企てが全然失敗したからでもある。けれども、彼の獨得な想像は、絶えず彼に新機軸を出させようとした。彼は長い間熱心に考へた擧句、ある朝新らしい帽子の右側に小さな三色のばらの花の徽章をつけて役所に現はれた。同僚達は驚いたが數日の間は嗤つてゐた。所が彼の態度のまじめな事がたうとう彼等を畏れさせて、またもや上官達は氣にかけ出した。どういふ秘密があのばらの花の徽章のうしろに潜んでゐるか？　それはたゞ愛國心の表章だけで、共和政治に與してゐるといふ確證だ



けであるか、それともある有力な團體の秘密な記號であるか？

いかにもしつこく彼がそれを附けてゐたので、同僚達は屹度何か隠れた有力な後ろ立てを持つてゐるのが上分別だと決心したが、取り分け彼等は兎に角氣をつけてゐるのが違ひないと考へた。そこで彼がぢつと落ちつき拂つて、彼等のいたづらを柳に風と受け流してゐたのが一層氣味を惡くした。彼等が深く用心して彼をあしらつたので、兎かうするうち彼の膽の勇氣が彼を救つた。なぜなら、千八百八十年の一月一日に、彼は一等屬に任命されたからである。

彼のこれまでの生涯は室内で過された。彼は騷々しいことを嫌つたので、閑靜を愛する爲めに獨りでゐた。彼は冒險譚やはやりの安

本などを讀んで日曜日を暮らしては、それらの話を同僚に受賣りするのを例とした。これまでの生涯のうちに彼はたゞ三度だけ、新らしい寓居へ移る爲めに一週間づゝの休暇を取つた。たまには祭日などに、パアヴルかディエプかへの廻遊列車に乘つて、浩然の氣を養ふ爲めに太洋を眺めに行つたこともあつた。

彼は一歩すれば愚鈍に陷るやうなあの常識に富んでゐた。長い間用心深い心から身を節したり、氣質で情慾を抑へたりして、ひつそりとつましく暮らしてゐたが、ふと病氣に罹りはしまいかといふやうな薄氣味惡い懸念に襲はれた。ある晩往來でふら〳〵と眩暈がすると、卒中にやられはしまいかと恐ろしくなつた。彼は醫者の所へ



行つて、五フランで次ぎの診斷書を貰つた。

一、パチツソ氏、五十二歳、屬官、獨身。
一、充血質、卒中の徴候あり。
一、冷水浴の適用、節食、十分の運動をなす事。

醫學博士　モンテリエ

パチツソは殆んど氣拔けしたやうになつて、其の翌月はずつと一月の間、濡れたタオルを頭巾のやうにぐる〳〵と頭に卷きつけたままで役所で事務を執つてゐた。と、それから水の雫がぽたり〳〵と仕事の上に落ちて、彼にまた始めからすつかりやり直さなければ

ならなくさせた。ちよつとした隙でもあれば、彼は何か隠れた意味を見出すことが出來ればよいと思ひながら、診斷書を讀み返し讀み返した。そして確に卒中の豫防が出來ると思はれるやうな運動の種類を決めようとした。

彼は友人達にも相談して、その厄病紙を彼等に見せもした。と彼等の一人が拳闘はどうかと言つた。彼は直ぐに教師を搜しまはつたが、其の最初の日にひどい一撃を受けるとすつかり嫌つて、この強健法を永久に見はなした。撃劍は二た晩も眠られなかつたほどに彼をしびれさせたのみならず、棒一本の立ちまはりが彼を半死半生の目に遭はせた。不意に彼は妙案を思ひついた。それは日曜日毎にパ



リの郊外や、まだ知らなかつた市中の方面などに長い散歩をすると いふことであつた。

まる一週間の間、彼はこれらの小旅行の爲めに適當な支度を調へる方法を考へてばかりゐた。そして五月の最終の日に當つた日曜日に、始めて其の準備に取りかゝつた。貧乏な、目つかちな、でなければびつこの奴等が往來で配つてゐる變な廣告を皆な讀んだ後で、彼は方々の店へちよつと見てまはるつもりで行つた、買ふのは最少し後にしやうと思ひながら。彼は最初に所謂アメリカ靴屋へはひつて行つて、厚い散歩靴を見せて呉れと言つた。番頭は一面に釘で打ちつけてある、まるで甲鐵艦のやうな恰好をした新形を持ち出して、

これはロッキイ山の野牛の皮で造つた品だと説明した。彼はいかにもそれが氣に入つて、一度に二足買つてもいゝと思つたほどだつた。けれども一足で用が足りたので、其の代價を拂ふと、包を小脇に抱へて店を出た　所が中々重くて跛を引いた。

彼は大工が穿くやうな綿絨製のズボンを買つた。そしてまた膝まで届く重いリンネルのゲエトルを。彼はまだ糧食を入れる背嚢と、小山の斜面に點在してゐる遠くの村々を偵察する爲めの双眼鏡と、畠に働いてゐる百姓達に尋ねなくとも濟むやうにする爲めに、參考になる正確な地圖とを要した。

次ぎには、暑さを凌ぐことの出來るやうに、輕いアルパカの上衣



を買ふことに決めた。それは有名なラミノオ商會で、六フラン半の廉價で賣ると廣告してゐた。

彼は其の店へ行つた。すると指の爪のばら色な、髪の毛の房々した、愛想のいゝ微笑を浮べた背の高い若者が彼に望みの上衣を見せた。それは廣告の文句に合つてゐなかつた。バチッソはもぢ〳〵しながら訊いた。

『これは本當によくもつかねぇ？』

若者は客を騙したくはないと思つてゐる正直な賣子がさも困つた時のやうな樣子を巧みに作つて、内所話でもするやうに聲を低くしながら言つた。

『まあ！　旦那、積つても御覽なさい、六フラン半では、例へば、かういふやうなお品は、迚も差上げることが出來るものぢやアございません。』

かう言ひながら彼は前のよりはずつと上等な上衣を出して見せた。

それを仔細に見た後で、バチッツは直段を訊いた。十二フラン半であつた。彼はそれが欲しくなつた。けれども腹を決める前に、彼をぢつと見守つてゐた番頭にもう一度訊いて見た。

『ぢやあこの方は請合ふね？　本當に上等なんだね？』

『はい、それはもう上等ですとも、でございますが濡らしてはいけ



ませんですよ！　もし上等なお品がお入用でしたら、こちらになすつたが宜しうございます。はい、お品はいろ〳〵あります。が、其のお直段ではそれが一等です。十二フラン半は、勿論、ごくお安いんで。それはもう、二十五フランもお出しになれば、ずつとお宜しくなります。が先づこのお直段では、ごくもう上等なお品で、本羅紗のやうにお丈夫で持ちはずつとお宜しうございます。濡れましても、ちよつと壓しをしますと、また新らしいやうになります。決して色は褪めませんし、本羅紗よりも暖かでそれでゐて輕うございます。』

かう言ひながら若者は其の品物を手に取つて、皺くちやにしたり、

振つたり、伸ばしたりして、其の質のいゝことを見せようとした。彼はきつぱりと物を言つて、言葉と身振りとで客の疑ひを吹き散らした。バチツソは其の上衣を買つた。すると愛想のいゝ賣子は包を結へながらも、なほ其の品物の値打を褒めてゐた。代價が拂はれた時に彼は不意にしやべるのを止めた。そして晴々とした微笑を浮べて、戸を支へてゐる間愛想よく頭を下げながら、客が、バチツソ君が、いろいろな包を抱へて、帽子を擧げようとしたが擧げることも出來ずに出て行くのを見守つてゐた。

家に歸るとバチツソは地圖を調べたり、氷靴ほどに重さうな例の甲鐵靴を穿いて見たりした。と、彼はすべつて轉んだので、以來は



もつと氣を付けるやうにしようと心に誓つた。それから彼は買物を椅子の上に陳列して、長い間それをぢつと見てゐたが、最後にしみ〴〵とかう思ひながら寢床に就いた。

『何といふ不思議だらう、今まで遠足しやうと考へもしなかつたのは！』

## 二、最初の遠足

バチツソ君は其の週の間、次ぎの日曜日に出掛けようと計畫して

ゐた遠足のことを夢みながらぼんやりと働いてゐた。彼は田舍や、綠の木々やに對する不意のあこがれに捉はれた。そして春の季節にあらゆるパリ人に起つて來るやうな田舍の景色を見に行かうといふ欲望が彼の身内に漲り渡つた。

彼は土曜日の晩早く臥床に就いて、そして夜明け方に起き出でた。彼の窓は、暗くて狹い鑛山の竪坑のやうな庭に開いてゐたので、其處から下の貧乏な家族のいろんな臭氣がみんな浮び上がつて來た。

彼は直ぐに屋根の間に見えてゐた空の狹い一角に目をやつて、そしてそれが深碧に澄んで日光で充ちてゐたのを見た。



燕が絶えず其處をひらりと飛んでゐた。けれども彼等の姿はたゞちよつとの間しか見られなかつた。彼はあゝいふ高い所から、彼等は屹度田舍や、こんもりとした小山の綠の簇葉や、地平線の大きな廣がりやを見ることが出來たであらうと考へた。

涼しい木の葉の間をぶらつかうといふあこがれがむら〳〵と彼に起つて來た。そこで手早く着物を着て、重たい靴を穿いて、そして彼には新らしくて不思議であつたゲエトルの紐を締めるに澤山の時間を費した。背嚢を背中に括しつけてから（それは肉や、乾酪や、葡萄酒の壜やで一ぱいであつた。なぜなら慣れない運動で屹度腹が減るに違ひないと思はれたから）、彼はステッキを手にして出發した。

彼はきまつた歩調を取つて（兵士のやうだと、彼は思つた）、其の歩みを輕くした快活な歌の節を口笛で吹いてゐた。人々は振り返つてぢつと彼を見送つた。犬は彼に吠えた。馭者は、『ジュモレさん、まゐりませう、』と呼びかけた。けれども彼は一切お構ひなしで、得意さうにステッキを振りまはしながら、元氣よく進んで行つた。

都は麗らかな春の日の光と暖かさとのなかに目を覺ましつゝあつた。家々の前面はきら〳〵と照り輝き、カナリヤは籠のなかで囀りかはし、歡喜は空中に充ち滿ちて、あらゆる事物に對して萬遍なく滿足の色を浮べてゐる通行人の顏を照らしてゐた。

彼はサン・クルウ行きのボウトに乘らうとセイヌ河の方へ向つて



歩いた。通行人の目を丸くして見る好奇心のうちに、彼はショウッセ・ダンタン街や、並木道や、ロワイヤル街やを辿つて行きながら、心の中では『さまよひ歩くユダヤ人』に自分を比較してゐた。小溝を越える時に、ふと靴の釘がすべつて、彼は背嚢のがら〳〵といふ恐ろしい音と共に地上に倒れた。通行人が彼を助け起して呉れた。と今度はずつとゆつくりした歩調で歩みを續けた。河へ着くと彼はボウトを待つてゐた。

彼はそれが橋の下に近づいて來るのを見守つてゐた。初めはごくちつぽけに見えてゐたが、だんだん大きくなつて、遂にはそれが彼の心に、知らぬ國民を訪ねたり、慣れぬ景色を見たりする爲めに、

海を越えて行く長い旅にと彼を連れに來た大洋の汽船とも思はれたほどに大きくなつた。ボウトが波止場へ横附けにされると、彼は乘り移つた。晴れの衣裳を着た、大きな赤ら顏の女達が、けばけばしい外衣や派手なリボンやに飾り立てられて、其處にも此處にも坐つてゐた。

バチッソは船首の方へ行つて其處に立つた、汽船にはさも慣れ切つてゐるといふやうな樣子を作る爲めに、水夫のやうに、足を擴げながら。けれども彼はボウトの縱搖を恐れたので、ステッキの上にしつかりと凭りかゝつて、旨く身體の釣合を保たうとした。

ジユウル橋を過ぎると、川は廣くなつて、眩しい日光の下に靜か



に流れてゐた。やがて、二つの島の間を過ぎると、ボウトはこんもりした小山をまはつた。其處には澤山の小さな白い家が木の葉の間から覗いてゐた。バムウドン、セエヴル、サン・クルウと叫ぶ聲を聞いて、バチッソは上陸した。

波止で、彼はまた地圖を開いて見た、やりさうな間違ひをしないやうにする爲めに。所が、何もかも全く分りきつてゐた。彼はたゞセルへ出る道を取りさへすればよかつた。其處から最初左へ曲つて、次ぎに右へちよつと曲れば、後は自然とヴエルサイユへ着くであらう、丁度晝飯前に公園を見物するやうな註文通りの時間に。

道は阪が多かつたので、バチッソは饅食の重みに押しつぶされて、

せいせいと息を切つてゐた。脚はゲエトルの爲めに痛み、厚い靴は鑄鐵のやうに重たく感ぜられた。不意に彼はがつかりしたやうな身振りをして立ち止つた！　あまり出掛けにあわてたので、双眼鏡を忘れたのであつた！

やつと彼は森へ來た。と、恐ろしく暑いのも、たら〳〵と汗が顏を流れるのも、身支度の重いのも、背嚢のがた〳〵と跳り上がるのも構はずに、駈足で、といふよりも寧ろ躍行で、丁度年老いて衰へ果てた馬のやうに、綠の木立の方へ飛び込んだ。

彼は氣持のいゝ涼しい木蔭にはひつて、路傍に生えてゐた無數の小さな花をなつかしさうにぢつと見た。長い莖の上に咲いてゐるそ



れらの花はいかにも可憐に見えた。そしてあるものは黃いろく、あるものは青く、あるものは灰藍色で、みんな違つてゐた。色々の色と形とをした昆虫が、長いのや、短いのや、不思議な恰好をした、小さくて恐ろしい怪物共が、其の身の重みで草の葉を曲げながら、やつとこさで登りつゝあつた。とバチッソはまじめになつて造化の妙を讃へはじめた。けれども疲れてゐたので、彼は坐つた。

彼は一と口やりたくなつた。所が饅食を調べて見ると、其の體たらくに驚かされた。一本の壜が彼の倒れた時に碎かれて、中身が、油布から出口を見付けることが出來なかつたので、食物の全部を葡萄酒のスウプにしてしまつた。

けれども、彼はいろ〳〵にからかつて、念入りに拭いた羊の脚の冷肉を一切れ、ハムを一切れ、酒が浸みて赤くなつたパンの幾片かを食べた。そしてまづさうなピンク色の泡で蔽はれた醱酵した赤葡萄酒で渇きを止めた。

二時間ばかり休んでから、彼はまた地圖と相談して歩き出した。

いつの間にか、全く思ひがけない四つ辻に出た。彼は太陽を眺めたり、自分のゐる所を見定めようとして見たり、考へ直して見たり、道を表はしてゐる地圖の上の澤山の細い十字線を研究したりして、たうとう路を迷つたといふ結論に達した。

彼の前には、草の中に隠された白い雛菊を照らしてゐる日光の雫



で斑にされた、人の心をそゝのかすやうな路が横はつてゐた。それは果てしもないやうに見えた。そして全くしいんとしてゐて淋しかつた。

たゞ一匹の土蜂が樂しさうに遊びまはつてゐた。折々一つの花の上にとまるかと思ふと、忽ちまた其處を去つて新らしい休息所へ移つた。その肥つた身體は、小さな透明の翼に支へられて、黄色で縞を付けられた鳶色の天鵞絨のやうに見えた。パチッソは鋭い興味を以てそれを見守つてゐた。と何かが足許で動いた。最初彼はびつくりして脇へ飛びのいたが、氣を付けて屈んで見ると、それは胡桃くらゐな一匹の蛙がすばらしい飛躍をしてゐるのであつた。

彼は屈んでそれを捕へようとした。所が蛙は指の間からすべり抜けた。今度は、ぬかりのないやうに氣を配りながら、彼は兩手と膝とを突いて、そろ〳〵とそれの方へ這ひ寄つた。まるですばらしく大きなよた〳〵な海龜が背中に背嚢を背負つたやうな恰好に見えた。彼は小さな生物に間近くなつた時に、攻撃の身構へをして、ぐつと兩手を突き出した、と、鼻をぴしやりと草につけてへたばつた。そしてやつと身體を擡げた時に二た握りの泥を掴んでゐたが、蛙はゐなかつた。彼は長い間それを捜してゐたが、何の甲斐もなかつた。

彼は起き上がるや否や、遙か向うに、彼の方へ來ながら何か相圖をしてゐる二人の人影を認めた。女はパラソルを翳してゐた。男は



上衣を脱いでそれを腕にかけてゐた。やがて女は、『もし！　もし！』と呼びかけながら走り出した。

彼は額を拭きながら答へた。

『何です！』

『あなた、わたし達は迷つたのです、確に迷つたのです。』と女は彼に近づくと言つた。

同じ白狀をするのはいかにも恥かしいやうな氣持がしたので、彼はまじめ臭つてきつぱりと言つた。

『あなた方はヴエルサイユへ行く道にゐられるのですよ。』

『え、ヴエルサイユへ行く道に？　飛んでもない、わたし達はリユ

イユへまゐるのですよ。』と彼女は言つた。

彼は不意を打たれて面食つたが、でも落ちついて答へた。

『奥さん、わたしは地圖で證明しませう、あなた方が本當にヴエルサイユへ行く道にゐられることを。』

夫が近づいた。彼はがつかりした、困つたやうな様子をしてゐた。若くて美しい髪の毛の薄黒い彼の細君は、夫がそばへ來るや否や猛り立つた。

『本當にあなたは何をなすつたのですよ！　これはヴエルサイユへ行く道ですよ。あの方があなたに見せて下さらうといふ地圖を御覧なさい。讀めますか？　本當に！　本當に！　なんといふどぢな人



があるんでせう！　だからわたしが右へ曲るんだと言つたぢやありませんか？　それだのに聞かうともしないで、いゝえ、あなたは何でも知つてゐると思つてるんです！』

可哀さうなやつこさんはひどくばつの惡さうな様子をしながら答へた。

『だつて、お前、それはお前が……』

彼女は夫に言葉を續がせなかつた。そして結婚してからこの時までのありとあらゆる不幸を持ち出して彼を罵り初めた。所が男は絶えず失望したやうな目付を森の方へ投げたり、心配さうに小徑をすかして見たり、折々『チユイ』とでもいふやうな何やら鋭い聲音を發

したりしてゐた。それは細君の心を動かすやうには見えなかつたが、バチッソはすつかり驚かされた。

不意に若い女は、にこ〳〵しながら一等屬の方へ向いて、言つた。

『誠に濟みませんけれど、どうぞわたし達にお供させて頂けませんか。さうしましたら道を迷つて森の中に寢なければならないやうなこともございますまい。』

バチッソは旨く斷ることが出來なかつたので、詮方なしに頭を下げたが、先きのことを思ふと氣味が惡かつた。それに何處へ二人を導いてよいかも知らなかつた。

彼等は長い間歩いた。男は絶えず『チュイ』と叫んでゐた。と、たうとう暗くなりかけた。たそがれ時に田舍の空を低くさまよふ霧のヴェエルがそろ〳〵と下りて來て、日暮に森を充たす氣持のいゝ冷氣が大氣に特別の魅力を添へた。若い細君はバチッソの腕を取つた。そして彼女の赤い唇は夫にのべつ非難を浴せてゐた。夫は何の答へもせずに、ます〳〵聲高に『チュイ』と呼びつゞけてゐた。たうとう肥つた屬官は訊いた。

『何をそんなに呼ばれるのですか?』

男は眼に涙を浮べながら、答へた。

『犬を失くしたのです!』

『え、犬をお失くしなすつた?』

『えゝ、わたし達はそれをバリで育てましたので、これまで田舍へ來たことがなかつたのです。ですから木の葉を見ますと、まるで氣違ひのやうになりました。そして森の中へ駈け込んだきり少しも姿が見えないのです。屹度其處で餓えて死ぬでせう。』

若い細君は肩を聳かした。

『人間があなた見たいにどぢだと、犬を守ることも出來ないんですよ。』

所が男は不意に立ち止まつて、身體ぢゆうゲ探り初めた。女は暫く彼を見守つてゐたが、やがて訊いた。

『ねえ、どうしたんですよ?』



『わたしは上衣を腕にかけてゐたことを忘れてゐた。財布を失くしたんだよ、金のはひつたまんま。』

この事件の回轉で女は口も利けないほどに腹を立てた。やつと彼女は言つた。

『さあ、直ぐに引返して搜してお出でなさいよ。』

やさしく彼は答へた。『うむ、さうしやう、だが何處で會ふことにしやう?』

パチツソは大膽に答へた。『ヴエルサイユで。』

そして彼は人の話に聞いてゐたレゼルヴオアルホテルの名を言つた。

夫は踵を返して、歩きながら心配さうに地面をすかして見たり、絶えず『チユイ』と叫んだりしてゐた。間もなく彼の姿は見えなくなつた。たうとう彼は暗闇のなかに消えてしまつたが、彼の聲はなほ遠くの方で悲しさうに『チユイ』と呼ぶのが聞えてゐた。其の呼び聲は、小徑がだんだん暗くなつて希望がだんだんかすかになるにつれて、いよ〳〵鋭くなつて來た。

パチツソは、たそがれといふ神秘的な時間に、森の中には、自分の腕にまとひついてゐるこの小さな變な女と二人きりでゐるのだと氣が付いた時に、ふと樂しい心の動くのを覺えた。今まで自分ばかりを立て通して來た彼は、始めて詩的な戀の、甘い降服の魅力の、そ



して我々の愛情に於ける自然の干與の暗示を受けた。彼は何か適當な、女の氣に入るやうなことを言はうと空しく腦漿をしぼつた。所が二人はある村道に近づいてゐて、右手に三四の家を見た。と一人の男が通りかゝつた。パチツソは此處の名前をおづおづと訊いた。男はブウジヴルだと言つた。

『え、ブウジヴル？　ほんとですか？』

『さう思ふね！　わしは此處に住んでるのだから。』

若い女は騷々しいほどに笑つてゐた。夫が道に迷つてゐるといふ考が彼女を愉快で充たした。パチツソは水に臨んだ田舍料理店を見付けたので、二人は其處で食事をした。女は愛嬌があつて、快活

で、連れの頭をぽつとさせるやうな面白い話を澤山持つてゐた。去るべき時となつた時に、彼女は叫んだ。

『あら、わたしすつかり忘れてゐた。わたしおあしを一錢も持つてゐませんのよ。うちの人が財布を失くしたのをあなたも御存じでせう。』

パチッソは直ぐに自分の財布を取り出した。そしてこれより少くは貸せないと考へながら、一ルイの金貨を引き出した　彼女は何も言はなかつたが、手を伸ばしてそれを取りながら、品のある、『ありがたうぞんじます、』を言つてから、可愛らしくにつこりと笑つた。やがて彼女は鏡の前でボンネットの紐を結んで、今はもう道が分つ



たので御一緒を願はなくともよいと斷つたかと思ふと、消え行く鳥のやうに出て行つた、後にはパチッソを彼の遠足の費用を悲しさうに支拂ふ爲めに殘しておいて。

彼は嘔き氣のある頭痛の爲めに翌日はうちにゐた。

## 三、訪　問

一週間の間、パチッソは彼の話を聽かうとするものには誰にでも其の冒險の話をした。彼が訪ねた場所を詩的に叙述したり、同僚が

思つたほどに熱心にならないのに腹を立てたりしながら。たゞ『ポアロオ』と綽名のついた老鵬官のポアヴン君だけは、全幅の注意を拂つて聽いた。彼は田舍に住んでゐて小さな花園に一方ならず身を入れてゐた。彼は小成に安んじて遺憾なく幸福であるといはれてゐた。バチッソは今や彼を理解することが出來た。そして趣味を同じくするといふことが彼等を親友にした。この芽ぐみかけた友情を篤くする爲めに、ポアヴン爺さんはコロンブにある彼の小さな家で次ぎの日曜日に晝飯を食べるやうにと彼を招いた。

バチッソは八時の汽車で行つた。そして長い間捜した後で、やつと其の町のまつたゞ中に、兩側の高い壁で圍まれた不潔な露路のや



うな暗い街を見出した。其の端れに、二本の釘のまはりに卷き付けた絲で結へた黴びた戸が見えた。彼はそれを明けた。と、何とも名づけることの出來ないやうな生物に、樣子だけは女らしいものに顏を合はせた。彼女の身體の上部は汚ないショオルに包まれて、臀のまはりにはぼろ〳〵のスカアトが垂れてゐた。そして亂れた髪の毛は鳩の毛で一ぱいになつてゐた。彼女の小さな灰色の眼はじろ〳〵と無愛想にも客を見た。暫くしてから彼女は訊いた。

『何か御用かね？』

『ポアヴンさんは。』

『此處だよ。何かポアヴンに用があるのかね？』

パチッソはとちつて、へどもどした。
『えゝ、……わたしを待つてゐる筈ですが。』
彼女の樣子は一層烈しくなつて、そして答へた。
『おゝ！　お前さんかね、お前さんが晝飯を食べに來るといふ人かね？』
彼は吃りながら、『さうです。』と聲を震はせた。
と、家の方へ向いて彼女はがなつた。
『ボアヴン　人が來たよ！』
ボアヴンは直ぐに『行火』のやうな物の恰好をした、錫で蔽はれた漆喰造りらしい戸口に現はれた。彼は汚ない白いズボンを穿いて、



煤けた麥稈帽子を冠つてゐた。彼はパチッソと握手してから、自慢に花園と呼んでゐた所へ連れて行つた。それは家々に取り圍まれたハンケチほどの大きさの狹い地面であつた。太陽は毎日たゞ二三時間しか其處を照らさなかつた。この暗い井戸の中に生えてゐた三色菫と、カアネエションと、三四株のばらの木とは、屋根を照らす太陽の反射を受けて爐のやうに熱してゐた。
『木はないがね、』とボアヴンは言つた。『高い壁が丁度同じことをしてゐるものだから、此處は森の中のやうに蔭になつてゐるんですよ。』
と、彼はパチッソの腕に手をかけながら、言つた。

『君、一つ助けて呉れませんか？　君が見たあの婆さんね、……あれが中々一と通りぢやアないんですよ。尤も君はすつかり聞きませんでしたね、まあ晝飯までお待ちなさい。そこでですね、あれはわたしを内にゐさせる爲めに、役所着は仕舞ひ込んで、町には迚も着て行かれないやうな汚ない着物ばかりあてがふんですよ。今日はまあちやんと着てゐますがね、これは君が來ることを話したからですよ。いゝですか。所で、わたしはズボンを汚なくしやアしないかと思つて、花に水をやることが出來ないんですがね。もしそんなことでもしようものなら、それこそわたしは追ひ出されます！　わたしは君がわたしの爲めにそれをして下さりはしないかと思つてゐたの



ですがね。』

バチッソは承諾して、上衣を脱ぎ、兩袖をまくり上げて、ボンプを動かし初めた。それは肺病患者のやうにぜいぜいと喘いで、彼の小指ぐらゐな太さの水の流れを出した。容水鑵を充たすのにも十分はかゝつた。バチッソは汗をぼた〳〵と流してゐた。ボアヴンは彼のすることを指圖した。

『此處で、この草にかけて下さい……もう少し。それで澤山！　今度はこれに。』

鑵が漏れて、バチッソの足には花よりも餘計に水がかゝつたので、ズボンの端は泥まみれになつた。少くとも二十遍彼は行つたり來た

りした、びた〳〵に足を濡らしながら、そしてポンプの柄を動かした時はいつでもだく〳〵と汗を流しながら。そして彼が疲れ果てゝやめようとすると、ボアヴン爺さんは彼の袖を引いて、言譯するやうに言つた。

『もう一杯、たつた一杯だけ、それで澤山ですから。』

報酬として、爺さんは滿開のばらの花を呉れた。所がそれがバチツソの上衣に觸れるや否や、みんな花瓣が落ちて、ボタンの孔には綠色の梨みたやうなものだけが殘つた。これは少からず彼を驚かしたけれども失禮だと思つたので、彼は何も言はうとはしなかつた。ボアヴンは氣が附いたやうにも見えなかつた。



不意にボアヴン婆さんの聲が鳴り渡つた。

『さあ！　來ないのかね！　支度が出來たつて何遍言つたらいゝんだい？』

彼等はまるで二人の罪人のやうにびくびくしながら、『行火』の方へ歩いて行つた。

花園には蔭があつたとしても、家には全くなかつたので、室内の暑さは竈のそれよりもひどかつた。

三枚の皿が、脇にぬら〳〵したフォオクとナイフとが添つて、汚ない木製のテエブルの上に置かれてあつた。そしてそのまん中に、どろどろした液體のやうに浮動してゐるジャガ薯とソッブ肉とで充

たされた皿が立つてゐた。彼等は坐つて食べ初めた。
薄赤い水の一ぱいにはひつた大きな酒の壜がバチッソの目についたっ。ボアヴンは、幾らかきまりが悪くなつて、細君に言つた。
『ねえ、今日はお前少しい丶方の葡萄酒を出す譯にいかないかい？』
彼女は瞼しく夫を睨んで、やがて呶鳴り出した。
『さうしてお前さん達は醉つぱらはうと言ふんだね、一日此處でへべれけになつて？　い丶え、澤山！』
彼はもう何にも言はなかつた。シチウの後で、女は臭い豚の脂でいためたジャガ薯をもう一皿持つて來た。そして默つたまゝでみんなが食べてしまふと、彼女は宣告した。



『これでもうおしまひ。さあ出ていらつしやい。』
ボアヴンはびつくりして彼女を見た。
『今日むしつてゐた鳩はどうしたのかい？』と彼は訊いた。
彼女は臀に兩手を置いた。
『お前さんはまだ足らなかつたのかね？　人なんか此處へ連れて來てさ、内ぢゆうにあるものをみんな食ひ盡さうといふんだね？　わたしが今夜食べなけれやアならないぢやないか？』
二人の男は立つて戸口へ出た。ボアヴンはバチッソの耳に囁いた。
『ちよつと待つて下さい。一緒に出掛けますから。』
彼は次ぎの部屋へ支度をしに行つた。とバチッソは次ぎの問答を

漏れ聞いた。
『二十錢お呉れよ、ね。』
『何にいるんだね？』
『いや、何にいるか知りはしないよ。だが幾らでも錢を持つてゐると、いつも安心してゐられるんだよ。』
彼女は外へ聞えよがしに叫んだ。『いゝえ、お前さんにはやれません。あの人が此處で晝飯を食べたんだから、せめてお前さんの費用ぐらゐは拂ふがいゝさ。』
ボアヴンはバチツソの所へ來た。バチツソは、禮儀を失ふまいとして、お上さんの方へ頭を下げて、吃りながら言つた。



『奥さん……御馳走さまで……有りがたう……』
彼女は答へた。
『それはいゝがね、お前さんあの人を醉つぱらはして連れて來てはいけませんよ。でないとお前さんの爲めになりませんゝ！』
そこで二人は出掛けた。
二人はセイヌ河の方へ歩いて行つて、白楊樹で蔽はれた島の前で立ちどまつた。
ボアヴンはなつかしさうに河を眺めながら友達の腕をぐつと握つた。
『今度の週にはあすこへ行きませう、ねバチツソさん。』

『何處へ行くのですつて、ボアヴンさん？』
『いや、漁獵期が始まるのです。この十五日に始まるのですよ。』
バチッソは運命になるべき女を初めて見る時に覺えるやうな動搖に似た、輕い身震ひを身體ぢうに覺えた。彼は答へた。
『ほう！　ぢやア君は釣をするんですか、ボアヴンさん？』
『わたしが釣をするかつて？　いや、それがわたしの唯一の樂みですよ！』
そこでバチッソは細かく彼に尋ねた。ボアヴンはその汚ない水の中に遊びまはつてゐるすべての魚の名を言つた。とバチッソは自分が彼等を見たやうに思つた。ボアヴンはおの〳〵の種類を捕へるに



都合のいゝ色々違つた餌や、鉤や、場所や、時やを説明した。とバチッソは自分がボアヴンよりも餘計に釣のことを知つてゐたやうな氣持がした。二人は特にバチッソの便宜をはかつて、次ぎの日曜日にこの提案を實行する爲めに出會はうと約束した。バチッソはかういふ經驗に富んだ指導者を見付けたことを喜んだ。
二人はこの邊の漁師や下民などが最眉にしてゐる暗い小屋みたやうな所で食事をした。戸口でボアヴンはさすがにかう言はずに居られなかつた。
『見かけはどつとしませんがね、中は中々綺麗ですよ。』
二人はテエブルに陣取つた。二杯目の赤葡萄酒の後でバチッソは

ボアヴン婆さんが夫に赤くした水を與へた譯を知つた。この男はもう正氣を失ひかけてゐた。彼は無闇にしやべつたり、立ち上がつたり、いたづらをしようとしたり、酔つぱらひの喧嘩の中へ仲裁者としてはひつたりして、もし此處の亭主が中へはひらなかつたなら、パチッソも一緒に殺されたかも知れなかつた。友達が飲ませまいと努めたに拘らず、珈琲の後で彼は立つことも出來なかつたほどに酔つてゐた。そして二人が出掛けた時に、パチッソはひよろ〳〵してゐる彼を導いてやらねばならなかつた。

二人は牧場を横切つて行つた。そして長い間暗闇の中をうろついた後で道を踏み迷つた。不意に彼等は鼻まで屆くほどの高い棒の立



つた叢林の中にゐたのに氣が付いた。

それは葡萄畑であつた。二人は長い間、他愛もなくひよろつきながら探りまはつてゐたが、出口を見付けることが出來なかつた。たうとうボアヴンは一本の棒の上に倒れかゝつて顏を引つ掻いた。そして酔ひどれのしつこさで聲の限りにわめきながら地上に坐つてゐた。パチッソも途方に暮れて助けを呼んだ。

遲くなつた百姓が助けに行つて二人を正しい道に連れ出した。

所が、二人がボアヴンの家に近づいた時に、パチッソはびくつき出した。たうとう二人は戸口に來た。と不意にそれがぱつと開いてボアヴン婆さんが、まるで昔の復讐神のやうに、手に明りを持つて

現はれた。彼女は夫を見るや否やパチッソに飛びかゝりながら叫んだ。

『ぢゝ！　こん畜生め！　貴様があいつを酔はせるだらうと思つてゐた。』

可哀さうなやつこさんは恐ろしさで夢中になつて、友達を露路の泥溝の中に落したまゝ、韋駄天のやうに停車場の方へ向つて走り出した。



## 四、釣

生れて始めて河に餌を投じようといふ前の日に、パチッソ君は八十サンチイムで『理想の漁師』と題する小冊子を買つた。

その中から多くの有益な教へを掻き集めた外に、彼は其の文章がひどく氣に入つて、次ぎの一節を暗記した。

『一言にしてこれを蔽へば、もし諸君が何等の心配も懸念もなしに、しかも何等の失敗をも許さぬ必勝の態度を以て、右なり左なり、上流なり下流なりで釣ることが出來るやうに、そして成功するやうにしたいならば、然らば大雷雨の前、間、及び後に、空は開いて電光を以て織りなされ、地は雷鳴の轟きを以て反響してゐる時に

釣りたまへ。其の時こそ、魚は恐怖の爲めかそれとも貪食の爲めか、平生の習慣を忘れて右往左往に散亂して飛びまはつてゐるのである。

これを要するに、諸君は有利な條件を示してゐるすべての目標を求めてもよければ、また構ひつけなくてもよい。何となれば、諸君は必ず勝利に向つて進軍するにきまつてゐるからである。』

大小いろ〳〵の魚を捕へることの出來るやうに、彼は三本の竿を買つた。それは市中ではステッキと誤魔化せるやうに造られたもので、川へ行つてから、輕くぐいと引けば直ぐに釣竿に變るのであつた。彼は小さな鉤を小魚の爲めに買つた。そして十二號から十五號の大きさでは鯉と鮒とで籠を充たしたいと思つた。地蟲は到る處で



見付けられることを知つてゐたので、買ふことを差し控へたが、砂蟲の用意は十分にした。

其の晩、家で、彼は面白さうに彼等を眺めてゐた。憎げな生物は、腐つた肉に集まるやうに獣風呂の中に群がつてゐた。バチッソは彼等を鉤に付けることを稽古し始めた。彼は氣味惡さうに一匹を摘み出した。所がそれを曲つた鋼の鋭い尖きに付けるや否や、忽ち破れて腸が飛び出した。彼は少くとも二十度は鉤に餌を付けようとしたが成功しなかつた。もし仕入れた品を使ひ盡す虞がなかつたならば、恐らく夜通し續けてゐたであらう。

彼は翌朝一番列車で出發した。停車場は釣竿で武裝された人で一

ばいであつた。中に多少は、バチッツのと同じやうな、ステッキの恰好をした釣竿もあつたけれど、他はみんな一様に、其の細い先きを天の方へ向けて、さながら劔のやうに鏗々と觸れながら混り合つてゐる蘆の林を形作つたり、或は緣の廣い麥稈帽子の海の上で帆柱のやうに搖れ動いたりしてゐた。

機關車が停車場から動き出した時に、釣竿は列車のあらゆる窓から突き出された。それは丁度大きな釘付けにされた毛蟲が野原を通して身體を晒してゐるやうな恰好に見えた。

乘客はクウルブボアで降りた。そしてブゾン行きの乘合馬車に席を占めようとして先きを爭つた。一群の漁師は馬車のてつぺんでふ



らふらしてゐた。そして彼等は手に手に釣竿を持つてゐたので、馬車は俄に大きな豪猪のやうな姿を呈した。

道には何處までも人々がぞろ〳〵と、丁度未知のエルサレムへ行く途上にある巡禮のやうに、一方へ行きつゝあつた。彼等は錫の函を背中に結ひつけたまゝで大急ぎに歩いた。——彼等の搖れ動いてゐる釣竿はパレスタインから歸途に着いた昔の武士の杖にも似てゐた。

ブゾンで河は見えた。土手は人で列を作られてゐた。多くの男はフロックコオトを着、其の他のものは、女も、子供も、若い娘でさへも寬やかな外衣を着てゐた。彼等はみんな釣つてゐた。

パチツソは直ぐに友達のボアヴンが待つてゐる堰の方へ向つて行つた。ボアヴンはやゝ冷淡に彼に挨拶した。彼はたつた今、五十位な、日に焼けた顔付をした、漁のことには何でも非常によく通じてゐるやうに見えた大きな肥つた男と知り合ひになつた所であつた。三人はボウトを傭つて、いつも大抵非常に澤山の魚が見付けられるといふ、堰の落ち口の直ぐ下の所へ陣取つた。ボアヴンは直ぐに用意した。そして鉤に餌をつけるとそれを河へ投げ込んで、ぢつと身動きもせずに、一心になつて、小さな浮標の搖らぐのを見守つてゐた。時々彼は綸を水から引き上げて更にまた遠くの方へそれを投げ込んだ。肥つた男は、旨く餌のついた鉤を投げ込んだ後で、竿を脇



に置いて、パイプに煙草を詰めるとそれに火を點けて、兩腕を組んで、そして、一度もコルクを見やりもせずに、うつとりと水の面を見守つてゐた。パチツソは鉤に餌を付けようとして見たが、餌は其の度毎に破れた。暫く經つてから彼はボアヴンに聲をかけた。

『ボアヴンさん、濟まないがこいつを鉤に付けて呉れませんか？わたしがやつて見ても、旨くいかないんですよ。』

ボアヴンは頭を擧げた。

『邪魔をしないやうに願ひますよ、パチツソさん。わたし達は此處へ遊びに來てゐるんぢやありませんよ。』

けれども、餌は付けて呉れたので、パチツソは友達のやり方を氣

を付けて眞似ながら、それを河の中へ投げ込んだ。

ボウトは、兩端に錨を卸してあつたが、波の爲めに搖られたり、流れの爲めに獨樂のやうにまはつたりして、無闇に搖れた。そしてこの遊びに氣を奪はれてゐたバチツソは、ぼんやりと氣持が惡く眩暈がするやうな感じがしてゐた。

彼等はまだ一匹も釣らなかつた。ボアヴン爺さんはひどく氣を揉み出して、やけに頭を振つてゐた。でバチツソはひどくそれを氣にかけてゐた。ただ肥つた男だけは、綸に少しの注意も拂はずに、ぢつと身動きもせずに坐つたまゝ、靜かに煙草を吹かしつゞけてゐた。たうとう、バチツソは、全く氣が滅入つて來たので、彼の方へ向い



て悲しげに言つた。

『食ひませんか？』

彼は簡單に答へた。

『えゝ、食ひません！』

バチツソはびつくりして彼を見た。

『でも偶には釣れますか？』

『ちつとも！』

『え！　ちつとも！』

肥つた男は、工場の煙突のやうに煙を吐きながら、次ぎの言葉を漏らして、一方ならずバチツソを驚かした。

『まあ、食ひでもしたら、わたしはまつぴらですね。わたしは此處へ釣りに來るのぢやありませんよ、ただ此の場所が好きなんです。あなたはだいぶふら〳〵してゐるね、海の上で、もあるやうに。わたしが竿を持つてゐるのは、他の人達と同じに見せる爲めにさうしてゐるだけですよ。』

バチッソ君は全く反對に、みじめな感じがしてゐた。さいさきの惡かつた、いやな氣持はだん〳〵ひどくなつて、一定の形を取るやうになつて來た。彼は實際大海の上で確に船に醉つてゐでもしたやうな氣持がした。

最初の發作が去つた後で、彼は歸らうではないかと言ひ出した。



所がボアヴンはこの提議にむつとして殆んど糞を味噌に彼をやつつけた。けれども肥つた男は、可哀相な氣がしたので、歸ることを主張した。そしてバチッソの眩暈が癒つた時に彼等は晝飯のことを思ひ出した。

二軒の料理屋が直ぐ近くにあつた。一軒は居酒屋のやうな恰好をしたごく小さな家で、貧乏な漁師達に贔屓にされてゐた。菩提樹亭と呼ばれた今一軒は、田舍別莊のやうな恰好をした家で、上等の漁獵家を客としてゐた。この二軒の主人は、生れながらの敵同士で、互ひに鋭い憎惡の念を抱きながら間を隔つてゐる畑越しに睨み合つてゐた。畑の上には堰番と漁場警吏との家が建つてゐた。これらの

二人の役人のうちで、前者は居酒屋を、後者は田舎別荘を贔屓にしてゐた。そしてそれらの懸け離れた家々の葛藤は全人類の歴史を描き出してゐた。

居酒屋を贔屓してゐたボアヴンは、其處へ行かうとして、かう言つた。

『盛りが素的でいゝんですよ、それやあ。兎に角、パチッソさん、この間の日曜のやうに、わたしを醉はせて下さいますな。家内が怒りましてね、どうしてもあなたを許さぬなんて言つてゐますよ。』

肥つた男は、菩提樹亭でなければ自分は行かないと斷言した。なぜなら、其處はパリの上等な料理屋にも劣らぬやうな料理の出來る



立派な家であつたから、と彼は言つた。

『ぢやア御勝手になさい。』とボアヴンは答へた。『わたしは行きつけの所へ行きますから。』

そして彼は去つた。パチッソは友達が癪にさはつてゐたので、肥つた男に附いて行つた。

二人は一緒に晝飯を食べたり、種々の問題についての意見を交換したり、印象を語り合つたりして、彼等は全く意氣投合してゐることを發見した。

晝飯の後で、人々は釣りに歸つて行つた。けれどもこの二人の新らしい友達は、土手をずつと歩いて行つて鐵橋の傍で立ち止つた。

二人は綸を投げ込んでおいてしやべり初めた。魚はやはり食はなかつたが、バチツソは平氣になつた。

一家族が登つて來た。父親は髯を生やして馬鹿に長い竿を持つてゐた。大きさの違つた三人の男の兒は、歳に準じて、ちがつた長さの竿を持つてゐた。そしてでつぷりと肥つた母親はリボンで柄を飾つた趣のある竿を品よく持つてゐた。父親はお辭儀をした。

『この邊は釣れますか？』と彼は訊いた。

バチツソが口を開かうとした時に友達は答へた。

『素的です！』

家族のものはみんなにこ〳〵しながら二人の漁師のまはりに陣取



つた。バチツソは其の時何か、どんな魚でも一匹、よしんば蠅ほどの大きさのものでも釣つて、この連中の喝采を博さうといふ矢も楯もたまらぬやうな願ひを感じた。そこで彼はボアヴンが其の朝やつてゐた通りに自分の竿を操り初めた。彼はコルクを流れのまゝに任して綸をぴんと張つてゐた。そこでぐい〳〵を吳れて鉤を河から引上げた。そこでまた大きな圓を空中に描きながら、もう少し遠くへそれを投げ込んだ。

彼は手際よく綸を投げる骨を得たと考へてゐた。と不意に、彼が手頸をきゆつと動かしてぐいと引き上げた竿が後ろの方で何處かに絡まつた。彼は引つ張つた、と、叫び聲が空を劈いたかと思ふ途端

に、彼は一つの鉤に固着して流星のやうに空を飛んで行く花で飾られた素的なボンネットを見た。彼はそれを河のまん中に落ち付かせた。

彼はあわてゝ振り返つた拍子に手から竿を放した。それは河下の方へ運ばれつゝあつたボンネットに附いて行つた。と、肥つた男は仰向けに引つ繰り返つてからゝゝと笑つた。髪を亂されてびつくりした夫人は口も利けないほどに猛り立つた。夫もまた腹を立てゝボンネットの辨償を求めた。それに對してパチッソは少くとも三倍の代價を拂つた。

そこで一家族は威張つて立ち去つた。



パチッソは別の竿を取つて夜になるまで砂蟲を水浴させながら坐つてゐた。隣りの男は草の上にぐつすりと眠り込んで、七時頃に目を覺ました。

『歸りませう。』と彼は言つた。

そこでパチッソは綸を引いた。と思ふとわッと叫んで、驚きの餘りにびたりと尻餅を搗いた。小さな魚が糸の先で身もだえしてゐた。それをよく調べて見てから、彼等はそれが胴中を刺し貫かれてゐたのを見付けた。鉤が水から引出される時に引つかゝつたのであつた。

それがパチッソに勝ち誇つた、無限の喜びを與へた。彼はそれをフライにして自分獨りで食べようと思つた。

晩飯の間二人の仲はます〳〵親密になつた。バチッソは、この大きな男はアルジアンッイユに住んでゐて三十年の間氣も腐らせずにボウトを漕いでゐたことを知つた。彼は次ぎの日曜日に一緒に晝飯を食べて、彼の快艇『ブロンジュオン』で乘りまはさうと約束した。

彼は話に身が入り過ぎて獲物のことをすつかり忘れてゐた。珈琲の後で彼はそれを思ひ出した。そして是非共料理されねばならぬと言ひ張つた。

それは皿のまん中に落された黄色いねぢれたマッチのやうな恰好てあつた。けれども彼はそれを得意で食べた。そして乘合馬車で家へ歸りながら、今日は十四ポンドのフライを捕つたなどと乘合客に



話してゐた。

## 五、二名家

バチッソ君は、友達のボウトの漕手と、次ぎの日曜日を一緒に暮らさうと約束してゐた。所が思ひも寄らぬ事が起つてこの計畫と衝突した。彼は滅多に逢はなかつた一人の從兄弟に出會つた。從兄弟は如才のない雜誌記者で、社會の各方面に旨く取り入つてゐた。彼はバチッソに色んな面白い事を見せてやらうと言ひ出した。

『それで、今度の日曜には何をしやうといふんだね？』と彼は訊いた。

『アルジアンツイユへボウトを漕ぎに行かうといふんだ。』

『へえ！　そいつはえらいこつた、君のボウトと來ちやあ。そんなことは何の變たらくもないぢやないか。僕と一緒にお出でなさい。二人の有名な人に紹介するから、ね、一緒に二人の藝術家の家を訪問しませう。』

『でも田舍へ行くことにきまつてゐるんだよ。』

『先づメイツソニエをポアノシイの家にちよつと訪ねてさ。それからメダンまで歩きませう。其處にゾラがゐるんです。あの人の今度



の小說を僕の方の雜誌に貰ひに行くんだから。』

バチツソは、無闇に嬉しくなつて、其の誘ひを受けた。

彼は風采をよくする爲めに、今までのフロツクコオトは幾らか磨れてゐたので、新らしいのを買ひさへした。そして其の畫家や文學者に對して、よく多くの人達が習つたこともない藝術談などをする時にやるやうな、へまな事を言ひはしなからうかとひどく苦に病んでゐた。

彼は從兄弟に其の心配を話した。と從兄弟は笑ひ出して、かう言つた。

『馬鹿な！　ただお世辭をいひさへすればいゝんだよ。お世辭の外

は何にもいらない。いつでもお世辭さ。さうしてゐれば、萬一何かへまなことを言つても消えちまひます。君はメイツソニエの繪を知つてる？』

『さうは思つてる！』

『ルウゴン・マツカアル叢書は讀んだ？』

『始めからしまひまで。』

『それで澤山。時々繪のことをお言ひなさい、時々小説のことをお話しなさい、そして、「結構で！　非常で!!　傑作で!!　驚くべき力强さで！」などと挾むんだね。それが成功の法なんだよ　尤もあの二人なんぞは隨分もういろんなもので食傷してゐるんだがね、それ



でも褒めるのはいつでも藝術家を喜ばすものだよ。』

日曜日の朝二人はポアッシイへ向つて出掛けた。

メイツソニエの邸は教會堂の辻の端れにある停車場から數歩の所にあつた。すばらしい葡萄の樹の亭の方へ導いて行く朱塗の低い門を通ると、雜誌記者は立ち止まつて連れの方へ向きながら訊いた。

『メイツソニエはどんなやうな人だと思ひます？』

パチツソは躊躇した。しまひに彼は答へた。

『非常によく身綺麗にした、髯のない、軍人風をした小柄な人。』

相手は笑ひながら言つた。

『そいつはよかつた。來たまへ。』

スキツル山中の別莊のやうな妙な建物が左の方に見えた。そして右の方には、小さな塔と殆んど向ひ合つて、母屋があつた。それは奇態な恰好をした建物で、あらゆる樣式を少しづゝ加味してゐた。

――ゴシック式の城砦、莊園、別莊、田舍屋敷、住宅、寺院、回々教の禮拜堂、金字塔と、東西兩洋の建築法が變にまざり合つてゐた。それは確に昔好みの建築家を氣違ひにするに足るほどな、途方もなく錯綜した樣式のものであつた。そしてそれは此の畫家に依つて設計されて其の指揮の下に仕上げられたものだつた。

二人ははひつた。澤山な旅鞄が小さな應接間を充たしてゐた。ジヤケツを着た小柄な男が出て來た。其の人の身のまはりで最も目に



立つものは髭だつた。それは預言者の髭で、信ぜられないほどに大きな、髭の河で、洪水で、ナイヤガラであつた。彼は雜誌記者に挨拶した。

『やあ失敬、昨日歸つたばかりでね、家の中はまだてんやわんやです。掛けたまへ。』

雜誌記者は辭退しながら、言譯した。

『いえ先生、御近所を通りましたので、ちよつとお寄りしたのです。』

パチツソはひどくとちつて、まるでばね仕掛ででもあるやうに、友達の言葉の一つ一つについてお時儀をしてゐた。そして少し吃りながら、小聲で言つた。

『どうも、け、け、結構なお住居で！』

畫家は、お世辭をいはれて、愛想よくにつこりした。そして御案内しようと言ひ出した。

彼は最初に封建時代式の小さな假屋の方へ導いた。其處には彼の以前の畫室があつて平場を見晴らしてゐた。次ぎに彼等は驚嘆すべき作品や尊重すべきボオベエなどで一ぱいな、ゴベリン織やフランダアスの掛布やの懸つた、客間や、食堂や、玄關やを通つた。所が外部の裝飾の珍らしい贅澤が、内部では、廣大な階段の贅澤になつてゐた。一つの塔にはすばらしい名譽の階段が、隱れた階段が、そしてもう一つには僕婢用の階段があつた。到る處に階段があつた。



バチッソは偶然に一つの戸を開いた、と、ぽつとして身を引いた。それは眞實の殿堂で、其の名は尊敬すべき人々が英語でのみ發音してゐる其の場所であつた。獨創的な、趣のある神殿は、精妙な趣味で備へ付けられて、寶塔のやうに飾られてゐた。其の裝飾は確に偉大な思想力を費したものだつた。

彼等は次ぎに遊苑を見た。それは澤山な美しい老樹でうねりくねらされて、複雜で變化に富んでゐた。が、雜誌記者は歸らうと言ひ出して、厚く禮を述べて主人と別れた。

二人は出て行く道で園丁に逢つた。バチッソは彼に訊いた。

『メイッソニエさんは前から此の邸を持つてゐられたのですか？』

老人は答へた。

『いや！　あなた、お話しせなけれやア分りませんだ。旦那は千八百四十六年にこの土地を買ひなすつたが、家は――五六遍毀しては建て直しただ。確に二百萬はそれに捨てましたよ！』

でパチッソは、外へ出た時に、この美術家に對して非常な尊敬の念を抱いてゐた。けれども、それは彼の大きな成功や、名聲や、天才やの爲めにではなかつた。普通の市民が金を溜める爲めにあらゆる道樂を犧牲に供してゐる時に、さういふ澤山の金を道樂の爲めに使つたからであつた。

ポアッシイを通り過ぎてから、二人はメダンへ行く道を徒歩で出



掛けた。街道は初めはセイヌ河に沿つてゐる。河のこの邊には趣のある小島が點在してゐる。二人は非レエヌの綺麗な村を通る爲めに小山を登つて、少し降つて、そしてしまひにルウゴン・マッカアル叢書の作者が住んでゐる部落に着いた。

古い綺麗な教會堂が、二つの小さな塔に衞られて、左の方に立つてゐた。二人はもう少し歩みを運んで行つた。すると通りがかりの百姓が小説の大家の戸口を教へて呉れた。

はひる前に、二人は家を調べて見た。それは正方形な、新らしい、馬鹿に高い、大きな建物であつた。そして譬へ譚にある山と鼴鼠のやうに、其の麓に巣くうてゐる小さな白い家を生んだものゝやうに

見えた。この小さな家は初めの住居で、以前の持主の造つたものであつた。塔はゾラ氏に依つて建てられたのだつた。

彼等はベルを鳴らした。サンベルナアルとニユウフアウンドランドとの雜種兒の大きな犬が、烈しく唸り初めたので、バチツソは寧そ引返さうかとぼんやりと思つた。所が召使が駈け出して來て、ベルランと名を呼びながら、犬を鎮めて、戸を明けて、そして雜誌記者の名刺を受取つて主人の方へ持つて行つた。

『會つて呉れゝばいゝがなあ！』とバチツソは呟いた。『折角こんなに遠くまで來て會へなかつたら隨分情ない話だ。』

從兄弟はにつこりと笑つた。



『心配したまふな。』と彼は言つた。『其處に如才はないよ。』

其處へ召使が戻つて來て、簡單にこちらへと言つた。

彼等は新らしい建物へはひつた。とバチツソは、馬鹿に感動して、二階へ通じてゐる古風の階段を昇つた時には息をはづませてゐた。

彼は其の時、其の嚇々たる名聲は當時世界の隅々にまで鳴り響いて、ある人々の激した憎惡と、社會の所謂『上流』のものゝ心からかもしくば上べばかりかの憤怒と、同じ仲間の者の嫉妬から來た嫌惡と、多數の讀者の尊敬と、大多數のものの熱狂した讃美とを一身に集めてゐたこの人を頭に描き出さうとして見た。そして恐ろしい顏付をした、髭もくじやらの巨人のやうな人が、鳴り響くやうな聲を

して現はれて、始めはひどく人つきのよくないのを見るやうに待ち設けた。

戸は開いた。中は非常に大きな高い部屋で、平原を見晴らしてゐる窓の爲めに一ぱいに明るかつた。古代の掛布が壁を蔽うてゐた。入口の左手にある、二個の石人に依つて守護された大きな爐は一日に百歳の槲の古木を燃すことが出來さうであつた。そして大きなテエブルが、上に書物や、新聞や、雑誌などを載せられたまま、この部屋の中央を占領してゐた。部屋はいかにも廣くて堂々としてゐたので、それが忽ち目を奪つて、注意は暫くしてから其の持主の方へ向けられた。其の人は、彼等がはひつた時に、優に二十人は寢るこ



との出來さうな東洋風の褥椅子の上に身を伸ばしてゐた。

彼は五六歩彼等の方へ近づいて、お時儀をして、二つの席に指さして、そしてまた褥椅子に腰を卸して、片脚を下で曲げた。一冊の書物が彼の傍に置かれてあつた。そして彼は右の手で象牙の紙切りを弄んでゐた。其の尖端を、彼は近眼者の癖として一方の目を閉ぢながら、一方の目だけで時々見詰めた。

雑誌記者が訪問の目的を話してゐた間、そして作家がまだ答へもせずに、時々ぢつと彼を眺めながら聽いてゐた間、パチッソはだんだん手持無沙汰になつて、この有名な人を見詰めてゐた。

やつと四十位な彼は、中背で、どちらかといへば肥えた方で、氣

持のいゝ顔付をしてゐた。彼の頭は、十六世紀の多くのイタリイの繪畫に見られるそれらのやうで、彫刻家のいふ意味では美しくなかつたが、彼が大きな力と智慧とを持つてゐるといふ印象を與へてゐた。短い髪の毛はよく發達した頭の上に立つてゐて、下には漆黒の髭があつた。頤は一面に皮膚に近く刈り込んだ髯で蔽はれてゐた。ともすれば皮肉な黒い瞳は、突き刺すやうで、その後ろには活動的な腦髄が、人の身體を見通したり、言葉を解釋したり、身振りを分析したり、心情を計いたりしながら、常に働いてゐるといふ印象を與へてゐた。其の強い、圓い頭は、二た綴りで、二つの母音の響のうちに躍つてゐる、迅くて短い、彼の名によく似合つてゐた。



雜誌記者が言ふだけのことを言つてしまつた時に、作家はしかとした約束をすることは出來ないといふことと、後でよく考へて見ようといふこととと、それにまだ腹案が十分にきまつてゐないといふこととを答へた。それきり彼は默つてゐた。それは歸りを促す謎だつた。二人は、少しもぢ〳〵してから、立ち上がつた。所が一つの望みがバチッソの心を捉へた。彼はこの有名な人物が、何か一言、友人達に吹聽することの出來るやうな言葉を自分に言つて呉れゝばよいと思つた。そこで勇氣を振り起して、吃りながら言つた。

『えゝ！　先生、わたくしはお作を非常に愛讀して居ります！』

相手は頭を下げたが返辭はしなかつた。バチッソは大膽になつた。

彼は言葉を續けた。

『今日、先生とお話しするのはわたくしに取つて非常な光榮であります。』

作家はまた頭を下げたが、しかし氣むづかしい堪らないやうな樣子をしてであつた。パチッソはそれを見ると、へどもどして言ひ足した。

『どうも、け、け、け、結構なお住居で！』

すると所有主の精神が文學者の冷淡な胸の中で目を覺ました。にこにこしながら、彼は窓を明けて廣々とした眺望を彼等に見せた。

其處にはあらゆる方面に廣い眺めがあつた。トリエル、ビスフオ



ンテエヌ、シャントルウ、オオリイの高臺の全部からセイヌ河まで、凡そ目の屆く限りを包含してゐた。

二人の客は、大喜びで、大作家を慶賀した。と直ぐに家は彼等に開かれた。彼等はあらゆるものを、立派な臺所までも見た。其の壁は、青色の圖案に瓦を嵌め込んで、百姓達の驚嘆を買つたものだつた。

『どうして此處をお買ひになるやうになつたのですか？』と雜誌記者は訊いた。

と小說家は、夏の間借りようと思つて家を搜してゐたら、新らしく建てたばかりの小さな家が見付かつた。所が、それが數千フラン

で、はした金で、殆んど何でもない値で賣りに出てゐた。で其の場で買つたのだと答へた。

『併し後からお足しになつたものには隨分おかかりなすつたでせう！』

作家は笑ひながら言つた。『えゝ、かなり。』

やがて二人は暇を告げた。

雜誌記者は、バチツソの腕を取つて、ゆつくりした聲で、哲理を說いた。

『あらゆる將軍は彼のワアテルロオを持つてゐる。』と彼は言つた。

『あらゆるバルザツクは彼の弱點を持つてゐる。而して田舍に住んでゐるあらゆる藝術家は地主にならうといふ欲望を持つてゐる。』



二人は非レイヌの停車場で汽車に乘つた。そして汽車の中で、バチツソは著名な畫家と有名な小說家との名を、まるで友達でもあるかのやうに、高い聲で話した。のみならず、彼は畫家と畫飯を共にし、作家と夕飯を共にしたと無理にも自分で信じようとした。

## 六、祭の前

祭が近づいて來て、それの顚へは既に町々に廣がりつゝあつた。

丁度あらしが起らうとする時に漣が水の面を渡るやうに。店といふ店は旗で裝飾されて、はでやかな色彩を見せてゐた。そして商人達は、雜貨商が蠟燭にごまかしをして賣るやうに三色旗にごまかしをして賣つた。人心はだんだんはしやいで來た。市民達は、夕飯のあとで、町に出て祭の話をしたりそれについての意見を交換したりした。

『どんなお祭でせう、ねえ、どんなお祭！』

『あなたは御存じなかつた？　君主方がみんな御微行で、平民の姿で、それを見にいらつしやるのですよ。』

『何でもロシアの皇帝はもうお着きになつたらしい。ウエエルス公と御一緒に何處へてもいらつしやるんださうだ。』



『へえ！　どんなお祭でせうね！』

それは確に、パチッソ君が好個の機會と呼んだ所の祭であるに違ひない。十五時間の間、金ぴか物で無趣味に飾られたあらゆる平民を、汗を流してゐる人の波を、都の一端から他の一端へ轉がして行くあの名狀することの出來ない雜沓の中には、店擡のうしろで肥えふとつたふとつちよのおしやべり女が、三色のリボンを付けて、息を切らして喘ぎながら、せむしの奉公人が、嗅と餓鬼とを引つ張りながら、職人が子供を肩車に乘せながら、途方に暮れた田舍漢が、ぽかんとした、間抜け面をさらしながら、のつぺりと剃つた馬丁が

まだ厩の臭をさせながら、やいさもつさと揉まれてゐる。そして猿のやうに着飾つた外國人や、麒麟のやうな英國婦人や、顔のてらてらした水汲み人夫や、毒にも藥にもならぬ小さな市民の數へきれない密集團やは、何もかもを面白がつてゐる。このごつた返した混雑が、背中のわれるやうな草臥れが、汗と埃が、喚き聲が、人肉の渦巻が、肉刺の根絶やしが、あらゆる考の戸惑ひが、いやな臭氣が、大勢の息が、蒜のぷんとする臭ひが、バチッソ君に胸の張り裂けさうな喜びを與へる、おゝ、與へる！

彼は市長の告示を其の區の壁の上で讀んだ後で祭の準備をした。

告示にはかうあつた。



『予が諸君の注意を喚起せんと欲するは主として民間の裝飾についてである。諸君の家を裝飾せよ。諸君の窓を輝かせよ。諸君の家と諸君の街とに隣りの家と街とよりも一層光彩ある一層美術的な外觀を與へる爲めに協力一致せよ。』

バチッソ君はどういふ美術的な外觀を自分の家に與へることが出來ようかととつくりと思案した。

一つの重大な故障が出て來た。一つしかない彼の窓は、庭を、狹くて深い、暗い庭を見おろしてゐた。其處ではただ鼠だけしか彼のヴエニス提灯を見ないであらう。

彼は是非共表通りを持たなければならない。彼はそれを見付けた。彼の家の第一階に、貴族で勤王家の一人の金持が住んでゐた。その人の馭者もまた復古論者で、第六階に、通りに面した一室を占めてゐた。パチツソ君は、相當な直段を拂へば、ある良心は買へるものだと想像した。そして彼は五フランをこの鞭揮に提供して、正午から中夜まで彼の部屋を貸すやうにと申込んだ。申込は直に承諾された。

そこで彼は其の裝飾に身を入れ初めた。三本の旗と四個の支那提灯とがよくこの鰒煙草盒に美術的な外觀を與へて彼の意氣軒昂とした精神を現はすに足りたであらうか？　否、斷じて否！　併し、長い間穿鑿したり夜間の瞑想に耽つたりしたけれど、彼は他に何にも



考へることが出來なかつた。彼は隣の人に相談した。其の人達は彼の質問に驚かされた。彼は同僚に尋ねた。誰も彼も提灯と旗とを買つて、當日の爲めに三色の裝飾をそれに結び着けてゐた。

そこで彼は斬新な趣向を求め初めた。彼はしばしばカフエへ出掛けて、客に接近して見た。けれども彼等は想像力に缺けてゐた。そこである朝彼は乘合馬車のてつぺんへのぼつた。品のいゝ樣子をした一人の紳士が彼の脇でシガアを燻らしてゐた。向うに一人の職人がこはれたパイプでぷつぷと煙を吹いてゐた。馭者の傍には二人の街の子供がゐた。そして各種の雇人は三スウの賃錢で働きに行きつつあつた。

店々の前には旗の束が朝日の下に輝いてゐた。バチッソは隣の人の方へ向いた。

『これやア立派なお祭でせうな。』と彼は言つた。

紳士は横眼でじろりと見ながら横柄な態度で答へた。

『そんなことはどうだつていゝ！』

『あなたはお仲間入りをなさらない？』とバチッソは驚いて訊いた。

相手はさげすむやうに頭を掉つた。

『お祭騒ぎで胸糞が悪くなる！　一體何の祭なんだ？　政府だ？

わたしはこの政府を認めません。』

所がバチッソは、自分が政府の雇人なので、きつとなつて答へた。



『政府は、あなた、共和政治です。』

相手は面喰ひもしなかつた。そして、静かに兩手をポッケットに入れながら、答へた。

『ふむ、それが何です？　わたしは反對はしない。共和政治であらうと何であらうと、わたしはそんなことには構はない。わたしが望むのは、あなた、わたしの政府を知ることです。わたしはシャルル十世を見ました。そして其の傍に立ちました。わたしはルイ・フイリップを見ました。そして其の傍に立ちました。わたしはナポレオン三世を見ました。そして其の傍に立ちました。併しわたしは共和政治を見たことがありません。』

パチッソは、やはりまじめで答へた。
『それは大統領に依つて代表されて居ります。』
『ふむ、ではわたしに大統領をお見せなさい。』と相手は唸つた。
パチッソは肩を聳かした。
『誰でも見ることが出來ます――大統領は戸棚の中に藏つてはありません。』
所が不意に肥つた男はむつとした。
『だつて、あなた、見ることが出來ないんだ。わたしは百遍以上も試みたんだ。わたしは官舍の近くに立つてゐた。彼は出て來なかつた。向ひのカフェに彼が球突をしてゐると通行人が敎へて呉れた。



わたしは向ひのカフェへ行つて見た。彼は其處にもゐなかつた。集會へ出席する爲めに彼がメランへ行くといふ話を聞いた。わたしはメランへ行つたが彼を見なかつた。わたしはしまひに疲れてしまつた。わたしはまた、ガンベッタをも見なかつた。いや一人の議員すらも知らない。』
彼は興奮して來た。
『一體政府といふものは、あなた、それ自身を見せべきものである。政府はその爲めに作られてゐる、その他の何の爲めでもない。人民はある一定の日に、ある一定の時間に、政府がある一定の街を通ることを知つてゐべきものである。さうすれば人民はそれを見て滿足

することが出來る。』

バチッソは、氣が落ちついて、寧ろさういふ説を喜んだ。

『なるほど、』と彼は言つた。『人民が自分達を支配してゐる人々を知りたがるのは尤もですな。』

紳士は穏かな調子になつて答へた。

『そこでわたしならこの祭をどうするかお話しやうか？　わたしなら、ね、あなた、王の神聖な戰車のやうな、金着せの車で行列を作ります。そして政府の連中を、大統領から下は議員に至るまで、それに乘せてパリぢゆうを一日練つて行きます。さうすれば誰も彼も國家の人物を、少くとも目で見て知ることが出來ようといふもの



だ。』

所が馭者の傍にゐた街の子供の一人がぐゝつと振り向いて、かう言つた。

『そしてあの肥つた牛は、あれは小父さん何處へ置くんだね？』

兩側のベンチから笑ひ聲が起つた。バチッソは、其の非難の意味が分つたので、呟いた。

『こいつは、ひよつとすると、威嚴がないかも知れんな。』

紳士も考へ返した後で同意した。

『よし、それでは、』と彼は言つた。『何處かに觀世物にして置くことにしよう。外へ出さないでも誰にでも見られるやうに。例へば、エ

トアルの凱旋門のやうな所に。そして全體の住民を一列にして縱隊で彼等の前を進行させることにしよう。これなら十分の品格を其の事に與へることが出來る。』

所が少年はまたぐるつと振り向いて、訊いた。

『顏を見るのに望遠鏡がいりはしませんか？』

紳士は答へなかつた。彼は言葉を續けた。

『先づ旗の授與式のやうなものでさ！　それには何か口實が、何か組織が、ひよつとしたらちよつとした戰爭位がなければなるまい。さうすれば褒賞として軍隊に軍旗が與へられることになる。わたしは一つの案を持つてゐた。そのことは大臣に書いて出しましたが、



何とも答へて呉れなかつた。それは、彼等がバスチイユの堡壘を取つた日を選んだので、それの模擬をするがいゝといふのです。先づ板紙でバスチイユの堡壘を造つて、背景畫家に色を着けさせるのです。そして其の壁の中に七月の柱をすつかり隱して置くのです。そこで、あなた、軍隊が攻擊して其の堡壘を陷れるのです。暴政の堡壘を轉覆する軍隊そのものを見るのは、立派な觀世物でもあれば、同時にまた敎訓にもなりませう。そこで彼等は模造のバスチイユに火をかけるのです。すると其の焰の中に、自由の神が新規律と人民の自由との表象が、刻まれてある柱が現はれるのです。』

乘合馬車のてつべんにゐたすべてのものは、この思ひ付きのすぐ

れてゐるのを見て、今度は耳を澄ましてゐた。一人の老人が言つた。
『それは大した考ですな。あなたの名譽をなす考だ。政府がそれを採用しなかつたのは殘念なことぢや。』
一人の青年は、バルビエの詩を俳優に街々で歌はせて、藝術と自由とを同時に人民に敎へるやうにすべきであると言ひ出した。
この提案が大きな熱狂を惹起した。誰も彼もしやべりたがつた。彼等の腦髓は高揚してゐた。通りがゝりの街オルガンが『マルセイユ』の曲を濁つた音で鳴らし出した。と一人の職人が其の言葉を歌つた。そしてすべてのものがコウラスで其の繰返し句を叫んだ。其の歌の音尙な本性と鼓舞するやうな韻律とが馭者を燃え立たせた。



そして鞭打たれた馬は疾驅した。バチッツ君は平手で腿を叩きながら、あらん限りの聲を擧げて呶鳴つた。で中にゐる乘客達は、恐ろしくなつて、どういふあらしが頭の上で起つたのかと怪んだ。
彼等は暫くして歌ふのを止めた。でバチッツ君は、隣の人が立案をするのに極めて適當な人であると判斷して、自分がしやうとしてゐる準備について彼に相談した。
『提灯と旗とで全く結構ですがね、』とバチッツは言つた。『もつと何かいゝことをしたいのですよ。』
相手は長い間考へてゐたが、何も浮んで來なかつた。そこでバチッツ君は、新案が見付けられないのに失望して、三本の旗と四個の

提灯とを買つた。

## 七、悲しい話

祭の疲勞を回復する爲め、パチッソ君は其の次ぎの日曜日を何處かにのんびりと落ちついて、自然と渾融して暮らさうといふ計畫を立てた。

美しい景色を望んだので、彼はサンジエルマンの高臺を擇んだ。彼は晝飯を濟ましてから出掛けた。そして、歴史以前の珍物を蒐め



た博物館を——少しもさういふものは分らなかつたが、一つの義務として、——見物した時に、彼は感嘆の念に打たれて其の大きな遊歩場の前に立つた。其處からは遠くの方にパリが、其の周圍の地方が、あらゆる平原、村、森、池、町までが、そしてフランスの躉に觸れてゐるあの無數の波動を持つた大きな藍色の蛇が、あの穩かな懷しい河が、——セイヌ何が見えてゐる。

輕い霧で靑味を帶びた遠景のうちに、信ぜられないほどの遠くの方に、彼は白い點々のやうな小さな場所を、綠色の小山のスロウプの上に認めた。そしてこれらの殆んど目にも入らないぽつぽつの上にも自分のやうな人間が住んで、苦しんで、働いてゐることをしみ

じみと思つて、彼は始めて世界の小さいことを考へた。彼はまたかうも思つた。空間には、なほ一層感知することの出來ない他の點々が、我々の世界よりも一層大きな系統が、恐らくは一層完全に近い種族を保つてゐると。所が眩暈がふら〳〵と起つて來たので、彼は頭を惱ますやうなかういふ事を考へるのを止めた。そしてのろ〳〵した足取りで、まるで重過ぎた思索に疲れでもしたやうに、少し氣が倦んで、高臺の幅の限りを歩いて行つた。

彼ははづれまで行つた時に、一つのベンチに腰をおろした。と其處に一人の紳士が、杖の上に兩手を重ね、頤を其の手の上に休めながら、深い瞑想に落ちてゐるやうな姿勢をしてゐた。所がバチッソ



は人がそばにゐれば三分と話しかけずにはゐられぬやうな性質の男であつた。彼は先づ隣りの男を見て、咳拂ひをして、それから不意に言つた。

『失禮ですが、この下に見える村の名は何と言ひます？』

紳士は頭を擧げて悲しさうな聲で答へた。

『サルトルウ井ユです。』

それきり彼は默つた。バチッソは、百年も經つた老樹で蔽はれた高臺の大きな景色を眺めながら、後ろで颯々と鳴る森の大きな呼吸を肺臟に感じながら、森林と大きな野原との春の香に喜ばされて、だしぬけに小さく笑ひ出した。そしてきつとした目をして言つた。

『此處には戀人に持つて來いの隱れ場がありますね。』
隣りの男は面白くもないといふやうな樣子をしながら彼の方へ向いて、そして答へた。
『もし戀に落ちでもしたら、わたしは川へ身を投げます。』
バチツソは同じ意見でなかつたので、反對した。
『へえ！　へえ！　あなたは大層冷淡にお話しなさるね。どうしてです？』
『あんまり高い犧牲を拂ひましたから、二度とまた始めようなどとは迚も思へないのです。』
バチツソはにやにや笑ひながら答へた。



『なるほど、もしあなたが不義でもなすつたのなら、それやァいつでも高くつきますよ。』
所が相手は氣でも欝ぐやうに溜息をついて、そして悲しさうに言つた。
『いゝえ、あなた、不義など犯したのではありません。ただひよつとしたことで背かれたのです、それだけです。』
バチツソは旨い話を躾ぎつけたので、言葉を續けた。
『それはさうでも、坊さんを嫌ふ法はありませんよ。それやァ本當てありません。』
すると男は悲しさうに天を仰いだ。

『それはさうですとも。併しもし坊さんが他の者のやうな人間でしたら、わたしの不幸は起らなかつたでせう。わたしは教會の獨身制度の敵です。わたしにはそれについての理由があります。』

『失禮でなかつたら伺ひたいと思ひますが？』

『いゝえちつとも。それはわたしの事實譚です。わたしは、あなたノルマン人です。親爺はルウアンに近い、ダルネタで水車屋をしてゐました。親爺が亡くなつた時に、わたし達は、わたしと弟ですが、まだほんの子供でしたから、コウの坊さんをしてゐた人の善い、肥つた叔父に引取られました。

『叔父はわたし達を育てゝ、教育をして呉れました。さうしてから、



相當の地位を見付けるやうにと、パリへわたし達二人を寄越しました。

『弟は二十一でした。わたしは二十二でした。

『わたし達は經濟上から一緒に住んでゐました。そして穏かに暮らしてゐました。其の時今お話しようとしてゐる事件が起つたのです。

『ある晩家へ歸りかけてゐた時に、わたしはひどく氣に入つた一人の若い女に歩道で逢ひました。その女はすべてのわたしの趣味になつてゐました。どちらかといへば、あなた、背の高い方で、そして愛想のいゝ樣子をしてゐました。勿論、わたしは話しかけようとはしませんでしたが、穴の明くほど見詰めてはやりました。次ぎの

朝もまた同じ所で逢ひました。其の時、わたしは臆病でしたから、たゞお時儀をしました。女もちよつと笑顔をして見せました。そこで其の次ぎの日わたしは傍へ寄つて話しかけました。

『女は井クトリイヌといふ名でした。そしてある仕立屋の家で縫物をしてゐるといふことでした。わたしは直ぐに元氣がついたやうな氣がしました。

『わたしは女に言ひました。「お嬢さん、わたしはあなたと離れては迚も生きてゐられないやうな氣がしますよ。」女は目を落して答へずにゐました。そこでわたしは女の手を握りました。女も握り返したやうな氣がしました。わたしは、あなた、まゐつてしまつたので



す。けれども弟がゐるのでどうしていゝか知りませんでした。さうだ！　何もかも弟に打ち明けてしまはう、からわたしが腹を決めました時に、弟の方が先きに口を開きました。弟もやはり戀に落ちてゐたのです。そこでかういふことに決めました、我々は住居を別にしやう、併しあの人の善い叔父にはその事を一と言もいはずに置いて、手紙は今まで通りわたしのゐる家を肩書にして寄越すまゝにしておかうと。そこでさうしました。そして一週間後に、井クトリイヌはわたしの家へ一緒になりました。わたし達は小さな晩餐會を開いて、其處へ弟は戀人を連れて來ました。そして晩になつて、何もかも片附いた時に、わたし達は始めて二人きりになりました。

『わたし達が眠つてから、左様、一時間も經つた時です。烈しいベルの音にわたしは目を覺ましました。時計を見ると、朝の三時でした、わたしは急いでズボンを穿いて、急いで戸の方へ行きました。

「こいつは何か惡い事だぞ、屹度……」と腹の中で言ひながら。

『それは、あなた、叔父でした。旅行服を着て、手に鞄を下げてゐました。

『「うむ、おれだよ、おれはお前達を驚かしに來たんだよ、パリで五六日遊ばうと思つてな。僧正から休暇を賜はつたんだ。」

『叔父はわたしの兩方の頰べたにキスして、中へはひつて、そして戸を締めました。わたしは、あなた、生きた心地はありませんでし



たよ。所が叔父はわたしの寢間へはひり込まうとしましたので、わたしは殆んど叔父のカラアを掴まんばかりにしました。

『「いや、そつちではありません、叔父さん、こつち、こつち。」

『かう言つてわたしは叔父を食堂へ行かせました。まあお察し下さい……わたしはどうすればよかつたでせう？　叔父はわたしに言ひました。

『「弟は、眠つてゐるのか？　行つて起してお出でよ。」

『わたしは吃つて言ひました。

『「いえ、叔父さん、弟は、急な註文があつて、今夜は店の方にゐなければならんことになりました。」

『叔父は兩手を揉みました。
『「ぢやア、景氣がいゝんだな？」
『ひよつとわたしは思ひ付きました。
『「あなたは屹度お腹がおすきでせう、叔父さん、はる〳〵とやつていらしつて。」
『「さうだ！　さうとも、わしはパンを少しかじつたばかしだ。」
『わたしは戸棚へ飛び付きました　其處には晩餐の殘りをおいてあつたのです。叔父は、本當のノルマンの坊さんでしたから、中々の健啖家で、一席で十二時間も食べることが出來ました。わたしはビイフを一切れ持ち出しました。なるべく時間を延ばさうと思つて、



といふのは、わたしは叔父が時間などには頓着しないことを知つてゐたからです。そこでそれを十分食べた後へわたしはチキンの殘りと、殆んどそつくりのコロッケと、ポテトオサラダと、三杯のクリイムと、そして翌日の分に除けて置いた上等の葡萄酒とを出しました。
『まあ、あなた、どんなに叔父が鱈腹食べましたことか！
『「へえ！　何といふ貯藏室だらう！」とわたしは腹の中で言ひました。そしてわたしは叔父に詰め込みましたよ、あなた、うんと詰め込みましたよ。叔父もまた逆らひませんでした。
『叔父が何もかも食べてしまつた時は、朝の五時でした。わたしは

居ても立つてもゐられませんでした。でもまだ暫くの間は珈琲やいろんな清涼水やで引き留めてゐましたが、たうとう叔父は立ち上がりました。

『「どれ一つ家を見せて貰はうか、」と叔父は言ひました。

『わたしは途方に暮れてしまつて、いつそ窓から身を投げやうかなどとも考へながら、附いて行きました。いよ〳〵事が起るのだと思ふと、わたしはもう氣が遠くなりさうになつて寢間へはひりましたが、其の時最後の望みがわたしの胸を躍らせました。

『女は健氣にも寢臺のカアテンを引いておきました。あゝ、叔父があれを明けないでさへ呉れればいゝが！　所があゝ！　あなた、叔



父は蠟燭を手に持つて、つッと寢臺へ近づいたかと思ふと、不意に寢臺のカアテンを擧げました。その晩は暖かでした。わたし達は夜具を取り除けて、其處にはただ上被ひだけを殘しておきました。それを女は頭の上まですつぽりと冠つてゐました。けれども其の恰好が、あなた、其の恰好が見えるぢやありませんか！　わたしは手足がが〳〵とふるへて、咽喉は締め付けられて息が止まるやうでした。其の時叔父がさも可笑しさうに笑ひながら、わたしの方へ向きましたので、わたしは天井へ飛び上がらんばかりに驚かされました。

『「おゝ！　お前の道化者め、お前は弟を起したくなかつたんだな。どれ、おれが一つ起してやらう。」

『と、わたしは叔父の百姓のやうな手があがるのを見ました。そして叔父が息も止まるばかりに笑つてゐた時に、其の手は電のやうに、あなた、見えてゐた恰好のう……う……上に落ちました。

『恐ろしい叫び聲が寢床の中でしました。そしてあらしのやうなものが上被ひの下で起りました。其の形がもぞ〳〵しました。女は身體をほぐすことが出來なかつたのです。たうとう、飛び上がらんばかりにして、女は現はれました。提灯のやうな目をして、そしてぢつと叔父を見詰めました。叔父は後しざりしました、口を明けたまで、まるで、あなた、病氣になりでもしたやうに、息をはッはッと喘ませながら！



『そこでわたしは泡を食つて逃げ出しました。六日の間わたしは自分の家の方へは歸らうともしないでうろつきました。しまひに、やつと勇氣を振ひ起して歸つた時には、誰もゐませんでした。』

パチッツは、身を搖すつて笑ひながら、『それやアゐますまい！』と言つた。と、男は話すのを止めた。

所が直ぐにまた男は言つた。

『それきりわたしは叔父に逢ひません。叔父はわたしを勘當しました。わたしが弟の留守を狙つて馬鹿を盡したのだと決めてしまつたのです。

『それきりわたしはヂクトリイヌにも逢ひません。親戚のものはみ

んなわたしを爪彈きしてゐます。そして弟は、其のお蔭で得をして、叔父が死んだ時に十萬フランの遺産を相續しましたが、今ではわたしを年甲斐もない道樂者と思つてゐるやうです。けれども、あなた、わたしは誓つて言ひますが、決して、其の時から決して、決して何にもしません！……人には、あなた、決して忘れない瞬間があるものです。』

『それであなたは此處で何をなすつてゐるのですか？』とパチツソは訊いた。

男は、何か目には見えない耳に洩れ聞かれるのを恐れでもするやうに、ずうつと地平線を一瞥してから、恐怖の響を帶びた聲で、呟くやうに言つた。

『わたしは、女から逃げてゐるのです！』

## 八、戀の試み

多くの詩人は、自然は女なしでは完全でないと考へる。そして其の考から、疑ひもなく、彼等の詩歌に、ばらや、菫や、チユリツプや、他の可憐なものやを我々の自然の伴侶の風情にするといふ、すべての花の比較が來た。

夕暮の霧が丘のあたりに漂ひ初め、地上のあらゆる香が我々を醉はせるあの薄明の頃に、我々を居ても立つてもゐられなくする柔らか味の切なる求めは、抒情詩の祈願のうちに溢れてゐる。でパチッソ君も、他の者と同じやうに、手をしかと握りしめて、撓み易い肥つた姿を抱擁しながら、夕日の落ちて行く小徑沿ひで與へられる柔らか味に向つての、柔らかな接吻に向つてのあこがれに捉はれた。

彼は戀を限りなき歡喜と思ひ初めた。そして幻想に耽る時には、人類の愛撫にかくも多くの魅力を置いたことを大きな『不可知』に感謝した。彼は相手を持たねばならぬと感じはしたが、しかし何處で彼女を見出すべきかを知らなかつた。



ある友達の忠告に從つて、彼はフォリイベルジエエルへ行つた。彼は其處で完全な分類を見た。そしてどれを選ぶべきかにひどく迷つた。といふのは、彼の心の望みは、畢竟詩的の衝動から起つたもので、詩的の戀は、彼に秋波を送りながら、にッと入齒の珐瑯質を見せるやうな黒くした睫毛を持つた若い女の主要な屬性とはぴたりと合はなかつたからである。

遂に彼の選みは若い新參の女の上にとまつた。その女は貧しい臆病な姿をしてゐて、其の不幸な顏付は容易に詩化されさうな性質を示してゐるやうに見えた。

彼は其の次ぎの日にサンラザアル停車場で彼女と會ふことに決め

た。

彼女は約束を守らなかつた。けれども代りに友達を寄越すだけのなさけを持つた。

友達は背の高い、髪の毛の赤い娘で、愛國的に三色で身なりを作つて、冠さるやうな大きな漏斗形の帽子の中央に其の頭を突ッ込んでゐた。パチッソ君は聊か失望したが、併し慇懃に其の名代を迎へた。そして彼等はメイゾンラフイットへ向つて出掛けた。其處にはボウトレエスと大きなヴエニス祭とがあることになつてゐた。

彼等が乘つた汽車には、勳章をつけた二人の紳士と、少くとも確に侯爵夫人ぐらゐであらうと思はれるほどの品のある樣子をした彼



等の夫人とが既に席を占めてゐた。其處へはひるや否や、オクタ并イといふ名にふさはしい、背の高い、髪の毛の赤い娘は、鸚鵡のやうな聲で、自分は常談の好きな、至極きさくな女だといふことや、自分が田舍をたまらないほど好きなのは、其處へ行くと花が摘めたリフライにした魚が食べられたりするからだといふことやをパチッソに話した。彼女はまた窓がこはれはしないかと思はれるほどな鋭いきい〳〵聲で笑ひながら、連れのことを『わたしの大きな狼さん』と親しげに呼んだりした。

恥かしいといふ感じがパチッソに起つた。彼には政府の役人といふ稱號が一種の謹愼を負はせてゐた。所が、暫く經つと、オクタ并

イは沈默して、横眼で隣りの人達を眺めてゐた。そして或る階級のすべての女達によく起つて來るやうな立派な婦人達と近付きになりたいといふ强い欲望に捉はれたやうな氣がしてゐた。五分間の後で、彼女は素的に旨い考を思ひついたと考へた。そして、一冊の『ジブラ』をポッケットから引き出して、それを一人の夫人に出した。夫人は彼女の無作法に驚かされて、そして頭を掉つて其の雜誌を斷つた。すると背の高い、髮の毛の赤い女は、むつとしながら、二重の意味を持つた言葉の罵倒を始めて、ある他の婦人達より何もすぐれてゐもしない癖に自分達だけの遊び事をする婦人達のことを長々と話した。そして時々氷のやうな威嚴を持つた旅客のうちに破裂する



爆彈の利目を持つたほどな野鄙の事を言つた。

遂に彼等は目的地に着いた。パチッソは森の沈鬱が連れの激した感情を鎭めるやうにと望みながら、直ぐに公園の木蔭の多い暗い場所を捜さうと思つた。所が彼が望んだとは全く別の結果が起つた。彼女は木の葉の間にはひつて草を見るや否や、あらん限りの聲を張り上げて、其のうはついた頭に殘つてゐたオペラのきれ〳〵を歌ひ初めた。聲をびり〳〵とふるはせながら、『ロベル魔王』から『ミュゼット』へ移つたり、殊にすべてのセンチメンタルな歌を喜ぶやうに、其のスタンザをば錐のやうな突き刺す響で歌つたりした。

不意に彼女は腹が減つたので歸りたいと言ひ出した。豫て望みの

柔か味を待つてゐたパチッソは、彼女を引き留めようと空しく試みた。すると彼女は腹を立てた。

『わたしは自分を苦しめに此處へ來たんぢやありませんよ、さうなの？』と彼女は噛み付くやうに言つた。

そこで彼は詮方なしにプチハアヴル料理店を搜し出した。其處はボウトレエスが將に開かれようとしてゐた場所の近くであつた。

彼女は一聯隊を養ふにも足るほどな皿數を持つたすばらしい晝飯を註文した。やがて、それの出來るのが待ちきれなくなつて、副食物を請求した。一函の鰮が持ち來された。彼女はそれをまるで錫の函まで食べようとでもするやうに攻擊した。所が其の小さな油濃



い魚を二三疋食べ盡してしまうと、もう腹がをさまつたと言つて、ボウトレエスの準備を見に行かうと望んだ。

パチッソはがつかりした。そして今度は自分がひもじくなつて來たので、斷じて動くことを拒絶した。彼女はデザアトまでには歸つて來ると約束して、獨りで出て行つた。そこで彼は獨りで食べ初めた。けれどもどうしてこの手に負へない女を自分の夢の理想化に持ち來すべきかを知らなかつた。

女が歸つて來なかつたので、彼は搜しに行つた。彼女はある友達に逢つたのであつた。それは半裸體な、耳の先きまで赤い、仕方話をしてゐた一組のボウトの漕手で、彼等は大電製造所の前で、競漕

のすべての細かいことをがやゝと決めてゐた。
品のいゝ顔付をした二人の紳士が、疑ひもなく審判官が、一心に彼等の話を聽いてゐた。オクタヂイはバチッソを見るや否や、確に腦髄よりも餘計に腕力を持つてゐた背の高い奴の日に燒けた腕にぶら下がりながら、彼の耳に二た言三言囁いた。
相手は答へた。
『よろしい。』
と、彼女は全く嬉しさうに以前の護衛兵の所へ戻つて來て、快活な殆んど頰ずりせんばかりの樣子をした。
『わたしボウトで出掛けたいわ。』と彼女は言つた。



かういふ可憐な氣分になつた彼女を見るのが嬉しくつて、彼はこの新たな望みに同意した。そして船を傭つた。
所が彼女は、バチッソがボウトレエスを見たいといふにもかゝはらず、强情にそれを拒んだ。
『わたしあなたと二人ッきりでゐる方がいゝんだわ。』と彼女は言つた。
彼の心は顫へた。やつと！
彼はフロックコオトを脱いで烈しく橈を漕ぎ初めた。
馬鹿に古い水車場が、蟲に食はれた腕を水の上に垂れながら、其の二つのアアチで河の小さな入江に踏み跨がつてゐた。彼等は下を

すつと通つた。そして向う側へ行つた時に、直ぐ目の前に、上には
こんもりと茂つた大きな樹木が一種の圓天井を形作つてゐるすばら
しい河の一部を見た。小さな入江はうねつて、まはつて、左に右に
ジグザグしながら、絶えず一方には新らしい地平線や、大きな牧場
を、そして他の一方には一面に別荘で蔽はれた山腹を見せてゐた。
彼等は青緑の中に埋もれんばかりな水浴場の前で、惚るさせるやう
な田舎の一角を過ぎた。其處には新らしい手袋を穿めた紳士達が、
花冠を頂いた婦人達と共に、田舎でしやれた人達のよくやるやうな
あらゆる無作法をやつてゐた。
オクタヂイは喜びの叫びを擧げた。



『ちよいと、今にあすこで水を浴びませうね。』
やがて、も少し進んで灣のやうな所に來ると、彼女は停めるやう
にと望んだ。
『こつちへいらつしやいよ、わたしのそばへ、』と彼女は甘へるやう
に言つた。
彼女は腕を彼の頸のまはりにかけて、そして頸を彼の肩の上に凭
せながら、呟くやうに言つた。
『本當にわたし嬉しいわ！　本當に水の上ッて樂しいものだわね
え！』
パチッソは、一と口に言へば、幸福の中を泳いでゐた。そして彼

はあの馬鹿なボウトの漕手達のことを、――岸の浸み透るやうな魅力をも、ばらの木の脆い美しさをもかつて感じもしないで、喘ぎながら、汗をかきながら、運動の爲めに殘忍にされて、晝飯を食べる酒樓から夕飯を食べる酒樓へといつもまはりあるいてゐる人達のことを考へた。

暫く經つと、あやすやうな周圍の力が、彼を眠りに誘つた。やがて目覺めた時に彼は獨りきりであつた！　彼は最初に呼んだ。誰も答へなかつた。彼はひどく心配になつて、何か不幸が起つたのではないかと恐れながら、土手へ攀ぢのぼつた。

其の時、遙か向うの方から彼の方へやつて來る、長い、細い小船



を見た。それは矢の飛ぶやうに見えた。それは日に燒けて黑ん坊のやうに黑くなつた四人の漕手に依つて漕がれてゐた。彼等は水の上を掠め飛んでゐるやうに見えた。一人の女が舵を取つてゐた。おや！　それは彼女らしい。それは彼女であつた！　橈の調子を整へる爲めに、彼女は其のきいきい聲でボウトの歌を歌つてゐたが、彼等がバチツソの前に來た時にちよつとそれを止めた。そして、彼の方へ接吻を投げながら、彼女は彼に向つて叫んだ。

『進め、大きなカナリやさん！』

## 九、晩餐會

國祭の折に、バチッソ君の局の長官アントアヌ・ペルドリ氏は、レジオン・ドノウルの勳五等に叙せられた。彼は前政府の下に三十年、現政府の下に十年仕へてゐた。彼の部下のものは、長官の身の上にかゝる恩賞の下つたのを少しはぶつ〳〵言つてゐたが、まがひのダイヤモンドで飾られた十字架を彼に贈るがよからうと一決した。そこで新勳五等殿もひけを取らないやうにと思つて、部下のすべてのものを次ぎの日曜日にアスニエエルの邸に於ける晩餐會に招待した。



家は、ムウル風の裝飾で飾られて、カフエの音樂堂のやうな趣を持つてゐたが、其の場所が大きな價値をそれに添へてゐた。といふのは、鐵道線路がずつと其の花園の裾をめぐつて、階段から二十メエトル位のうちを通つてゐたからである。

圓形をなして廣がつた芝生のうちに、ロウマのセメントで出來た池があつて中には金魚が泳いでゐた。そして水鐵砲位の大きさの迸りを持つた噴水が、時々空中に極く小さな虹を描いて訪問客を驚嘆させた。

この池に水を入れることはペルドリ氏のきまつた仕事であつた。彼は溜池を充たす爲めにしば〳〵朝の五時に起きた。シャツだけに

なつて、大きな腹を突き出しながら、一生懸命にポンプを使つた。これは役所から歸つた時に、噴水の噴き出すのを眺めたり、爽凉の氣がそれから花園の方へ廣がつて行くのを想像したりするといふ滿足を持ちたい爲めであつた。

晩餐會の夕方、すべての客は、一人一人、この邸の位置を嘆賞してうつとりとした。そして遠くの方から列車の來るのを聞く度毎に、ベルドリ氏は彼等に其の行く先を、サンジエルマン、ハアブル、シエルブウル、ディエプなどと説明した。そして彼等は汽車の窓から眺めてゐた旅客達にふざけた手眞似などをした。

局の幹部のものがみんな最初に來た。其處には次長のカピテエヌ



君、一等屬のパチッソ君、それから自分達の時間にのみ役所へ出て來るしやれた若い手合のド・ソムブルテル君やヴアラン君、しまひに、不條理な主張を持つてゐるので全省中に有名なラアド君、及び淨書屬のボアヴン君などがゐた。

ラアド君は變物として通つてゐた。ある人々は彼を狂信者若くば理想家として、他の人々は革命家としてあしらつてゐた。彼が度し難い奴だといふことにはすべてのものが一致した。もういゝ年輩で、痩せて小さくて、生きゝとした目と長い薄い髪の毛とを持つてゐた彼は、行政上の職務については最も深い輕蔑を公言しながら一生を送つて來た。彼はあらゆることに常に反對するやうな性質を持つ

た書物の研究者で、そして大なる讀書家で、眞理の探究者で、おまけに通俗な偏見の蔑視者であつた。彼は斬新奇拔な風に自分の意見を表現して、自己に滿足してゐる愚劣な輩や譯も分らずに不平を鳴らしてゐる人々やの口を閉ぢさせた。人々は『あの年甲斐もない馬鹿ラアド、』とか、『あのうすつぺらなラアド、』とかと言つてゐた。そして彼の昇進の遲いことが、彼を攻擊する出世した凡人達を尻押しするやうに見えた。彼の忌憚のない言說はしば〳〵同僚達を戰慄させた。そして彼等は時々どうして彼が自分の地位を保つことが出來たかと怪しんだ。

彼等が食卓に着くや否や、ペルドリ氏は圓轉滑脫な小演說で、彼



の所謂『共働者』に感謝し、彼の權力が增せば增すほど〳〵有力な保護を彼等に與へることを約束し、そして最後に、取るにも足らぬものの功績を認めるに吝かでない寬大にして公正な政府に感謝し、それを讃美する感動的な言葉を以て其の終りを結んだ。

次長のカビテエヌ君が、局の名で答辭を述べて、喜んだり、祝つたり、挨拶したり、稱揚したり、各人の讃美を歌つたりした。そして狂氣のやうな喝采がこれらの二つの短い雄辯の後に續いた。これが濟むと、客はみんな一心になつて食べることに身を委せた。

晩餐の間はすべてが旨く運んで、會話の貧弱なことも誰をも困らせなかつた。所がデザアトになつて議論が不意に起つた。するとラ

アド君ははめを外して、其の言説は漸く分別の境を超え初めた。

彼等の談話は自然と戀愛のことに及んでゐた。そして、武俠の息吸がこの滿堂の局吏を醉はしてゐたので、彼等は軒昂した意氣を以て婦人のすぐれた美や、其の優美な精神や、秀でたものに對する態度や、判斷の正確なことや、感情の精美なことやを稱讃してゐた。

ラアド君は手強く反對し初めて、列擧されたあらゆる實質を所謂美性に與へることを拒んだ。そして憤怒したすべてのものゝ前で、彼はある著者の名を引用した。

『ショウペンハウエルは、諸君、ショウペンハウエルは、ドイツが尊敬してゐる大哲學者である。彼はかう言つてゐる。「男子の聰明は



戀の爲めにひどく暗まされて、あの狹い肩と、大きな臀と、曲つた脚とを持つた背びくの女を美しいと呼ぶやうになつたに違ひない。女の一切の美は、實に、戀の本能にもとづいてゐる。女を美性と呼ぶよりは、寧ろ非美性と呼んだ方が一層正しかつたであらう。女は音樂の情操も知解も持つてゐないと同時に、詩歌や成型美術の知解も情操も持つてゐない。彼等のうちにはただ、氣に入らうとする欲望から養はれた、純粹の模倣と、純粹の假僞と、純粹の矯飾とがあるばかりである。」』

『そんなことを言つた奴は馬鹿なんだ！』とド・ソムブルテル君が斷言した。

ラアド君は、にこ〳〵しながら、言葉を續けた。

『ではルッソオは、諸君？　彼の意見はかうである。「女は一般に藝術を愛せず、何物にも熟達せず、そして何等の天才をも持つてゐない。」』

ド・ソムブルテル君はさげすむやうに肩を聳かした。

『ルッソオも先きの奴と同じく馬鹿なんだよ、それだけさ。』と彼は言つた。

ラアド君はやはりにこ〳〵しながら答へた。

『そしてバイロン卿は、女を愛したにもかゝはらず、かう言つた。「彼等は善く養つて善く着せなければならぬ。けれども社會にまじ



らせてはならない。彼等はまた宗教に敎へ込まねばならぬ。けれども詩歌や政治に親しましてはならぬ。たゞ信心の書物と料理の本とを讀ませればよい、」と。見たまへ、諸君。』とラアド君は言葉を續けた。『彼等はみんな繪畫や音樂を研究するが、未だ曾て立派な畫を書いたものや、すぐれたオペラを作つたものは一人もないではないか！　なぜだらう、諸君？　たゞ彼等が劣等な性だからである、あらゆる點に於いて第二の性だからである、別に離れて、第二の世界にゐるやうに作られてゐるからである。』

バチッソ君は腹を立てた。

『では君、サンド夫人は？』

『例外さ、君、例外さ。僕は君の爲めにもう一つ別の文句を、イギリスの大哲學者ハアバアト・スペンサアから引用しよう。それはかうである。「男女何れも特別な刺戟の力の下では、普通ならば異性にのみ保留されてゐる能力を顯はすことも可能である。かくして、極端な例を取つて言へば、ある特別な刺戟があれば男の乳房から乳を出すやうにすることも出來る。飢饉の時に母親を奪はれた小さな子供達がこの方法で救はれたのは有名な話である。けれども、我々は乳を與へるといふこの能力を男の屬性のうちに置かうとはしない。それと等しく、女の知能が、ある場合にすぐれた作物を出すからと言つて、それを社會的要素として、女の性質の評價の中に算入する譯



には行かない。」』

バチツソ君は、彼の本來の武俠的本能を全く傷けられて、かう斷言した。

『君はフランス人ではないんだ。フランス人の婦人に慇懃なのは愛國心の一種の發露である。』

ラアド君は言ひ返した。

『僕は極めて少しの愛國心しか持つてゐないんだ、君、本當に少ししか。』

これを聞くと一座は全く白けわたつた。けれども彼は平氣で言葉を續けた。

『僕をして言はしめれば、戰爭は奇怪なものである。公然と人間を殺戮するといふこの習慣は永久に野蠻な狀態を構成するものである。唯一の眞の善は生活であるが故に、臣民の生存を保護するのが義務であるところの政府が、却つて彼等を滅す方法を飽くまでも求めてゐるのを見るのは忌はしいことである。さうでないか？　そして、もし戰爭が恐ろしいものであるならば、それを支持してゐる根本觀念であるが故に、愛國心もまた恐ろしいものではないか？　暗殺者が殺す時には、彼はいつでもある目的を持つてゐる、それは盜むといふことだ。所が善良な男が銃劍を以て他の正直な男を、一家の父を、ひよつとすると大藝術家を殺す時には、いかなる思想に彼



は從つてゐるのか？』

すべてのものは深く辱しめられたやうな氣持がした。

『人はさういふ事を考へても、社會では往々にして述べないものだ。』とラアド君は言ひ添へた。

パチツソ君はまた答へた。

『けれども、君、すべての正直な者が認めてゐるある原理といふものがある。』

『原理ツて何か？』とラアド君は訊いた。

『道德さ、君。』とまじめ臭つてパチツソ君は答へた。

ラアド君の顏は輝いた。

『君に一例を與へよう。』と彼は言つた。『ちよつとした一例を、君、君は女の仕送りで暮らしてゐるある種の人々についてどういふ意見を持つてゐるか？　いゝかい、たつた百年前には、女の仕送りで暮らすことは、いやそればかりではない、女の全財産を食ひ潰してしまふことさへも、全く當然なことと考へられてゐたんだぜ。して見れば君、道德の原理なんか、一定してはゐないんだ。だからして……』

ペルドリ氏は、明らかに當惑して、彼を遮つた。

『ラアド君、君は社會の基礎を覆すかも知れない。道德上の原理は一般の安寧を保つものとして常に存在しなければならぬものである。だからして政治上に於いては、ドド・ソムブルテル君は正統派であり、ヴアラン君はオレレアン黨、バチツソ君と吾輩とは共和黨であつて、我々はすべて非常に異つた主義を持つてゐるが、しかも我々は極めて睦しく暮らしてゐる、といふのは、ある種の原理を我々が持つてゐるからである。』

所がラアド君は叫んだ。

『諸君、僕もまた原理を持つてゐる……極めて明白な原理を。』

バチツソ君は頭を擧げて冷かに答へた。

『そいつは是非一つ聞きたいものだね、君。』

ラアド君は催促されるのを待たなかつた。

『それはかうなんだ、君。第一の原理は――一人に依つての政府は畸形である。第二の原理は――制限選擧は不正である。第三の原理は――普通選擧は間拔のかたわれである。幾百萬の人間を、選まれた人々を、學問のある人々を、のみならず天才までも、一人の人の出來心卽ち意志に任せるとすれば、其の人は悅樂、狂氣、酩酊、もしくは戀愛の瞬間に於いて、其の興奮した空想の爲めにあらゆるものを犧牲にすることを躊躇せぬであらう、すべてのものが辛苦して集めた國の富を浪費するであらう、幾千の人間を戰場の屍として曝すであらう、これは、論理一點張りの僕には奇怪な錯行であるやうに見える。



『さりとて、國家はそれ自身治むべきものであるといふ說を許すとしても、常に異論を挾むことの出來るやうな口實の下に、市民の一部を選擧から除くことは、いかにも明白な不正であつて、僕にはこの上議論する必要はないやうに見える。

『殘る所は普通選擧である。天才のある人々が稀であることは諸君も僕と共に認めるであらう、どうか？　一歩を讓つて、今日のフランスに五人あるとしておかう。そして、やはり我々の概算を一致させる爲めに、大才能のあるものを二百人、種々の才能を有するものを一千人、ある方面にすぐれてゐるものを二千人、それに加へておかう。さうすると三千二百五人の幹部があることになる。其の後に

は凡庸軍と、續いて無數の愚昧の奴等とがある。凡庸と愚昧とはいつでも大多數であるから、彼等が聰明な政府を立て得るといふことは承認することが出來ない。

『公平の點から言へば、論理上、普通選擧が唯一の許さるべき原理であるやうに僕には見えるといふことを附け加へておかう。けれども僕はそれが適用の出來ないものであると斷言する。其の理由を諸君に示さう。

『一國のあらゆる生活力を政府に協同させて、あらゆる利害を代表させ、あらゆる權利を保存させるといふことは、理想の夢であつて、實際的ではない。なぜかといふに、計量され得る唯一の力は、



ただ最も等閑に附せらるべきもの、卽ち無數の者の兇猛の力だけだからである。諸君の方法に從へば、無數の無智な者が天才や、學問や、あらゆる習得された知識や、富や、產業やを導くことになる。諸君がぼろ屋の一票に對して一萬票を博士會の一員に、小作人の十票に對して大地主に百票を與へることが出來る時に、始めて生活力の間に平衡を得て、國民のあらゆる權力を眞に代表する國民的代表者を得るに近いであらう。併し諸君にそれが爲せるか。

『そこで僕の結論はかうである。以前は人が何物にも成功することの出來なかつた時は、寫眞屋になつた。今は代議士になる。かくのごとくにして作られた力は常に悲しむべき無力なものであらう。併

し善を爲すことも出來ぬと同時に惡を爲すことも出來ぬであらう。
專制君主は、これと反對に、もし彼が馬鹿ならば、多くの惡をなすかも知れない。そしてもし、滅多にさういふことはないが、彼が聰明ならば、多くの善を成し遂げるかも知れない。
『これらの政府の形式の間に、僕は決定しようとは思はない。僕自身は無政府論者である。――といふ意味は、最も多く塗りつぶされた、最も多く認められない、併し最も廣義な意味に於いて、最も多く自由な、そして同時に革命的な、卽ち、現狀の下では、たゞ全く缺點のある外何物でもない永久の敵に對して革命的な力の味方である。』



憤怒の叫びが食卓のまはりに起つた。そしてすべての客は――正統派も、オルレアン黨も、共和黨も――まつかになつて怒つた。殊にバチッツ君は、息も詰まるばかりに怒つてゐたが、ラアド君の方へ向いて、かう言つた。
『ぢやア、君、君は何にも信じないんだな。』
『信じないよ。』と相手は簡單に答へた。
この答にすべての客は激怒して、ラアド君に言葉を續けさせなかつた。とペルドリ氏は、長官としての特權を以て議論を結んだ。
『澤山だ、諸君、――！我々はおの〳〵我々の意見を持つてゐる。そして我々はそれを變へることは出來さうにないのだ。』と彼は嚴かに

言つた。

第一の說は承認された。けれどもいつも謀叛氣のあるラアド君は、最後の言葉を言はうと心を決めた。

『けれども、僕は道德上の原理を持つてゐる。』と彼は言つた。『それは次ぎの一句に約めることが出來る。「汝が人にされたくないことを、人にすること勿れ。」それを非難するならして見給へ。僕は三つの議論のうちで、諸君の原理の中で最も神聖なものを破毀しようとするのだ。』

今度は誰も答へなかつた。けれども彼等は其の晩、二人づゝ連れ立つて歸途に就いた時に、銘々其の連れに言つた。



『實際、ラアド君はあまり極端過ぎるね。あの男の頭は確に變だぜ。シャラントンの養育院長に任命されべきだね！』

## 十、公衆大會

上の方に、いやに派手な文字で、『舞踏會』といふ言葉を現はしてゐる戸口の兩側に、燃え立つやうな赤色の大きなびらが、今日の日曜日にはこの一般の娯樂場が他の目的に使はれてゐることを知らせてゐた。

バチッソ君は、食後の腹ごなしに立派な市民らしくぶらぶら歩きながら、ゆつたりとした歩みを停車場の方へ向けてゐたが、ふとこの赤色のびらに注意を惹かれて立ち止つた。そして次ぎのやうに讀んだ。

女權擁護一般國際協會

公衆大會

在パリ中央委員

自由思索家女市民ゾエ・ラムウル、及びロシアの虚無黨員女市民エヴ・シュウリンの主裁の下に、獨立思想の自由派女市民の代表者、及び一團の市民黨員の補助を以て、女市民セザリイヌ・ブロオ及び追放から歸つた市民サピアンス・コルニュの演說がある。



入場料　一フラン

眼鏡をかけた年寄の女が、クロオスのかゝつたテエブルに向つて、金を取つてゐた。

バチッソ君ははひつた。

もう殆んど滿員になつてゐた部屋の中には、濡れた犬のやうな匂ひが浮んで、公衆舞踏會の變な匂ひとまざり合つてゐた。

バチッソ君は、あたりを見まはして、第二列に一つの席を見附けた。傍には女工のやうな服裝をした小柄な女が、得意さうな顏付をしてゐたが、腫物が一つ其の片頰に出來てゐた。

幹部はみんな揃つてゐた。女市民ゾエ・ラムウルは、いゝ顔付をした、肥つた、色の黒い女で、黒い髪に赤い花をかざして、痩せた小さなロシアの虚無黨員女市民エヴ・シユウリンと主裁の地位を分つてゐた。

彼等の眞下に、『男の揚足取り、』と呼ばれた、有名な女市民セザリイヌ・ブロオが、やはり綺麗な女が、追放から歸つた市民サビアンス・コルニユと並んで坐つてゐた。後者は垂れた捲髪と獰惡な容貌とを持つたがつしりとした老人で、固く握り締めた拳を膝の上に置きながら、丁度猫が鳥の群を窺ふやうに部屋の中をぢつと見まはしてゐた。



右の方には、彼等の夫達から引き離され、獨身に乾しからされ、待ちぼうけにされて腹を立てゝゐた古い女市民達の代表者が、『人類の改造者』を以て任じてゐる一團の市民と向ひ合つて坐つてゐた。この市民達は、疑ひもなく彼等の向上心の無限なことを示す爲めに、其の髯をも髪をも決して刈らなかつた。

一般の公衆は部屋ぢゆうにちらばらになつてゐた。それは混り合つた集りであつた。

日曜日に店を閉ぢる店商人や門衛などの階級に屬する女が、大多數を占めてゐた。これと言つて樂みのない婆あやのやうなものも、中流婦人の赤い顔の間に挾まつて、到る處に見えた。

三人の大學生が隅の方でこそ〳〵話してゐた。彼等は女の群の中にゐようとして此處へ來たのであつた。幾らかの家族も好奇心から此處へはひつてゐた。

前の列に、黄色い蒲團縞を着た、ちぢれ毛の偉大な黒ん坊が、主裁者を見詰めながら、相格を崩してにやにやしてゐた。この默つた、抑へた笑ひが彼の白い齒をむき出して其の黒い顏を輝かした。彼は身體を動かさずに笑つた。それは丁度たまらないほどに嬉しくて、喜んでゐる人のやうだつた。なぜ彼が其處にゐたか？　奇蹟だ。彼は觀世物へ來てゐたと思つてゐたか？　それともあの羊毛のやうなアフリカ頭の中で、『本當に、あいつらは馬鹿に可笑しいぞ、あの道



化者等は。赤道の下ではあんなやうなものは何にも見られやアしねえ。』と自分に言つてゐたか？

女市民ゾエ・ラムウルは簡單な演說を以て會を開いた。

彼女は世界開闢以來の婦人の隷屬を說いて、其の世に隱れた、併し雄々しい位地や、あらゆる大思想に絕えず貢獻したことやに及んだ。彼女は婦人を他の時代の人民に、國王の人民に、貴族の人民に比較して、常に男子を主人として、仕へた永久の殉敎者であると呼んだ。そして抒情的な大爆發で彼女は叫んだ。

『人民は彼等の八十九年を持つた——我々をして我々の八十九年を持たしめよ！　壓制された男子は彼の革命を爲した。囚はれたもの

は其の鎖を切つた。虐待された奴隷は謀叛した！　婦人諸君！　我
我をして我々の暴君に倣はしめよ！　我々をして結婚と隷屬との古
い鎖を切らしめよ、我々をして我々の權利の勝利に進ましめよ、更
に我々をして我々の革命を爲さしめよ！』
彼女は割れるやうな喝采のうちに壇を降つた。と黒ん坊は、無闇
に嬉しがつて、きいきいいふ叫びを發しながら、頭で其の膝を敲い
た。
ロシアの虚無黨員女市民エヴ・シュウリンが立つた。そして、突き
刺すやうな兇猛な聲で言つた。
『わたくしはロシア人である。わたくしは謀叛の旗を擧げた。この



わたくしの手はわたくしの國の壓制者を打つた。わたくしは諸君に、
今わたくしの話を聽いてゐるフランスの婦人諸君に告げる、わたく
しはあらゆる空の下で、宇宙のあらゆる部分において、男子の暴虐
を打たうと用意してゐる、かくも忌はしく壓制されてゐる婦人の爲
めに到る處で復讐せんとしてゐる！』
大騒動のやうな賞讃の聲が起つた。と市民サビアンス・コルニユ
は、自ら起ち上がつて、其の黄褐色の髯をこの復讐する手に慇懃に
こすりつけた。
そこで儀式は眞に國際的性質を帶びて來た。外國の同志から派遣
された女市民達が、代る代る立つて、銘々の國の同意を言ひ出した。

ドイツの女が最初に話した。ぽた〳〵に肥つて、麻のやうな髪の毛をたつぷりと持つた其の女は、太い聲で、そして兇暴な調子で早口にしやべつた。

『わたくしはパリの婦人達の大運動を聞いた時にドイツの娘が抱く滿腔の喜びを諸君に告げたいと思ふのである。』

イタリイの女も、スペインの女も、スウエデンの女も、みんな變な言葉で殆んど同じ事を言つた。と最後に、庭道具に似た齒を持つてゐた、並外れて背の高いイギリスの女が、かういふ言葉を述べた。

『わたくしもまた、女性の最後の完全な解放の爲めに、フランスの繪のやうな婦人諸君に提供された自由イギリスの婦人達の協力を諸



君に保證したいと思ふのである！　ヒップ、ヒップ、ハラア！』

これを聞くと黒ん坊は熱狂した叫びを發し初めて、方圖もなく嬉しさうな身振りをしながら、腰掛の背に脚を擧げて其の脚を烈しく平手でぴた〳〵と敲いた。それは會の監視が彼を鎭めずにはゐられなかつたほどだつた。

パチツソの隣りの男は呟いた。

『ヒステリイの女達だ！　みんなヒステリイの女達だ！』

パチツソは話しかけられたのだと思つて、答へた。

『何ですか！』

紳士は言譯をした。

『御免なさい、わたしはあなたにお話したのぢやありません。ただあの女達はみんなヒステリイだと言つたばかりです。』

バチツソ君は、魂消るほどに驚いて、訊いた。

『ぢやア、あなたはあの人達を御存じなんで？』

『えゝ、いくらか知つてゐますよ。ゾエ・ラムウルは尼にならうとして試煉を受けたんです。それが一つ。エヴ・シユウリンは放火犯として罰せられて、そして氣違ひであるときめられたのです。それが二つ。セザリイヌ・ブロオは口先ばかりの陰謀家で、それを自分でしやべりたがつてゐるのです。外にまだX——病院でわたしの手にかゝつたものが三人あすこにゐます。わたし達のまはりにゐるすべての



老いぼれに至つては、わたしはお話しする必要を認めません。』

『しいッ、』といふ高い聲が八方から起つた。追放から歸つた市民サビアンス・コルニユが立つた。彼は先づ其の恐ろしい目をぎろりとさせてから、洞穴の中で風が唸るやうな響を持つたばつとした聲で初めた。

『其處に原理ほどに大きくて、太陽のやうに照り輝き、雷鳴のやうに鳴り渡つてゐる、自由！　平等！　四海同胞！　といふ言葉がある。彼等は人民の旗じるしである。彼等の抱擁の下に我々は勇敢に暴虐の攻撃に進軍した。おゝ婦人諸君！　彼等を武器として振りまはし、獨立の勝利に向つて進軍するのは諸君の番である。自由であ

れ、戀愛に於いて、家庭に於いて、祖國に於いて、自由であれ。爐邊に於いて我々の同輩となれ、往來に於いて我々の同輩となれ、殊に政治に於いてそして法律の前に我々の同輩となれ。四海同胞！我々の姉妹であれ、我々の大計畫の味方であれ、我々の勇敢な伴侶であれ。人類の單なる一小部分であることの代りに、眞に人類の一半になれ。』

そして彼は超越政治にはひつて、世界大の計畫を擴げ、社會の精神を語り、自由、平等、四海同胞といふ三つの破ることの出來ない基礎の上に建てられた全世界共和國を豫言した。

彼がしやべるのを止めた時に部屋は喝采の一齊射擊を以て搖り動



かされんばかりであつた。バチツソ君は、びつくりして、隣りの男の方へ向いて、訊いた。

『あの男は少し狂つてゐませんか？』

老紳士は答へた。

『いや、君、あゝいふ手合は何百萬もゐますよ。それは教育の結果です。』

バチツソには分らなかつた。

『教育の？』と彼は訊いた。

『さうです、彼等が讀んだり書いたりすることを知つたものですから、潜伏してゐた馬鹿が出て來たのです。』

『ぢやア、なんてすか、あなたは教育といふものは……』

『御免なさいよ、君、わたしは自由主義者です。わたしが言ひたいのはたゞこれだけです。――えゝと、あなたは時計を持つていらつしやる？　よろしい、一つぜんまいをこはして、それをあの市民コルニユに渡して、直して呉れるやうにと頼んで御覽なさい。彼はむきになつて、わたしは時計屋ではないとあなたに答へるでせう。所がですね、フランスといふ名を持つたあの無限に複雑な機械に何か惡い所があれば、彼はゐながらにしてそれを修理することの出來る最も適任者であると自分を信じてゐるのです。そしてあの男のやうな論客が四萬人も同じことを考へて絶えずそれを言ひ觸らしてゐる



のです。ねえ、君、我々は此處に新らしい統治階級を缺いてゐるのです。權力を持つた親から生れた人々が、其の思想に養はれ、殊に其の目的に向つて教育されたやうに、――若い人達は萬藝に達するやうにと教へられる……。』

無數の『しいッ』といふ叫びが再び彼を妨げた。沈鬱な顔付をした青年が演壇に立つた。

彼は初めた。

『婦人諸君、わたくしはみなさんの説を攻擊せんが爲めに話すことを許して下さるやうに願つたのであります。男子に依つて運用されゐる市民權に等しいものを、婦人の爲めに求めることは、みなさ

んの力の最期を求めることに等しいのであります。婦人の外貌のみを以て見ましても、婦人が烈しい身體の勞働や、長い智力上の努力に適してゐないことは明らかであります。婦人の領域は別のものです。しかも少しも美しさに於いて劣つたものではなりません。婦人は人生に詩を與へます。其の愛嬌の力に依つて、其の眼の閃きに依つて、其の微笑の魅力に依つて、婦人は世界を支配してゐる男子を支配してゐます。男子は力を持つてゐる。それをみなさんは彼から取ることは出來ません。けれどもみなさんは彼の力を擒にする手管を持つてゐられる。何でみなさんは不平を鳴らされるのですか？世界が初まつて以來、みなさんは女王であり支配者であつた。何事



と雖もみなさんなしには爲されない。すべての美しい仕事が爲し遂げられるのは一にみなさんの爲めである。

『けれども皆さんが、民事上及び政治上に、我々の同輩となる日には、皆さんは我々の敵手になるでありませう。氣をお付けなさい、其の時、皆さんの一切の力を構成する所の魅力が破られないやうに。其の時になれば、我々は爭ふべくもなく一層強く一層よく科學及び藝術に向つて用意されてゐるが故に、皆さんの劣等なことが現はれるでせう。そして皆さんは本當に壓制されるやうになるでせう。

『婦人諸君、みなさんは演ずべき美しい役を持つてゐられる。なぜかといふに、我々に對してみなさんは人生の一切の誘惑を、限りな

き幻影を、我々の努力の永久の報酬を代表してゐられるからである。これを變へようとするのはお止しなさい。のみならず、みなさんはさうすることに決して成功しないでせう。』

しいッといふ聲が彼を妨げたので、彼は壇を降りた。

バチッソの隣りの男は、立ち上がりながら、言つた。

『ちよつとロマンチックだね、あの青年は、だがそれにしても旨いことを言ふよ。どうです、君、行つて一ぱいやりませんか？』

『結構です。』とバチッソは答へた。

彼等が出へ行つた時に女市民セザリイヌ・ブロオは反駁しようとしてゐた。



# 歸村

# 歸村

海は短い、單調な波で岸を打つてゐる。白いちぎれ雲は、疾い風に追はれて、小鳥のやうに、廣い青空を横切つて飛んで行く。そして村は、太洋の方へだらだら下りになつてゐる小さな谿の襞襞の中に、日に暖まつてゐる。

村の入口に、マルタン・レエスクの家が、たゞ一軒、路端に立つてゐる。粗壁の漁師小屋で、藁葺の屋根の上には一八が青々と繁つて

ゐる。葱や、キャベツや、三つ葉や、山人參などの作つてあるハンケチほどの大きさの菜園畑は戸口の前に方形をなしてゐる。垣根が道に沿うて結つてある。

亭主は漁に出てゐる。そして上さんは、小屋の前で、ばかに大きな蜘蛛の巣のやうに、壁の上に張り渡してある大きな茶色の網の目を繕つてゐる。十四になる娘は菜園畑の入口で、藁椅子に坐つて、後ろの凭りかゝりに背をもたせながら、シャツを、前に繕つたりつぎを當てたりした粗末なシャツをつゞくつてゐる。もう一人の、一つ年下の娘は、まだあやすほどにもならぬ小さな赤ん坊を抱いて搖ぶつてゐる。そして二つか三つ位の二人の幼兒は、後ろの方の土の



中で、鼻と鼻とを突き合せて、覺束ない手付きで庭を作りながら、互ひに顔へ砂を一掴みづゝ投げたりしてゐる。

誰も口を利かない。たゞ眠らせようとしてゐる赤ん坊だけが、かん高い、脆い、小さな聲で絶えず泣いてゐる。猫が窓敷の上に眠つてゐる。そして丁度咲き滿ちてゐる丁字の花が、其の壁の下で、白い花の美しいクションを作つて、その上に蠅の群がぶん〳〵と羽音を立ててゐる。

入口の傍で縫物をしてゐる娘が、不意に聲を擧げる。

『おッかあ！』

母親が答へる。

『何だよ？』

『あいつ、また來たよ。』

彼等は朝から不安でゐる、といふのは、一人の男が、乞食のやうな風をした年取つた男が、家のまはりをうろ〳〵してゐるからである。彼等が其の男を始めて見たのは、父親が船に乗つて出掛けるのを送りに行つた時であつた。男は家の入口に向ひ合つた、溝の縁に坐つてゐた。そして、濱から歸つて來ると、彼等は男が其處で、ぢつと家を眺めてゐるのを見た。

男は病んでひどく難儀してゐるらしかつた。彼は一時間以上も動かなかつた。がやがて、惡者と思はれたのに氣が付いて、立ち上が



ると、足を引きずりながら行つた。

所が幾らも經たぬうちに、彼等は彼がまたのろい疲れた足取りでやつて來るのを見た。そして今後は幾らか離れた所に、彼等を窺はうとでもするやうに、また坐つた。

母親と娘達とは恐ろしくなつた。殊に母親は隠病の性質であつた上に、亭主のレエスクは、夜にならなければ海より歸りようがなかつたので、ひどく心配した。

亭主はレエスクと呼ばれ、彼女は、人々がマルタンと言つた。そして人々は彼等をマルタン・レエスクと呼んでゐた。其の譯はかうである——彼女は前にマルタンといふ水夫と結婚した。其の男は毎年

夏になるとテルヌウヴへ鱈漁に出掛けて行つた。

結婚してから二年經つて、彼女が一人の小さな娘を持つた上に、姙娠六ケ月であつた時に、夫の乘り込んだヅウスウルといふ、ディエプの三本マストの船は、行方不明になつた。

全く何の便りもなかつた。それに乘り込んだ水夫は一人も歸らなかつた。そこで人々は、人も物も一切が失はれたものと考へた。

マルタンの上さんは、ひどい苦勞をして二人の子供を育てながら、十年の間夫の歸りを待つてゐた。すると、彼女がしつかりした、氣立のいゝ女だつたので、土地の漁師でレエスクといふ、一人の男の兒を持つた鰥夫が彼女に結婚を申込んだ。彼女は彼と結婚した。そ



してまた三年の間に二人の子供を生んだ。

彼等は苦しい、つらい生活をしてゐた。パンがやつとで、肉は家の中で殆んど知られてさへゐなかつた。で折々、冬の間、幾日もしけが續く時は、パン屋に借りをこしらへた。でも子供はよく育つた。で人々は言つた。

『えれえ人達だぞよ、マルタン・レエスクは。マルタンの上さんは働きもんだし、レエスクはまた、漁にかけちやア及ぶ者がねえんだからな。』

椅子に坐つてゐる娘はまた言つた。

『あいつ、わたい達を知つてるんだよ。あれや屹度エプレヰイユか

オウズボスクの乞食なんだよ。』

けれども母親はそれに誤られなかつた。いや、いや、確に、この邊のものではなかつた！

彼は杭のやうにぢつと動かずに、目を執ねくもマルタン・レエスクの小屋に着けてゐたので、マルタンの上さんは、むつとすると共に、恐ろしさに勵まされて、十能を掴んで門前へ出て行つた。

『何をお前さんは其處でしてゐるんだい？』と彼女は胡散な男に向つて呶鳴つた。

彼は嗄れ聲で答へた。

『わしは休んでゐるのぢや！　何かお前さんに惡いことでもしたか



い？』

彼女はまた言つた。

『なんでそれぢやア、わしらが家の前で、さうじろじろ見てゐなさるんだい？』

男はまた答へた。

『わしは誰にも惡い事をしやアしない。それとも路端に休んでゐちやアいけないのかい？』

返す言葉が見付からなかつたので、彼女はまた家へはひつた。

日は徐かに移つた。晝頃になると、男は見えなくなつた。所が彼はまた五時頃に歸つて來た。晩にはもう見えなかつた。

レエスクは夜になつてから歸つて來た。みんなは彼に其の事を話した。彼はかう括りを付けた。

『それやアのらくら者か碌でなしだ。』

そして彼は氣にも留めずに寢床へ行つた。けれども上さんの方は、あのいかにも變な目付でじろ〳〵見てゐた胡散な奴の顏付に、執ねく惱されてゐた。

夜が明けると、强い風が吹いてゐて、漁師は、迚も海へ出掛けられさうもなかつたので、上さんに手傳つて網の繕ひをすることにした。

九時頃に、パンを買ひに行つたマルタンの姉娘が、たまげた顏を



して、駈けて歸つて來て、叫んだ。

『おッかあ、あいつ、また來たよ！』

母親はハッと思ふと、眞靑になつて、亭主に言つた。

『さあ行つて、あいつに言つとくれよ、レエスク、わたし達をあゝじろ〳〵見ないやうにッて、わたしゃう、氣が違ひさうだから。』

そこで煉瓦のやうな顏色をした、赤い髭の濃い、靑い目の中に黑い瞳の光つてゐる、强い雨や風を凌ぐ爲めにいつも羊の毛で包まれた頸の太い、背の高い漁師のレエスクは、靜かに出て行つて胡散な奴に近づいた。

そして二人は話し初めた。

母親と子供達とは心配して顔へながら、遠くから彼等を見てゐた。不意に、知らぬ男は立ち上がつて、レエスクと一緒に家の方へやつて來た。

マルタンの上さんは、びつくりして、あとじさつた。亭主は彼女に言つた。

『この人にパンを少しとサイダアを一ばいやんなよ。おとゝひから何にも食べないんだとよ。』

そして二人は連れ立つて小屋の中へはひつた。後から母親も子供達も續いた。胡散な男は坐つて食べ始めた、みんなの注目の下に頭を垂れながら。



母親は、立つたまゝで、ぢつと彼を見詰めてゐた。二人の大きなマルタンの娘達は、戸に凭りかゝつて、一人は赤ん坊を抱いたままで、穴のあくほど目を男の上に据ゑてゐた。そして爐の前の灰の中に坐つてゐた二人の幼兒も、また此の知らぬ人をよく見ようとでもするやうに、黒い鍋でいたづらをしてゐたのを止めた。

レエスクは椅子に腰をおろしてから彼に訊いた。

『ぢやアお前さんは遠くから來たんだね？』

『わしはセットから來たんだよ。』

『歩いてかね、さういふやうに？』

『さうともさ、歩いてさ。一文なしの時にやア外に仕方がないから

ね。』

『それでこれから何處へ行くんだね？』

『わしは此處へ來たんだよ。』

『ぢやアお前さん、誰か此處に知つたものがあるんだね？』

『まあさうだよ。』

二人は默つた。彼は隨分飢ゑてはゐたが、でもゆつくりと食べた。そしてパンを一口食べる毎にサイダアを一口飲んだ。彼は衰へた、皺の寄つた、何處もかもからになつたやうな顏をしてゐた。そしてひどい難儀をして來たやうに見えた。

レエスクは出し拔けに彼に訊いた。



『お前さんの名は何といふんだね？』

彼は俯向いたままで答へた。

『わしの名は、マルタンぢや。』

ぞつとする身震ひが母親の身體を走つた。彼女はもつと傍で此の宿無しを見ようとでもするやうに、一足前へ進んで、彼の眞向うに立つた、腕をぶらりと下げ、口をぽかんと明いたままで。誰も何も言はなかつた。レエスクはたうとうまた口を切つた。

『お前さんは此處の者かね？』

彼は答へた

『此處の者だよ。』

そして彼がたうとう頭を擧げると、上さんの目と彼の目とはぴつたりと合つて、まるで目で結び付けられでもしたやうに、互ひに混ざり合つたまゝで動かなかつた。

と彼女は不意に、異つた、低い、顫へ聲で言つた。

『お前さん、お前さんかね？』

彼は徐かに言つた。

『さうぢや、わしぢや。』

彼は身動きもせずに、パンを嚙み續けた。

レエスクは動かされたよりももつとびつくりして、吃りながら言つた。



『お前さん、マルタンさんかね？』

相手は簡單に言つた

『さうぢや、わしぢや。』

で第二の夫は訊いた。

『ぢやア何處からどうして來なすつた？』

第一の夫は話し出した。

『アフリカの海岸からぢや。わし達は暗礁に乘り上げたのぢや。わし達三人だけが、ピカルとヴチネルとわしだけが助かつたのぢや。そして野蠻人に捕まつて十二年間留められたのぢや。ピカルとヴチネルは死んでしまつた。イギリスの旅の人が其處を通りかゝつて、

わしを一緒に連れて、セットまで連れて來て呉れたのぢや。でわしは此處にゐる。』

マルタンの上さんは、顔を前掛で蔽うて、しく〳〵と泣き出した。

レヱスクは言ひ出した。

『一體これやアわし達はどうするやアいゝのか？』

マルタンは訊いた。

『お前さんはこの女の御亭主かね？』

レヱスクは答へた。

『さうぢや、わしぢや！』

二人は顔を見合つて默つた。



やがて、マルタンは、彼のまはりに輪をなしてゐる子供達を考へるやうにして見てゐたが、頭を頷かせて二人の娘達を指し示した。

『あの二人はわしのぢやね？』

レヱスクは言つた。

『お前さんのぢや。』

彼は立ち上がらなかつた、接吻しようともしなかつた。彼はたゞ言つた。

『おゝ、大きくなつたなあ！』

レヱスクはまた言つた。

『一體わし達はどうすれやアいゝのか？』

マルタンも困つて、どうしてよいか知らなかつた。たうとう彼は決心した。

『わしは、お前さんのいゝやうにする。わしはお前さんに迷惑をかけたくはない。この家を見ると、どつちにしても厄介ぢや。わしには二人の子供がある、お前さんには三人の子供がある、それ〴〵自分のものぢや。お袋は、お前さんのものか、わしのものか？　わしはお前さんの好きに任せるが、この家は、これはわしのものぢや、親爺がわしに遺して呉れたんだし、わしは此處で生れたんだし、公證人の所に書附もあるんだし。』

上さんはまだ泣いてゐた、小さな啜り泣きが、前掛の青い切れの



中から洩れ聞えた。二人の大きな娘は傍へ近く寄つて、不安さうに父親を見てゐた。

彼は食べてしまつた。今度は彼が言つた。

『一體わし達はどうすれアいゝのぢや？』

レエスクはふと思ひ付いた。

『司教さんの所へ行くが一番だ、あの方が決めて下さらう。』

マルタンは立ちあがつた、そして彼が妻の方へ近付くと、彼女は啜り泣きながら彼の胸に身體を投げかけた。

『お前さん！　歸つたの？　お前さん、おゝ、お前さん、歸つたの！』

と彼女は、不意に昔の血に、はたちの歳と、始めての抱擁とを思

ひ出させる記憶の大きな波に動かされて、腕一ぱいに彼を抱いた。

マルタンもまた動かされて、彼女の輕布帽の上に接吻した。爐の前にゐた二人の子供は、母親の泣くのを聞くと、一緒にわあッと泣き出した。そして赤ん坊もまた、マルタンの二番目の娘の腕の中で、調子外れの笛のやうな鋭い聲で泣き出した。

レエスクは立つて、待つてゐた。

『さあ、』と彼は言つた。『行つて決めなけれやアならんよ。』

マルタンは妻を放した、そして、彼が二人の娘を見ると、母親は彼等に言つた。

『おとつさに、せめて接吻なりとおしよ。』



娘達は乾いた目をして、呆れて、いくらか恐れながら、一緒に傍へ寄つた。で彼は一人づゝ、兩方の頰の上に、田舍者の大きな輕い接吻をした。と、この知らぬ人を傍に見ると、赤ん坊は殆んど引きつけさうなほどに泣き聲を立てた。

やがて二人の男は一緒に出て行つた。

二人がカフエ・コンメルスの前に差しかゝると、レエスクは訊いた。

『一ぱいやつて行かないか？』

『結構だね。』とマルタンは言つた。

二人ははひつて、まだ空つぽな部屋の中に坐つた。

『えゝ！　シコさん、ふたッつ、いゝのをね　マルタンが歸つて來たんだよ、マルタンが、うちの奴のマルタンがさ、おめえよく知つてよう、それ分らなくなつたヅウスウルのマルタンさ。』

すると、腹の便々とした、赤ら顏の、脂肥りの居酒屋の亭主は、片手に三つのコップを、片手に壜を持つて出て來た、そして落付いた調子で訊いた。

『へえ！　マルタンさん、歸つたの？』

マルタンは答へた。

『歸つたよ！……』



# 棄てられた人

# 棄てられた人

『本當に、お前は氣でも違つたのではないかえ、こんな天氣の日に田舍へ歩きに行かうなぞと。お前は、この二た月ばかりこつち、どうも變なことばかり考へてゐるよ。いや應なしに、人をこんな海岸へ引つぱつて來たりさ。わたし達が一緒になつてから四十五年の間、ついぞこんな我が儘を出したことはなかつたではないか。勝手にこんなフエカムなんていふ陰氣な町を選んでさ、そしてまた今日とい

へば、不斷は滅多に動かうともしないお前が、一年中で一番暑い日にどうでも田舍の方へ行かねばならぬなぞと、まるで散歩熱にでも浮かされてゐると言つた沙汰だ。ダブルヴルさんに賴んで御覽、一緒に行つて頂くやうに、あの人は何でもお前の氣まぐれを聽いて下さるのだから。わしはまあ、歸つて晝寢でもしよう。』

ド・カヅウル夫人は老友の方へ向いた。

『ダブルヴルさん、わたくしと一緒に行つて下さる？』

彼は過ぎ去つた昔の媚を以て、微笑しながら、頷いた。

『何處へでもあなたのいらつしやる所へ、まゐりますよ。』と彼は言つた。



『ぢやあ、行つて日射病にでも罹つて來るさ。』とカヅウル氏は言つた。そして彼は一二時間の間寢床で横になりに海水浴旅館の方へ歸つて行つた。

二人きりになるや否や、直ぐに老夫人と老友とは出掛けた。彼女は彼の手をぎゆッと握りながら、そつと低い聲で言つた。

『たうとう！　たうとう！』

彼も低い聲で言つた。『あなたは氣が違つてゐる。本當に氣が違つてゐる。考へて御覽なさい、あなたがどんな危險を冒さうとしてゐるか。もしあの男が……』

彼女はびくッとした。

『おゝ！　アンリ、「あの男」などと言つて下さるな、あれの事を話すのに。』

彼はぞんざいな調子で答へた。『よろしい！　が若しわたし達の息子が何か氣附かうものなら、もしわたし達を疑はうものなら、それこそあなたを放しませんよ、わたし達を放しませんよ。あなたはこの四十年の間、あれを見ないで濟んで來たではありませんか。それだのに今日は一體どうしたのです？』

二人は海から町の方へ通じてゐる長い通りを登つて行つた。二人は右へ曲つてエトルタの阪へかゝつた。白い道は雨のやうに降りそぐ日光の下に展がつてゐた。



二人は蒸すやうな熱の下を小刻みにのろのろと行つた。彼女は自分の腕を友達の腕の下に通して、そしてぢつとすわつた、物に憑かれたやうな目附でまともに前方を見てゐた！

彼女は言ひ出した。

『では、あなたはあれきりあれを見なかつたのですか？』

『えゝ、一度も！』

『まあ、どうしてです？』

『もう、そんな果てしのない議論を繰返すのは止さうではありませんか。わたしには妻と子供がある！、あなたには夫があります。ですからお互ひに世間をかねなければならんではありませんか。』

彼女は答へなかつた。彼女は遠く過ぎ去つた青春の頃を、過ぎ去つた悲しい色々な事を想つてゐた。

彼女もまた、若い娘達が結婚させられるやうに結婚させられた。彼女は自分のいひなづけであつた外交官を殆ど知つてゐなかつた。そして彼女は彼と一緒に、その後は、世間のすべての女と同じやうな生活を送つてゐた。

所が彼女と同じやうな結婚をしたダブルヴル氏といふ若い男が、深い熱情で彼女を愛した。そしてド・カヅウル氏が政治上の任務を帶びてインドへ出掛けて行つた長い留守の間に、彼女は靡いた。

彼女は抵抗することが出來たであらうか？　拒絶することが？



自分もまた彼を愛してゐながら、身を任せまいとする勇氣が、力が持てたであらうか？　否、斷じて、否！　それはどんなにかむづかしいことだつたらう！　彼女はどんなにか苦しんだことだつたらう！　どんなにか人生は邪な陰險なものである！　人は宿命の確かな襲來を避けることが出來るか、必然の運命を逃れることが出來るか？　それが女で、孤獨で、放任されて、愛されもしなければ、子供もなしでゐる時に、其の身の上にかけられてゐる熱情をいつでも避けることが出來るか、それは丁度、人が死ぬまで暗闇の中で生きようとして、太陽の光を避けんとするやうなものではないか？

どんなにかよく彼女はあらゆる巨細のことを今しも思ひ浮べた、

彼の接吻や、彼の微笑や、彼が門口に立止つて内へはひる彼女をぢつと見守つてゐる様や。何といふ幸福な日だつたらう、あのたつた一度の樂しい日は、あんなにも早く過ぎ去つてしまつた日は！

やがて彼女は姙娠したことに氣が附いた！　何といふ苦み！

あゝ！　あの南國への旅、あの長い旅、あの苦痛、あの絶え間のない恐ろしさ、あの地中海の海岸の、一歩も其處から外へ出ようともしなかつた庭園の底の、小さな淋しい別莊の中に人目を忍んだあの生活！

どんなにかよく彼女はそれらの日を、オレンヂの木の下で、目をみどり葉の中のまんまるな赤い果實の方へ擧げながら、横になつて



暮らしてゐたそれらの長い日を想ひ浮べた！　どんなにか彼女は外へ出て、海まで行つて見たいと思つたことだつたらう。其處からは爽かな風が塀を越して彼女の所まで吹いて來た。其の濱邊に寄せる短い浪の音を彼女は聞きもした。其の青い、日に輝いてゐる廣々とした海原に、白い帆船や、水平線のかなたの山の浮んでゐる樣を胸に描いても見た。けれども彼女は門から外へ一歩も出ようとはしなかつた。もし誰かに見附かつたなら、いかにも不恰好な其の姿が、彼女の重たい腹の中の恥を曝らしたらう！

そして待つてゐたあの幾日、苦しみ悶えてゐた終りの幾日！　あの警戒！　あのおびやかされる苦み！　そしてあの恐ろしい夜！

何といふ責苦を彼女は堪へ忍んだことか！

何といふ夜だつたらう！　どんなに彼女は呻つたり、泣き叫んだりしたことか！　でもなほ彼女は絶えず彼女の手に接吻してゐた戀人の青ざめた顔を、醫者の髯のない顔を、看護婦の白い帽子を見た。

そして何といふ感動を、彼女は、彼女が赤兒の力のない泣き聲を、おぎやあといふ聲を、人間の聲の最初の努力を聞いた時に胸に覺えたことだつたらう！

そして其の翌日！　其の翌日！　彼女の生涯のうちで、彼女が自分の息子を見て接吻したのはただ其の一日だけだつた！　彼女は其の時から、決して一と目も彼を見なかつた！



そして、其の時から、何といふ長い空虛な生涯を、常に、常に、其の子のことを考へ浮べながら送つて來たことぞ！　彼女は彼を、彼女の小さな分身を、彼女の息子を、たゞの一度も、それきり見なかつた！　誰かが彼を取つて、連れて行つて、隱してしまつた。彼女が知つてゐたのは、ただ、彼がノルマンディの百姓に育てられてゐたことと、自分も百姓になつたことと、名さへも知らない父親から澤山の金を貰つて、立派な結婚をしたことだけだつた。

この四十年間、彼女はどんなにか度々彼を見に、彼を抱きに行きたいと思つてゐた。彼女は彼が大きくなつたことを想像することが出來なかつた。彼女はいつでも、あの一日、腕に抱へて、痛めた腹

に押しつけてゐた人間の幼蟲を思ひ浮べてゐた。

どんなにか度々彼女は戀人に言つた。『もう迚も辛抱が出來ませんん。わたくしはあれを見たいのです。わたくしは出掛けます。』

いつでも彼は彼女を止めて、行かせなかつた。彼女は自分に克つことが、自分を支配することが出來ないだらう。すれば息子が氣附いて文句を附けるだらう。彼女は破滅するだらう。

『あれはどんなになつて居りますの？』と彼女はよく言つた。

『知りませんよ。わたしはあれきり一度も見ませんから。』

『まあ、どうしてです！　息子を持つてゐながら其の子を知らないなんて。其の子を恐れて、恥でゞもあるやうに棄てるなんて。――



恐ろしいことだ。』

二人は太陽の焔に押しつぶされてゐる長い道に沿つて、果てしのない阪をいつまでも登つて行つた。

彼女はまた言ひ出した。『人は罰だといはないでせうか？　わたくしにはあれの外に子供はないのですよ。いゝえ、わたくしはもうあれを見たいと思ふ心を抑へることが出來ません、四十年間もわたくしに附き纏つてゐるのですもの。あなたにはお解りになりません、あなた方、男の方には。考へて下さい、わたくしはもう長く生きては居りません。そしてわたくしがあれに逢はないとしたら……逢は

ないと、そんなことが出來ますか？　どうしてわたくしにそんなに長く待てませう？　わたくしは一生あれのことを考へてゐました。何といふ恐らしい生涯をわたくしは送つて來たでせう。わたくしは一度たつて、ただの一度だつて、解りますかあなたに、あれのことを、わたくしの子供のことを、最初に考へないで起きたことはありませんよ。あれはどうしてゐるか？　おゝ！　どんなにあれに對して罪を感じたことでせう！　こんな場合にも、人はやつぱり世間を恐れなければならぬのか知ら？　いつそ何もかも棄てゝしまつて、あれに附いて行つて、あれを育てて、あれを愛さなければならなかつたのだ。さうすれば屹度、もつと幸福だつたに違ひない。けれど



もわたくしは思ひ切つてさうすることが出來ませんでした。わたくしは卑怯だつたのです。どんなにわたくしは苦しんだでせう！　おお！　あゝいふ哀れた棄てられた子供達は、どんなに其の母親を憎んでゐることでせう！』

彼女はすゝり泣きに咽喉をふさがれて、不意に立止つた。一帶の谷は太陽の押しつぶすやうな光の下にさびれ果てて押し默つてゐた。ただ蟋蟀だけが、道の兩側の疎らな黃色い草の中で、乾いた絶え間のない啼き聲を擧げてゐた。

『少しお坐りなさい。』と彼は言つた。

彼女は素直に溝の緣まで連れられて行つて、そして顏を兩手の中

に埋めて坐つた。彼女の白い髪の毛は、顔の兩側に渦巻き纏れて、垂れさがつてゐた。そして彼女は深い惱みに心を痛めながら泣いてゐた。

彼は心配さうに、何と言つてよいかも知らずに、彼女の前に立つてゐた。彼は低い聲で言つた。

『さあ……しつかりなさいよ。』

彼女は立ちあがつた。

『さうしませう。』

かう言つて、目を拭くと、彼女はまた年寄の急いだ歩調で歩き初めた。



暫く行くと、道は二三の家を隱してゐる林の下へはひつた。二人は其の時、鐵碪を打つ鍛冶屋の槌の鳴り響く規則的な音を聞いた。

と直ぐに二人は、右の方に、小屋の前に引き捨ててある一輛の二輪車と、納屋の下で、更に蹄鐵を打つてゐる二人の男とを見た。

ダブルヴル氏は近づいて行つた。

『ピエル・ベネヂクトの家は？』と彼は訊いた。

男の一人が答へた。『小さなカフエに附いて左へお曲りなせえ、そしたらまつすぐにお出でなせえ、ボレのとこから三軒目でさあ。柵の傍に樅の木があるで、間ちげえつこはありません。』

二人は左へ曲つた。彼女は今は非常にゆつくりと歩いた。脚は弱

り、動悸は彼女が窒息するほどなひどい烈しさで打つた。

一と足毎に、彼女は祈りでもするやうに呟いた。『神様！　おゝ！神様！』

と恐ろしい氣持が胸一ぱいになつて、まるで腦を切り取られてもしたやうに、足もとがぐらぐらした。

ダブルヴル氏もまた興奮して、いくらか青くなつてゐたが、ぞんざいな調子で彼女に言つた。

『もしあなたが、もう少し氣を落ち附けることが出來なければ、直きに身の破滅になりますよ。さあ、しつかりと氣を鎮めて下さい。』

彼女は吃つて言つた。『わたくしにそれが出來ますか？　わたくしの子供！　わたくしの子供を見に行くのだと思つてゐる時に！』



二人は溝の上に二列に並んだ楡の木の下に埋まつてゐる、農場の庭の間の狹い嶮しい田舍道の一つを進んで行つた。

と、不意に、二人は樅の若木で蔽はれた木の柵の前に出た。

『これです。』と彼は言つた。

彼女はひたと立ちどまつて、見まはした。

林檎の木を植ゑた庭は、藁葺の小さな住家の方まで大きく廣がつてゐた。前には、厩、納屋、牛小屋、鳥小屋。石盤屋根の下には、車、二輪車、箱車、一頭馬車。四頭の仔牛は木立の蔭で青々とした草を食べてゐた。黑い鷄の群は圍ひの隅々をうろついてゐた。

あたりはひつそりとしてゐた。家の戸口は明いてゐたけれども誰も見えなかつた。

二人ははひつて行つた。と直ぐに黒い犬が梨の木の根もとに轉がつてゐた小桶の中から出て來て烈しく吠え出した。

家の壁に向つて、直き傍に、板の上に置かれた四つの蜜蜂が其の藁の屋根をならべてゐた。

ダブルヴル氏は、母屋の前で、呼んだ。

『どなたかゐませんか？』

と一人の女の子が出て來た。――年は十歳位で、シャツと毛織の裾衣とを着た、むき出しで汚れた脚をした、臆病でこすさうな樣子



をした女の子が。彼女は人を入れまいとてもするやうに戸の框の中に立つてゐた。

『何の用です？』と彼女は言つた。

『おとうさんはゐるの？』

『いゝえ。』

『何處にゐるの？』

『知らない。』

『ぢやおかあさんは？』

『乳を搾りに行つた。』

『直きに歸つて來るの？』

『知らない。』

と、不意に、老夫人は、無理に歸らされはしまいかと恐れでもしたやうに、早口に言つた。

『わたくし、あれを見ないうちは歸りませんよ。』

『わたし達はあれを待つてゐませう、ねえ。』

二人は向き返つた時に、一人の百姓女が、重たさうに見える二つのブリキ桶を持つて、家の方へ來るのを見た。桶には太陽が、きらきらと白く輝く焔を絶えず浴せてゐた。

彼女の右の脚は跛を引いてゐた。そして、胸は、雨に洗はれ、日に晒されて色の褪せた青いメリヤスの中に膨らんで、彼女は貧しい、



哀れな、汚い下女のやうな樣子をしてゐた。

『おつかあが來た。』と女の子が言つた。

彼女は家の傍へ來た時に、不快な怪訝さうな樣子をして見知らぬ人を見た。そして彼等に氣がつかないやうな風して家へはひつた。

彼女は田舍者によく見る木で作つた顏のやうな、間の抜けた、黃色い、硬い顏をしてゐて、ふけて見えた。

ダブルヴル氏は彼女を呼び止めた。

『もし、お上さん、わたし達は牛乳を二杯賣つて頂きたいと思つて來たのですが。』

彼女は桶を置いた後で、また戸口へ出て來ながら、ぶつぶつ言つ

てゐた。

『わしらぢやァ牛乳は賣りましねえ。』

『わたし達は大變咽喉が渴いてゐるのですよ。それに奥さんはお年寄で大變疲れてもいらつしやる。何か飲むものを頂くことは出來ますまいか？』

百姓女は落ち付きのない、こすさうな風で二人を見てゐた。

やつと彼女は心を決めた。

『あんたらが彼處に居るで仕方がねえ、上げますべえ。』と彼女は言つた。

そして彼女は内へはひつた。



と直ぐに子供が、二脚の椅子を持つて出て來て、それを林檎の木の下に置いた。と今度は母親が二杯の泡立つた牛乳を持つて來て、それを客の手に渡した。

そして彼女は彼等の樣子を窺つて、其の目的を看破らうとでもするやうに、二人の前に立つてゐた。

『あんたらはフェカムから來ただね？』と彼女は言つた。

ダブルワル氏は答へた。

『さうですよ、わたし達は夏ぢゆうフェカムにゐるんでね。』

そして、ちよつと默つた後で、彼は續けた。

『あなたは毎週わたし達に鷄を賣つて呉れませんか？』

百姓女はちよつと躊躇してから、答へた。
『どつちでもえゝだ。わけえのがあんたは欲しいだけ？』
『あゝ、若いのを。』
『市場ぢやあ、どのくれえでお買ひなさるね？』
ダブルヴル氏は、それを知らなかつたので、友達の方へ向いた。
『いくら位で買へましたねえ鶏は、ねえ、若い鶏は？』
彼女は、涙の一ぱいに溜つた目をして、吃つて言つた。
『四フランから四フラン半。』
百姓女は横目で彼女を見てゐたが、びつくりして、そして訊いた。
『あんべえがわりいのかね、奥さあは、泣いて見えるだが？』



彼は何と答へていゝか知らなかつた。で吃つた。
『いや……いや　ただね……今途中で時計を失くしたのですよ、いゝ時計をね、でそれを氣にしてゐるのですよ。もし誰か見付けた人があつたら、知らして下さいよ。』
ベネヂクトの上さんは、其の曖昧なのを知つて、何とも答へなかつた。
と不意に、彼女は叫んだ。
『あ、とつさんが！』
彼女だけが柵の方へ向いてゐたので、彼のはひつて來るのを見たのだつた。

ダブルヴル氏はびくつとした。ド・カヅウル夫人はあわてて椅子の上で振り向いたので、危く落ちさうだつた。

一人の男が其處へ、十歩ばかりの所へ、身體を二重に曲げて、喘ぎながら、綱の先きで牝牛を曳いてやつて來た。

彼は客には氣が附かずに、言つた。

『ほらよ！　何ちふ愚圖だ！』

そして彼は通り過ぎて、牛小屋の方へ行つて、其の中へ消えた。

老夫人の涙は不意に乾いてゐた。そして彼女は、『息子だ、これが自分の息子だ！』と考へもせず、口も利かずに、呆れてゐた。



ダブルヴル氏もまた同じ考で不快を感じながら、戸惑ひしたやうな聲で言つた。

『あれがベネヂクトさんですね？』

百姓女は、胡散らしく、訊いた。

『誰があんたに名を話しただね？』

彼は答へた。

『大通りの角の鍛冶屋ですよ。』

そしてみんなは目をぢつと牛小屋の戸口へ向けて、默つてゐた。

小屋は建物の壁の中に黑い穴のやうになつてゐて、中には何にも見えなかつたが、漠然とした物音や、動作や、地上に撒き散らした藁

の爲めに緩くされた足音などが聞えてゐた。
彼は額を拭きながら、閾の上へ出て來た。そして一歩毎に身體を揚げるやうな大股で、のそり〳〵と家の方へ行つた。
やはり彼は客には氣を附けようともしないで、彼等の前を通つた。
そして女房に言つた。
『おいサイダアを一本拔いて來て呉れう。おらあ咽喉が乾つきさうだ。』
そして彼は家の中へはひつた。百姓女は穴藏の方へ行つて、後に二人のバリ人だけを殘した。
と、ド・カヅウル夫人は、あわてて、吃つて言つた。



『行きませう、アンリ、行きませう。』
ダブルヴル氏は彼女の腕を取つて、起さうとした。と彼女が倒れさうになつたのに氣が付いて、全力を出して支へながら、一方の椅子の上に五フラン投げ出してから、彼女を引つぱつた。
二人が柵の外へ出るや否や、彼女は苦痛に身を震はせながら、すすり泣き出した。——そして吃りながら言つた。
『おゝ！　おゝ！　あれがあなたがあれにしてやつたことですね？……』
彼は全く青ざめてゐた。彼は乾いた調子で答へた。
『わたしはわたしに出來るだけのことをしました。あれの畑は八萬

フランの價があります。そんな財産は、中流社會の子供は一人だつて持つて居りません。』

そして二人はそれきり一語も交さずに、のろ〳〵と歸つて行つた。彼女はいつまでも泣いてゐた。涙は目から流れて、絶えず、頰の上を落ちてゐた。

それも終には止んだ。そして二人はフエカムに歸つて來た。

ド・カヅウル氏は夕飯に二人を待つてゐた。彼は二人を見るや否や、笑ひ出してそして叫んだ。

『そら、細君が日射病に罹つたね、いや愉快々々。本當にこの間から、まるで正氣ぢやないんだからね？』



二人はどちらも答へなかつた。で夫は手をこすりながら訊いた。

『でも愉快な散歩だつたらうね？』

ダブルヴル氏は答へた。

『愉快だつたよ、それやア、全く愉快だつたよ。』

# 其餘

# 墓

千八百八十三年七月十七日の朝の二時半に、ベジエ墓地の端にある小さな小屋に住んでゐた墓地の番人は、臺所に締め込んでおいた犬の吠える聲で目を覺まされた。

彼は急いで下りて行つた。そして犬が、まるで曲者でも家のまはりをうろついてゐでもしたやうに、烈しく吠えながら戸の下を嗅いでゐるのを見た。番人のヴンサンは銃を取つて、用心しながら、家

の外へ出た。

大は一散に馳け出して、ボンネ將軍道の方へ走つた。そしてタモアゾウ夫人の墓の直き傍で止つた。

番人は、十分に氣を附けながら近づいて行くと、直ぐにマランヱ道の脇に小さな光りを認めた。彼は墓の間をこつそりと進んだ。と其の時神聖汚瀆の驚くべき行爲を見つけた。

一人の男が、前の日に葬つた若い女の死體を發掘して、それを墓から引き出してゐた。

小さな龕燈が、堆い土の上に置かれて、この恐ろしい光景を照らしてゐた。



番人のワンサンは、其の男に飛びかゝつて彼を地上に投げ付けると、其の手を縛り上げて警察署へ引き渡した。

彼は其の町の有名な、評判のいゝ富裕な若い辯護士で、クウルバタイユといふ男であつた。

彼は審問された。檢事は軍曹ベルトランの恐ろしい行爲を引例して、聽衆を激させた。

群集は憤怒の戰慄を覺えた。檢事が腰を下すと、『死刑！　死刑！』といふ叫びがどつと起つた。裁判長は秩序を恢復するに非常な困難を極めた。

やがて、莊重な聲で、彼は言つた。

『被告、其の方は何か言ひ開きをしようとすることがあるか？』

辯護士を立てることを斷つたクウルバタイユは、立ちあがつた。

彼は背の高い、色の淺黑い、中々の美男子で、隱し立てをしない顏と、力の籠つた容貌と、ひたと物を見る强い目付とを持つてゐた。

叱といふ聲が公衆から起つた。

彼はぢつと動かずにゐた。そして始めは低い、含み聲で、口を利き始めたが、それが、だんだんと强くなつて行つた。彼は言つた。

『裁判長閣下、

『陪審官各位、

『わたくしは聊かばかり申上げなければなりません。あの女は、其



の墓をわたくしが發きましたあの女は、わたくしの情婦だつたのでございます。わたくしはあの女を愛しました。

『わたくしはあの女を愛しました、肉感的の愛でではございません、また全く魂や心の單純な情愛でではございません、心の亂れ狂ふ熱情の絕對な完全な愛ででございます。

『お聽き下さい。

『わたくしは始めてあの女に逢ひました時に、不思議な感覺を覺えました。それは驚いたのでもなければ感心したのでもございません、また「一」と目で惚れる」といはれてゐるものでもございません、丁度微溫湯へでも投げ込まれたやうな樂しい愉快な感じでございまし

た。あの女の樣子がわたくしを迷はしました、あの女の聲がわたくしをうっとりさせました。あの女の身體全體がわたくしに、見ると無限な快樂を與へました。また、わたくしが長い以前からあの女を知つてゐたやうに、わたくしが既にあの女を見たことがあるやうに見えました。あの女はわたくし自身の靈魂のある物を其の身體のうちに持つて居りました。

『あの女はわたくしの魂の訴へに、人が一生の間希望の方へ送る漠然とした連續した訴へに對する答としてわたくしに現れました。

『わたくしがもう少しよくあの女を知りました時は、またあの女に逢ふといふだけの考が、微妙な深い感情でわたくしを落ちつかせま



せんでした。あの女の手をわたくしの手に觸れるといふことが、これまで決して、得られようとも想像しなかつたやうな喜びをわたくしに起させました。そしてあの女の微笑はわたくしの目に非常な歡樂を注ぎ込んで、わたくしをして走りたいやうな、踊りたいやうな、地上でぐるぐると廻りたいやうな氣をさせました。

『あの女はわたくしの情婦になりました。

『いやそれ以上のものでありました。あの女はわたくしの眞の生命でありました。わたくしはもはや此の地上で何物をも待ち設けませんでした。わたくしはもはや何物をも、何物をも望みませんでした。わたくしはもはや何物をも羨みませんでした。

『そのうちに、ある晩、わたくし達が河に沿つて少しばかりの散歩をしました時に、わたくし達は雨に逢ひました。あの女は風を引きました。

『其の次ぎの日、肺炎が起りました。八日目に、あの女は死にました。

『あの女が苦しんでゐる間、わたくしは驚きと懊悩とで理解することも、よく考へて見ることも出來ませんでした。

『あの女が死んだ時は、獰猛な絶望がわたくしの氣を遠くさせまして、わたくしはもう何も考へませんでした。わたくしは泣きました。

『弔衣に包まれて恐ろしい姿をしてゐる間、わたくしの鋭い、烈し



い悲みは、依然として狂氣の悲みでした、一種の肉感的な、肉體的な悲みでした。

『やがてあの女が運んで行かれました時に、あの女が墓の中に安らかに置かれました時に、わたくしの心は、不意に、また明らかになりました。そしてわたくしは、あの女がわたくしに與へた愛が其の値打の高かつただけに、心も亂れんばかりな、無數の道德的苦痛を覺えました。

『其の時、「もう二度とあの女には逢へないのだ！」といふ確かな、はつきりとした考がわたくしの心にはひつて來ました。

「その事ばかりまる一日の間考へて居りますと、人は氣が違ひます。

考へて御覽なさい！　其處にあなたの心から愛する人がゐます、掛替のない人が、といふのは、この地球全體の上にその女に似てゐる第二の人がないからでございます。この人があなたに身を委せたのです、其の女があなたと一緒に我々が愛と呼んでゐる神秘的結合を作るのです。其の女の目は空間よりも廣く、世界よりも美しく、其の澄んだ目の中にはやさしさが微笑してゐるのです。この人があなたを愛するのです。其の女があなたに話す時に、其の聲はあなたの上に溢れるやうな幸福を擴げるのです。

『そして不意に其の女が消えて失くなるのです！　考へて御覽なさい！　其の女はあなたに對してだけではありません、永久に、あら



ゆるものに對して消えて失くなるのです。其の女は死ぬのです。この言葉がお分りになりますか？　もう決して、決して、決して、何處にも其の人は二度と存在しないのです。もう決して其の目は何物をも見ないのです。もう決して其の聲は、もう決してあらゆる人間の聲の中の聲のやうに、その女が發音した言葉の一つをも同じ樣には發音しないのです。

『もう決してどんな顏もその女の顏には似てはゐないのです。決して、決して！　影像の型は保存されます、印象は、感銘は保存されます。そしてそれから、同じ線を、同じ形を、同じ色を示す所の物體は作られます。けれども其の身體は、其の顏は、決してもう二度

と再びこの地上には現はれません。そしてたとへ、幾千の人が、幾百萬の人が、幾十億の人が、いやもつと遙かに澤山の人が、生れては來ませうとも、而かもそれらのあらゆる女の中で、決して二度と再び其の一人を見ることは出來ないのでございます。そんな譯がありますか？　その事を考へると人は氣違ひになります！

『あの女は二十年生きて居りました、それきりです、そして永久に、永久に、永久に消えて失くなつたのです！

『あの女は考へました、あの女の笑ひました、あの女はわたくしを愛しました！　かういふすべてのものが一つとして殘つては居りません。秋死ぬ蠅は創造界に於ける我々と同じことです。何物も殘り



ません。そしてわたくしは、あの女の身體が、あの暖かな、あの柔らかな、あの白い、あの美しい、あの女の鮮かな身體が墓の底の箱の中で腐れて行くのだと考へました。そしてあの女の魂は、あの女の思想は、何處へ行きます？

『もう決して二度とあの女を見ることはないのです！　もう決して二度とあの女を見ることはないのです！

『わたくしにはなほありゝと認められるこの腐れかけてゐる死體の觀念が、わたくしに附き纏ひました。そしてわたくしはもう一度、もう一度あの女を見たいと思ひました！

『わたくしは鋤と槌とを持つて出掛けました。わたくしは墓地の塀

を乘り越えました。わたくしはあの女の墓を見付けました――それはまだ本當に閉ぢられてはゐませんでした。

『わたくしは柩を發掘いたしました。そして其の蓋を明けました。いやな臭ひが、醜穢な腐敗の呼吸が、わたくしの顔を打ちました。おゝ！　あの女の寢床は菖蒲であんなに香つてゐましたのに！

『けれども、わたくしは棺臺を明けて、龕燈の光りで照らしました……そしてわたくしはあの女を見ました。あの女の顔は青く、ぶくぶくと膨れて、恐ろしくなつてゐました！　黑い汁が其の口から流れてゐました。

『あの女！　それがあの女でした！　わたくしはぞつと恐ろしくな



りました。併しわたくしは腕を伸ばして、あの女の髪の毛を手で握つて、その奇怪な顔をわたくしの方へ引き上げました！

『その時です、わたくしが捕つたのは。

『其の夜中わたくしは――丁度人が愛の抱擁の後に女の匂を保つてゐるやうに――其の腐爛の紛々たる匂を、わたくしの戀人の匂を保つてゐました！

『どうぞよろしいやうに處分なすつて下さい！』

不思議な沈默が聽衆を壓へつけるやうに見えた。人々はもつと何事かを待つてゐるやうに見える。陪審官は評議する爲めに引つ込んだ。

數分間の後、陪審官の歸つて來た時に、罪人は何の恐れもないやうに、いや何の考もないやうにさへ見えた。

裁判長は、普通の前置を述べた後で、陪審官が彼を『無罪』としたことを宣告した。

彼は身動きもしなかつたが、公衆は喝采した。



# 聾爺さん

# 聾爺さん

## 一

濕氣を含んだ灰色の空が、鳶色をした廣い平野の上に低く垂れさがつてゐた。秋の香が、素裸な、じめ〳〵した土や、落葉や、枯草やの物悲しい香が、澱んでゐる夕方の空氣を一層濃く重くるしくしてゐた。百姓達は野ら一面に散らばつて、御告の鐘の音が自分達の家の方へ、――其の藁葺の屋根が、林檎畑の風を除ける、今は葉の

ない木々の枝の間からあちらこちらに見えてゐる家の方へ、呼び返して呉れるのを待ちながらまだ働いてゐた。

道端には、脱ぎ捨てた着物の上に、ごく幼い男の兒が脚を擴げて坐らせられて、一つのじゃが薯をおもちやにしながら、時々それを着物の上に落したりしてゐた。其の直き傍の畑には五人の女が身を屈めて、菜種の苗を植ゑてゐた。のろ〳〵した、絶え間のない身動きで、今しも鋤き返されたばかりな大きな土の床に、尖つた木の杙を突き込んで、そして出來た穴に、もう幾らか萎れて、だらつと倒れるやうな苗をいきなり挿し込んだ。そして根をかぶせては、その働きを續けて行つた。



手に鞭を持つて通りかかつた木靴を穿いてゐる一人の男が、子供の傍に立ち止つて、抱き上げて、接吻した。と一人の女が身を起して彼の方へやつて來た。女は臀も、腰も、肩も大きな、大柄な赤毛の娘で、其の毛の中には血のやうに赤い色の毛も混つてゐる背の高いノルマン女であつた。

女はきつぱりした聲で言つた。

『行つて來た、セセエルさん——旨く行つたの？』

男は、沈んだ樣子をした痩せこけた若者であつたが、呟くやうに言つた。

『ううむ、ちつとも——相變らずだ。』

『承知しないつて？』
『承知しないつて。』
『それでお前さんはどうするつもり？』
『お前はどうしろと言ふんだい？』
『司教さん所へ行つて御覽よ。』
『うむ。』
『直ぐにお出でよ！』
『うむ。』
そして二人はぢつと顔を見合せた。男は其の間ずつと子供を抱いてゐた。彼はも一度それに接吻してから、それをまた女の着物の上



におろした。
向うの方に、二軒の百姓家の間に、一頭の馬に引かれ、一人の男に推されてゐる犁が見えてゐた　彼等は、馬も、犁も、百姓も、ほのぐらい夕暮の空の下に、ごくゆつたりと動いてゐた。
女は言葉を續けた。
『それで、とつさんは何と言ひなすつたの？』
『承知しないつて言つたのさ。』
『なぜ承知しないつて？』
若者は自分が今しも下へおろしたばかりの子供の方を指さして、それから目付で、向うで犁を推してゐる男の方へ女の注意を向けさ

せた。

そして彼は力を籠めて言つた。

『なぜつてあれのだからさ――このお前の子供が。』

娘はちよつと肩を聳かして、怒つた調子で言つた。

『へえ、誰だつて知つてるぢやアないか――井クトルのだつてことは。今更、それがどうしたのさ？　なるほど、おらは間違ひをしたさ。だつておらばかりがしたのかい？　おらのおつかあだつておらの前にいたづらをしたし、お前さんのおつかあだつてお前さんのとつさんと一緒になる前に同じことをやつたぢやアないか！　この田舎で間違ひをしなかつたものが誰がある？　おらが井クトルと間違



ひをしたのだつて、おらが納屋で眠つてゐる所へあいつが附込んだんぢやアないか、本當だよ、それやア後ぢやア、おらの眠つてゐない時にもある事はあつたんだけれど。おらはあの人が奉公人でさへなければ屹度一緒になつたんだよ。それだとおらはなほ惡い女なのかい？』

男は單純に言つた。

『おれは何も、お前に子供があらうがなからうが、今のままのお前が好きなんだ。ぐづぐづ言ふのは親父だけなんだよ。でもまあ、何とかおれが片をつけらあ。』

女は答へた。

『直きに司教さんの所へお出でよ。』

『うむ、行くよ。』

そして男は百姓らしい重い足取で出かけた。と娘は、兩手を臀に當てて、菜種を植ゑにと向きなほつた。

實際、かうして出かけて行つた、アマブル・ウルブレエクといふ聾爺さんの息子のセセエル・ウルブレエクは、父親が反對なのに、ただの日傭取の非クトル・ルコといふ、この事の爲めに暇を出された男の子供を生んだセルスト・レヴスクと結婚したいのであつた。

のみならず、階級制度は野らには存在しない。日傭取でもつましくしてゐれば、畑を手に入れる番が來て、前の主人と同等になる事



もある。

そこでセセエル・ウルブレエクは、脇の下に鞭を抱へたまま、深く思案に沈んで、泥だらけな重たい木靴をかたみがはりに持ち上げながら歩いて行つた。確に彼はセルスト・レヴスクと結婚したいのであつた。彼が子供のある彼女を欲しがつたのは、それが彼の求めてゐた女であつたからだ。彼は其の譯を言ふことは出來なかつた。が自分では知つてゐた、よく解つてゐた。彼はそれを確かめる爲めに、自分を全く樂しく、全くはしやいで、まるで、滿足しきつて純粹の動物になりでもしたやうに思ふ爲めに、たゞ彼女を見てさへゐればよかつた。彼はまたあの小さな子供にも、非クトルの小さな子供に

も、それが彼女から生れたのだと思へば、接吻するさへ嬉しく思つた。

そして彼は、地平線の果てに犁を推してゐる男の微かな横顔をも、憎まずに、ぢつと見詰めた。

所がアマブル爺さんはこの結婚を望まなかつた。彼は聾の人に有り勝ちな片意地で、ひどい片意地で反對した。

セセエルは彼の耳の端で、まだ幾らかは聞き分けられる其の耳の端でかう呶鳴つたが無駄だつた。

『とつさん、おめえの世話はおれがよくしてやらあ。あの女はなあ、いゝ娘だぜ、それに身體も丈夫だし、その上しまつやだよ。』



爺さんは繰り返した。

『おれが生きてるうちやア、お前の女房にやアさせねえだ。』

それきりもう何としても彼に勝つことは出來なかつた、何としても其の頑なを曲げさせることは出來なかつた。がただ一つの望みだけがセセエルに殘されてゐた。アマブル爺さんは死の近づいてゐるのを感じて其の恐ろしさに司教を恐れてゐた。彼は善良な神樣とか惡魔とか地獄とか煉獄とか、いふものについては何も知らなかつたので、さう恐れてはゐなかつたが、丁度人が病苦の恐ろしさに醫師を恐れるやうに、自分を葬る者として坊さんを恐れてゐた。でこの一週間の間、爺さんのこの弱點を知つてゐるセルストは、セセエル

に司教の所へ會ひに行けと頻りにすすめてゐた。けれどもセセエルはいつも躊躇してゐた。彼は、いつも手を伸ばして祝福されたパンの爲めに金を集めようとしてゐるとしか思はれないあの黒い僧服をさう好まなかつたのだ。

所が、今こそ彼も心を決めた。そしてどういふ風にこの事を話し出さうかと考へ乍ら、司教の家の方へと足を向けた。

ラファン師は痩せぎすな、髯を剃つたことのない、元氣のいゝ小柄な坊さんで、食事の時間を待ちながら臺所の火で足をあたためてゐた。

彼は百姓のはひつて來るのを見るや否や、ちよつと頭を振り向け



ながら、訊いた。

『おお、セセエルさん、何か用事かい?』

『少しお話しが致したいのですが、司教さま。』

男は片手に帽子、片手に鞭を持つた儘で、おづ〳〵しながら、ぢつと立つてゐた。

『さうかい、話して御覽。』

セセエルは下婢の婆さんの方を見た。彼女は足を引きずりながら窓の前のテエブルの隅に用意してある主人の食事に覆ひをしてゐた。

彼は吃つて言つた。

『そ、それがお懺悔のやうなもので。』

と、ラファン師は始めて百姓をしげ〳〵と見まはした。彼は男の困つたやうな顔付を、突き詰めたやうな様子を、途方に暮れたやうな目付を見ると、下婢に吩咐けた。

『マリイ、五分間ほどお前の部屋に行つてゐて呉れ、わしがセセエルと話す間。』

下婢は怒つたやうな目付で男を見たが、ぶつ〳〵言ひながら出て行つた。

坊さんは言葉を續けた。

『さあ、話を話して御覽。』



若者は、でもまだもじ〳〵しながら、自分の木靴を見おろしたり、帽子をぐる〳〵まはしたりしてゐたが、やがて、不意に、思ひきつて言つた。

『それはなんです。……わしはセルスト・レヴスクと結婚したいのです。』

『ふむ、それで、何か邪魔でもあるのかい?』

『親父が承知しないんです。』

『お前の親父が?』

『えゝ、わしの親父が。』

『何と親父さんは言ひなさるのだい?』

『あの女には子供があると言ふのです。』
『そんな事は、イヴ様以來、何もあの女が初めてぢやアない。』
『ヂクトル・ルコの子なんです、アントアヌ・ロアゼルの雇人の。』
『は！　は！　それで承知しないのかい？』
『承知しないんです。』
『へえ！　どうしてもかい？』
『えゝ、もうお前様がお出で下さらなけれやア、一寸だつて動きさうもありやアしません。』
『一體お前は親父さんに何と言つて承知させようとしたのだい？』
『あの女はいい娘だ、それに身體も丈夫だし、その上しまつやだつ



て言ひました。』
『されても旨く行かない。それでわしに話せつて言ふのだね？』
『さうです。お話しなさるのです。』
『それで何と親父さんに話せばいゝんだね？』
『なあに、お前様がお說教でみんなにおあしを出させる時のやうな事でいゝんで。』
この百姓の考では、宗教のあらゆる務めは人々の財布をゆるめ、ポケットを空にして、天の金箱を充たすことであつた。それは丁度大きな商店のやうなもので、司教は其處の番頭で、ずるい、狡猾な、田舍者の費用で神さまの商賣をしてゐる拔け目のない番頭であつた。

彼はまた司教達が勤めを果たしてゐることは、貧しい者や、病める者や、死に行く者やを助けたり、慰めたり、相談にあづかつたり、支へたりして、大きな勤めを果たしてゐることはよく知つてゐた。がそれもみんな金の爲めで、聖禮や彌撒を、助言や保護を、罪の赦しを、煉獄や天國を願ふ爲めに、年々の收入に從ひ、罪人の殊勝な心掛で喜捨する白い錢や、美しく光つてゐる貨幣の代りであると思つてゐた。

ラファン師は、さういふ人達をよく知つてゐたので、少しも氣を惡くせずに、笑ひ出した。

『うむ、さうか、では一つわしの得意な話を親父さんに話してやら



う。だがお前もなんだぜ、お出よ——說教に。』

ウルブレエクは嚴かな誓ひを立てる爲めに手を擴げた。

『お前樣がそれをさへして下されば、わしは貧乏人の言葉にかけて、屹度參ります。』

『うむ、宜しい。では何時親父さんに會ひに行くことにしやうかな?』

『何時つて、早いほどいゝんで……出來ることなら、今晩。』

『ぢやア、夕飯が濟んで三十分經つたら。』

『三十分經つたら。』

『いゝかい。ぢやア左樣なら。』

『左様なら、またお目に懸ります、司教様。有り難うございます。』

『いや、なに。』

そしてセセエル・ウルブレエクは家に歸つた。彼は心から重荷が下りたやうであつた。

彼は、父親も自分も豊かでなかつたので、僅かな、全く小さな田地を借りて作つてゐた。十五になる小娘の、スウプも作れば、鷄の世話もすれば、牛乳も搾れば、バタも作る下女を一人使つてゐるばかりで、彼等はいかにも貧しく暮らしてゐたが、セセエルは百姓が上手であつた。けれども土地も家畜も是非なければならぬものを手に入れるだけしか持つてゐなかつた。



爺さんはもう働かなかつた。彼はすべての聾の人のやうに、陰氣臭い顏をして、痛みで蹇へた足を引きずりながら、二重に折れ曲つた腰付で、杖を力に野らぢゆうを歩きまはつて、動物や人間を頑固な、疑ひ深い目で眺めてゐた。時としてはまた溝端に坐つて、半時間もぢつと其處を動かずに、彼の生涯の大部分を占めてゐる事柄を、卵と穀物の値段とか、作物を惡くもすればよくもする雨や太陽とかの事をぼんやりと思ひ耽つてゐた。そして、リヨウマチで弱りきつた彼の老いた手足は、過ぎ去つた六十年の間、濕つた藁で蔽はれた低い藁葺家の壁の濕氣を吸ひ込んだ。

彼は日の暮れ方に歸つて來て、臺所のテエブルの端に坐つた。そしてスウプのはひつてゐる土燒の鉢が自分の前に置かれると、丁度まるい鉢の持てるやうに曲つてゐた指の間にそれを取つて、そして、冬も夏も、食べ始める前に手を暖めた。それはかうして火から——大した金のかゝつた火から——來た熱の一ほてりをも、脂や鹽のはひつてゐるスウプの一滴をも、小麥から作られるパンの一かけらをも無駄には失ふまいとしたのであつた。

やがて、彼は梯子をのぼつて屋根裏の藁床へと行つた。と息子は下の爐の傍の押入のやうな所で眠り、下女は以前じやが薯を貯へてゐた洞穴のやうな、闇い穴の中へはひつた。



セセエルと父親とは滅多に話をしなかつた。たゞ時々、穀物を賣るとか犢を買ふとかいふ問題の起つた時に、若者は父親に相談した。彼が兩手で喇叭を作つて、父親の耳に自分の意見を呶鳴り入れると、アマブル爺さんは腹の底から出て來るやうなのろい、空ろな聲でいゝとか惡いとか言つた。

そこで、ある晩、セセエルは、馬か犢かを買ふ相談でもするやうに傍へ寄つて、聲を張り上げてセルスト・レヴスクと結婚したいと思ふと言つた。

すると、父親はひどく腹を立てた。なぜであらうか？　道德上からであらうか？　否、さうではない。娘の操は田舍ではさほど大切

なものとはされてゐない。たゞ彼の貪慾が、儉約しやうといふ深い、烈しい天性が、自分の子供でもないものを育てようとする息子の考に反對したのであつた。彼はふと、瞬間に、その子が畑に出て役に立つまでに飲むスウプの事を考へた。彼はまたどれだけのパンを、どれだけの林檎酒を、その兒が十四になるまでに無駄に使ふかを數へて見た。と、そんな事は考へても見なかつたセセエルが無闇に腹立たしくなつて來た。

彼は常にない力のある聲で答へた。

『てめえは氣でも違つたのか？』

そこで、セセエルは自分の理由を並べ上げて、セルストのいゝ點



を話したり、子供にかゝる費用の千倍も彼女が値打ちしてゐることを呑み込ませようとしたりした。所が爺さんはさういふ利益のある事を疑つたが、子供のあることは少しも疑ふことが出來なかつたので、それ以上は説明も何にもせずに、強くから繰返して答へてゐた。

『おらあ不承知だ！　おらあ不承知だ！　おれが生きてるうちやアそんなことはさせねえだ！』

そしてこの點で二人はもう三ケ月の間、どちらも負けずに其の儘になつて來た。少くとも一週に一度、同じ議論と、同じ言葉と、同じ身振りと、同じ無効とで、同じ問題を繰返しながら。

セルストが司教の助けを賴みに行けとセセエルに勸めたのはその

時であつた。

家に歸つて見ると父親はもうテエブルに着いてゐた。司敎の家にまはつたので彼が遲くなつたのであつた。

二人は向ひ合つて默つて食事をした、スウプの後でバタのついたパンを少し食べて一ぱいの林檎酒を飲んだ。そして二人は其のまま椅子に凭つて、殆んど暗闇のやうな所に、ぢつと身動きもせずにゐた。蠟燭は小娘が匙を洗つたり、コップを拭いたり、あしたの朝のパンを切つておいたりする爲めに持つて行つたのであつた。

と、戸を敲く音が聞えて、直ぐにそれが開かれると、司敎が現はれた。爺さんはおど〳〵した胡散臭い目を彼の方へ上げた。そして、



こいつは危いと見て取つて、あわてて梯子をのぼらうとした時に、ラファン師は手を彼の肩にかけて、顳顬の傍で呶鳴つた。

『アマブル爺さん、わしはお前に話があるのだよ。』

セセエルは戸が開かれてゐたのを幸ひにして、姿を隱した。彼は聞いてゐたくなかつたほどに、ひどく恐れてゐた。そして自分の望みがあの親父のいつもの頑固な不承知で打ち碎かれるのを好まなかつた。彼は寧ろ、いゝにしろ惡いにしろ、後で、一度に眞實を知らうとした。そして夜の中へ出て行つた。それは月のない晩で、星のない晩で、空氣が濕氣で濃く見えるやうなあの霧の深い晩であつた。丁度百姓の言葉で「わせ」と呼ばれてゐる早熟の林檎が摘み採られる

時分だつたので、ほのかな林檎の香が畑の方から漂つて來た。セセエルが家畜小屋の傍を通つて行くと、肥料の上に眠つてゐる生きた動物の暖い臭ひが狹い窓から吐き出されてゐた。そしてまた廐の傍では、立つたままでゐる馬の踏みつける音や、飼草架の上の乾草をちぎつたり嚙んだりする顎の音が聞えてゐた。

彼はセルストの事を考へながら、まつすぐに歩いて行つた。その單純な心では、すべての觀念が物から直ぐに作られた姿に過ぎなかつたので、愛といふ考も、大きな、赤毛の娘が、窪い道に立つて、手を臀に當てて笑つてゐる繪を心の前に描いて見て始めて纏りがつくのであつた。



彼が始めて彼女を心に留めた時に、彼女はこの通りの姿をしてゐた。子供の時から知つてはゐたのだが、その朝ほどに氣を取られたことはなかつた。二人は立ち止つて暫くの間話してから別れた。そして彼は歩きながら心に繰返してゐた。

『ほんとに、いゝ娘だなあ、やつぱり。非クトルと間違ひのあつたのは殘念だが。』

夕方になつても、彼は女のことを考へつゞけてゐた。そして其の翌くる朝も。

二度目に彼女に逢つた時は、丁度鳥の羽を口から胸へ挿し込まれでもしたやうに、何かが咽喉の先きをこそぐるやうな感じがした。

そしてそれから以來、彼は女の傍へ行く度毎に、いつもこのこそぐるやうな感じが、きまつてまた始まつて來るのに驚かされた。

三月經つうち、彼は彼女と結婚しやうと心を決めたほどに、彼女が氣に入つて來た。彼は何處からこの力が自分に來たのか言ふことは出來なかつたが、かう言つて説明してゐた。

『おれはあの女に取りつかれてゐるのだ、』と。それはまるで自分の内にあるこの娘を欲しいと言ふ心持が、地獄の力かなぞのやうに強く自分を支配してゐると感じてゐたかのやうであつた。彼は女の犯した罪などは殆んど氣にもかけてゐなかつた。洗つて見れば、惡いには違ひない、けれども女を傷けはしなかつた。彼はまたギクトル・



ルコに對しても何の怨みも持つてゐなかつた。

けれども若し司教が成功しなかつたら、何とすべきであらう？彼はその事は考へようともしなかつたほど、この心配な問題に苦しめられてゐた。

彼は司教の家まで來ると小さな門口の傍に腰をおろして其の歸りを待つてゐた。

彼が其處に凡そ三十分もゐた頃に道に足音が聞えた。と彼は直ぐに、夜は隨分暗かつたが、なほ一層黑い法衣の影を見分けた。

彼は立ちあがつた、が脚がぶる〳〵と慄へてゐて、話さうとすることも訊かうとすることも出來なかつた。

司教は彼を見付けると、愉快さうに言つた。

『おい、おい、うまく行つたよ。』

セセエルは吃つた。

『うまく、そんな筈はない。』

『いや、行きは行つたが、中々樂ぢやアなかつた。本當にお前の親父さんは分らずやだなあ！』

百姓は繰返した。

『そんな筈はない！』

『でも、さうなんだ。ぢやア明日の晝間お出で、結婚披露の相談をしよう。』



若者は司教の手を握つた。ぐつと固く、ひしげる程に握り締めながら、吃り〳〵言つた。

『ほ、ほ、本當に、司教樣、正直者の言葉にかけて、明日まゐります……お前樣のお説教に。』

## 二

結婚式は十二月の半ばに擧げられた。新郎新婦が豐かでなかつたので、式は簡單であつた。セセエルは花嫁を迎へに行つて役場へ連れて行く爲めに、朝の八時には新らしい着物に着替へて、用意が出來てゐた。けれども、まだ早過ぎたので、臺所のテエブルの前に坐

つて、一緒に行く筈の身内の者や友達やを待つてゐた。

この一週間の間雪が降り續いてゐたので、鳶色の土地は、秋の施肥でもう肥やされた土地は、鉛色に變つて、大きな氷の敷物の下に眠つてゐた。

白い帽子を冠つた藁葺の家は寒かつた。そして圍ひ内のまるい林檎の木々は、樂しい花の季節でもあつたやうに眞白に粉をふいて、花が咲いてゐるやうに見えた。

この日は、大きな北の方の雲が、きら〳〵する雨を持つてゐた灰色の雲が消えて、青空が高く、朝日が銀色の反射を投げてゐる白い世界の上に現はれてゐた。



セセエルは何にも考へずに——幸福で、窓から自分の前をまつすぐに眺めてゐた。

戸が開いて、二人の女がはひつて來た。晴着を着けた百姓女で、花聟の叔母と從姉妹とであつた。次ぎには彼の從兄弟である三人の男が、その次ぎには隣の女が。彼等は椅子に腰をおろして、ぢつと身動きもせずに默つてゐた。女達は臺所の片側に、男達は他の側に並んでゐたが、ふと、儀式などに集まる人々の間に起る、あの手持無汰沙の氣分に、おぢけた氣分に捉はれた。一人の從兄弟がふつと訊いた。

『もう時間ぢやアないか？』

セセエルは答へた。

『わしもさうぢやァないかと思ふが。』

『さあ！　出掛けよう。』と他の者が言つた。

彼等は立ち上がつた。と、セセエルは、ふと不安の念に捉はれて、父親の支度が出來たかどうかを見に屋根裏の梯子をのぼつて行つた。いつもきまつて早起きの爺さんが、まだ姿を見せないのであつた。息子は彼がまだ藁床の上に、毛布にくるまつて、目を開いて、其の目には惡意を浮べてゐるのを見た。

彼は父親の耳許で呶鳴つた。『さあ、とつさん、起きろよ。婚禮の時間だで。』



聾の爺さんは哀れつぽい聲で呟いた。

『駄目だ。寒けがして背中がぞくぞくするだ。迚も動けねえ。』

若者は、呆れて、彼を見詰めながら、芝居をやつてゐるなと思つた。

『さあ、とつさん、どうても行かなきやァならねえだ。さあ！　おれが起してやらあ。』

そして彼は爺さんの方へ身を屈めて、毛布をまくつて、腕に抱へて抱き起した。所がアマブル爺さんは涙聲を出し初めた。

『う！　う！　何ちふ痛さだ！　う！　駄目だ。背中がつつばつてらあ。屹度この憎い屋根からへえつて來た風のせゐだ。』

『それだと、おめえは御馳走が食へねえぜ、おれはポリイトの宿屋で披露をするのだから。あんまり强情を張るとさういふ事になるんだ。』

そして彼は急いで梯子をおりて、親類の者や客人達と一緒に、目的地へと出掛けた。

男達は雪で裾を汚さないやうにとズボンを折り返し、女達はペチコオトを高く端折つて、痩せた踝や、鼠色の毛絲の靴下や、箒の柄のやうなごつ〳〵した脛やを出してゐた。そして彼等はみんな足許に氣を付けながら、一人づつ後に續いて、口も利かずに進んで行つた。雪が一様に平らに果てもなく積つて、路を跡方もなくしてゐた



ので、踏み迷はないやうにと用心しい〳〵、ごくゆつくりと歩いてゐた。

彼等がある百姓家に近づいた時に、一人二人の人が一緒にならうと待つてゐるのが見えた。と行列は止らずに進んで、見えない道の輪廓を辿りながら、前の方へ曲つて行つた。それは丁度黑い球の繫がつた生きた珠數が白い田舍の坂をうねつてゐるのに似てゐた。

花嫁の家の前には、大勢の群が廣場をあちこちと踏み付けながら花聟を待つてゐた。そして彼の姿が見えると、一齊に高い歡呼の聲を擧げた。と直ぐに、セルストが自分の部屋から、水色の着物を着、小さい赤いショオルを肩にかけて、頭にはオレンヂの花を飾つて出

て來た。

所がみんなはセセエルに訊いた。

『親父さんはどうした？』

彼は當惑しながら答へた。

『痛くて動けねえんだよ。』

と百姓達は胡散臭いとぼけた樣子をして頭を掉つた。

一行は役場の方へと歩みを向けた。結婚しようとしてゐる二人の後ろに、一人の百姓女がヰクトルの子供を、丁度洗禮に連れて行きでもするやうに抱いてゐた。そして男の百姓達は、二人づゝ腕を組んで、海で見る一本マストの帆船のやうな恰好に、雪の上をずつと



進んで行つた。

小さな役場で村長から一緒にされた後で、二人はまた、善良な神樣のささやかな家で、今度は司敎から一つにされた。彼は二人に榮える事を約束して其の契りを祝福してから、結婚生活の美德に就いて、勞働とか、和合とか、忠實とかいふ田舍の簡單で健全な美德に就いて說敎したが、其の時子供は、寒かつたので、新婚の二人の後ろでぎやアぎやア泣き出した。

夫婦が敎會の入口に現はれるや否や、銃の音が墓場の壕で起つた。始めは銃身だけが煙のぽッぽッと噴き出る所に見えてゐたが、やがて一つの頭が行列を眺めてゐるのが見えた。それはヰクトル・ルコが

元の情婦の結婚を祝つて、幸福であるやうにと祝砲を以て其の好意を傳へたのであつた。彼はこの小銃の發射の爲めに、五六人の仲間の者を雇つて來た。そして旨く成功したのであつた。

食事はポリイト・カシュブルウヌの宿屋に設けられてゐた。二十人前の食器が市日などに人々の食事する大きな部屋に用意されて、羊の大きな脚が燒串に挿されてゐたり、鷄の肉が銘々の肉汁の下で鳶色になつてゐたり、豚の小腸が眞赤に熾つた火の上で燒けてゐたり、家の中は脂のかかつた炭のしつこい匂ひで——田舍料理の強い重苦しい匂ひで充ちてゐた。

正午になつて一同がテエブルに着くと、直ぐにスウプが皿に注がれた。みんなの顏は既に陽氣になつてゐた。口は聲高く常談を言ふ爲めに開き、目はわざとらしい目くばせをして笑つてゐた。みんなは次第に浮かれ出して何の滯りもなかつた。

と、戸が開いて、アマブル爺さんが姿を現はした。彼は不機嫌さうな樣子をして、顏を顰めてゐた。そして杖に槌つて身體を引きずりながら、一と足毎に涙聲を擧げて苦痛を示してゐた。彼の見えたことが少からず座を白けさせた。所が不意に、隣人の、マリヴォアル爺さんといふ、人の癖や手眞似をよく知つてゐた大の剽輕者が、セセエルがいつもしたやうに、兩手で喇叭を作つて呶鳴つた。

『おゝい、とつさん、おめえはいゝ鼻を持つてるなあ、ポリイトの

料理が自分の家から嗅げるなんて！』

大きな笑ひ聲が其處にゐたものゝ咽喉から起つた。マリヴォアアルは調子づいて言ひ續けた。

『豚の小腸ぐれえリョウマチによく利くものはねえからなあ！　そいつを一ぺえの熱燗でやつた日にやア、おめえのお腹だつてあつたかにならあな！』

男達は叫びを擧げたり、拳でテエブルを叩いたり、まるでみんなが銘々ポンプを動かしてでもゐたやうに身體を一方に曲げてはまた起して、笑つたりした。女達は牝鷄のやうな聲を出し、給仕達は壁によりかゝつて、身を跪いた。笑はなかつたのはアマブル爺さんだ



けで、何の返辭もせずに、自分の席を作つて呉れるのを待つてゐた。

彼の席はテエブルの中央に嫁と向ひ向つて作られた。と、彼は坐るが早いか、食べはじめた。金を拂つたのが自分の息子であつて見れば、自分の分け前を取るのは當然であつた。胃の中へ落ちて行くスウプの一掬ひ毎に、齒齦の下で押し潰されるパンや肉の一と口毎に、咽喉を通つて行く林檎酒や葡萄酒の一ぱい毎に、彼は自分の財産の幾らかを取り返してゐるのだ、此處にゐる大食家達が貪り食つてゐる彼の金の多少を取り戻してゐるのだ、つまり、自分の身上の一部を儉約してゐるのだと考へてゐた。そして彼は、自分の錢を隱して置く守錢奴のあの片意地で、彼が以前辛抱强く働いてゐた時に

示したやうなあの陰氣な强情で、默つて食べてゐた。

所が不意に彼はテエブルの端の方にセルストの子供が一人の女の膝に抱かれてゐるのに氣が付いた。と彼の目はぢつと其の小さな男の兒の上に据ゑられた。彼は、子供の世話をしてゐる女が其の口の中に時々小さな食物を入れてやるともぐ〳〵してゐる子供から目を離さずに、自分も食べ續けてゐた。そして爺さんは他の者が食べてゐた總てよりも、この小さな小僧に取られる一口々々の方に一層氣を揉んでゐた。

食事は夕方まで續いた。やがて人々は歸つて行つた。

セセエルはアマブル爺さんを起たした。



『さあ、とつさん、歸らなきやアならねえだ。』と彼は言つた。そして爺さんの兩手に二本の杖を渡した。

セルストは子供を抱いた。そして彼等は雪で白くされた青白い夜の中をそろ〳〵と出掛けた。聾の爺さんは、ぐで〳〵に醉つて、おまけに酒の力で一層意地惡くもなつて、歩かないなどと頑張つた。幾度びも彼は嫁に風を引かさうとして、坐り込んで見たり、一言も言葉は言はずに、涙聲を出し續けて、さも痛さうに連續した唸り聲のやうなものを擧げたりした。

家に着くと、彼は直ぐに屋根裏へのぼつたが、セセエルは子供の寢床を、自分が女房と一緒に寢ようとしてゐた深い押入れの傍に作

らへた。けれども新婚の二人は直ぐには眠ることが出來なかつたので、彼等は爺さんが長い間藁床の上で動いてゐるのや、夢を見てか、それともさま〳〵な考を、固定觀念に攻められて、押へておく事が出來ずに、我れ知らず、口から出してしまふのか、幾度も大聲でしやべつてゐるのやを聞いた。

彼は翌朝梯子を下りて來ると、嫁が家の世話をしてゐるのを見た。彼女は彼に呶鳴つた。

『さあ、とつさん、早くおしよ！　此處に旨いスウプがあるだよ。』

そして彼女はテエブルの端に、湯氣の立つてゐる汁を入れた丸い、黒い、土燒の鉢を置いた。彼は何の返辭もせずに腰をおろして、其の



熱い鉢を掴んで、いつもの通りにそれで手を暖めた。そして此の日はひどく寒かつたので、胸にもそれを押し當てて、その煮立つた汁の生き〳〵とした熱を少しでも身體の中に、澤山の冬の爲めに硬くされた年取つた身體の中にはひらせようとしたりした。

やがて彼は杖を取つて、氷で蔽はれた野の方へ出て行つて、晝飯時まで歸らなかつた。それはセルストの子供が大きな石鹼箱の中にまだ眠つてゐるのを見たからであつた。

彼は家内の仲間にはひらなかつた。以前のやうに、其の藁葺の家に住んではゐたが、もう其の家の者ではないやうに、もう何事にも關係しないやうに、息子や、嫁や、子供などといふ人々を、全く

知らない、口を利いたこともない何處かの人のやうに考へてゐるやうに見えた。

冬は過ぎて行つた。それは永くて嚴しかつた。

やがて春の初めとなつて種子はまた芽を出した。百姓達はまたもや、勞働蟻のやうに、風が吹いても雨が降つても、朝から晩まで野に出て働きながら、人間の食物を産み出すあの鳶色の土地の畦で日を暮らした。

其の年は新婚の二人に取つても見込がよかつた。作物は厚くて殖えた。後れ霜もなかつたので、咲き亂れた林檎の花は其のばら色がかつた白い雪を草の中に散らして秋の收穫の豐かなのを思はせた。



セセエルは雇人の費用を儉約しやうと、早くから起きて遲くまでせつせと無理に働いた。女房は時々彼に言つた。

『お前さんしまひにやア病氣になるよ。』

彼は答へた。

『なあに大丈夫だ。自分の方がよく分つてらあ。』

所が、ある晩彼は非常に疲れて歸つて來て夕飯も食べずに寢床にはひつた。翌くる朝はいつもの時間に起きたが、前夜食べなかつたにも拘らず、食べられなかつた。そして午後の半ばに歸つて來てまた寢込んでしまつた。その夜の中に彼は咳き初めた。熱の爲めに燃えるやうな額と、乾いた舌と、渴いて燒け焦げるやうな咽喉とをし

ながら藁の寢床で輾轉してゐた。

併し、明け方には、幾らか落ちついたが、翌くる朝は、醫者を呼ばねばならなかつた。醫者は肺炎で可也に惡いと言つた。

それぎりもう彼は眠る所にしてゐた暗い押入から離れなかつた。その穴の中の方で彼が咳いたり、喘いだり、轉びまはつたりしてゐるのが聞かれた。樣子を見たり、藥を飲ませたり、吸角を當てたりするには、入口の方に蠟燭を持つて行かねばならなかつた。すると長い蓬々とした髯の生えた小さな顏が、空氣が動くとゆら〳〵した蜘蛛の巢の厚いレエス細工の下に見えてゐた。そして病人の手は汚れた上掛の下に死んだやうになつて見えてゐた。



セルストはちつとも休まずに彼を看護して、藥を飲ませたり、發泡膏を貼つたり、家の中を絶えずあちこちと動いたりしてゐたが、アマブル爺さんは屋根裏の方にはひり込んで、息子が死にかけてゐる陰氣な穴を遠くからぢつと眺めてゐた。彼は嫁を憎んでゐたので、息子の傍へは來ずに、性の惡い犬のやうな澁い顏をしてゐた。

また六日ほど經つた時に、ある朝、セルストが、この頃は地べたに二把のゆるい藁束を敷いて寢てゐたので、夫の容態を見に行つた。所が彼の早い息づかひが低い寢床の中から聞えなかつた。ぎよつとしながら、彼女は訊いた。

『もし、セセエルさん、昨夜はとんなだつたの！』

彼は返辭をしなかつた。彼女は手を伸ばして觸つて見た。と顏の肉は氷のやうに冷たかつた。彼女は大きな叫び聲を擧げた、女がびつくりした時の長い叫び聲を。彼は死んでゐた。

その叫び聲で、聾の爺さんは梯子の上に現はれた。そしてセルストが人を呼びに驅けて行くのを見てから急いで下りて來て、今度は自分が息子の肉に觸つて見た。そして、起つた事が不意に分ると、嫁をまたはひつて來させないやうに、そして息子がもう生きてゐない以上は、この家の所有を取り返さうとするやうに、內から戶を締めに行つた。

それから彼は死人の傍の椅子に腰をおろした。



近所の人達が來て、呼んだり、敲いたりした。彼は知らぬ顏をしてゐた。彼等の一人が窓ガラスを毀して部屋の中へ飛び込んだ。他の人々が續いた。戶が再び開いた。そしてセルストが、涙にくれて、顏をはらし目を赤くして、また現はれた。すると、アマブル爺さんは、敗亡して、一言も言はずに、屋根裏へ歸つて行つた。

葬式は翌朝行はれた。やがて、式の濟んだ後で、舅と嫁とは子供の外にはその百姓家に自分達だけなのを見た。

それはいつもの晝飯の時間であつた。彼女は火を起したり、スウプを分けたり、テエブルの上に皿を並べたりした。その間爺さんは腰をかけて、彼女の方は見ないやうにしながら待つてゐた。食事の

用意が出來ると、彼女は耳の端で呶鳴つた。

『さあ、とつさん、食べなきやアいけねえだよ。』

彼は立ちあがつて、テエブルの端に坐つて、自分の鉢を明けて、バタのついたパンを食べて、二はいの林檎酒を飲んで、それから出て行つた。

それは暖かな、心持のよい、地の表面には到る處に生命が醱酵し、動氣うち、花咲いてゐるやうな日であつた。

アマブル爺さんは畑の中の細い路を歩いてゐた。彼は若い小麥や若い燕麥やを眺めながら、自分の息子は、あの哀れな息子は、今は土の下にゐるのだと考へた。彼はいつもの歩調で、跛を引き〳〵後



ろに脚を引きずりながら、歩いて行つた。そして野原に自分一人になると、青空の下に、生長してゐる作物の中に自分一人になると、其の輕快な歌は聞かずに、頭の上を高く飛んでゐるのを見た雲雀の外は自分一人になると、彼は道を進みながら泣き初めた。

やがて彼はとある池の端に腰をおろして、其處にぢつと夕方まで小鳥が水を飲みに來るのを眺めてゐた。そして、夜になりかけた時に、家に歸つて、一言も口を利かずに夕飯を食べて、屋根裏へのぼつて行つた。

そして彼の生活は元通りに進んで行つた。息子のセセモ氏が墓の中に眠つてゐるといふ事の外には何も變つてゐなかつた。

一體何が彼に、爺さんに出來ようぞ？　彼はもう働くことが出來なかつた。今はたゞ嫁が作らへて呉れるスウプを飲むより外には何の能もなかつた。で朝も晩も、テエブルの向う側に、彼と向き合つて、小さな子供がやはりスウプを啜つてゐるのを、怒つた目をして睨みながら、默つてそれを飲んだ。それから彼は出掛けて、宿無しのやうに野良をこそ〳〵と歩きまはつて、人に見られるのを恐れでもするやうに納屋の後ろに隱れて、一二時間の間其處で寢て、そして夜になりかけた時に歸つて來た。

所がセルストの心には眞面目な心配が起つて來た。田地は其の世話をしたり働いたりする男を要した。誰かただの雇人でない、仕事



も心得てゐれば畑の世話もする立派な百姓が、主人が、常に野らを見まはるやうに其處にゐべきである。獨り身の女には畑の世話をしたり、穀物の値段に氣をつけたり、家畜の賣り買ひを指圖したりは出來なかつた。するとさま〳〵の考が頭に浮んで來た、單純な、實際的な考が。彼女はそれを夜、頭の中で繰返した。彼女は年の暮までは再婚することが出來なかつた。而かも差迫つたいろんな事、目の前の色んな事の世話をすることは直ぐに必要であつた。

ただ一人の男だけが、ヰクトル・ルコが、子供の父親が、彼女を困難から救ひ出すことが出來た。彼は身體も丈夫で百姓の仕事もよく心得てゐた。まとまつた少しの金さへあれば、すぐれた百姓になれ

るのであつた。彼女は彼がまだ兩親の畑に働いてゐた時分に彼を知つたので、その技倆をよく知つてゐた。

で、ある朝、彼が肥料の荷馬車を引いて道を通つて行くのを見ると、彼女は逢ひに出て行つた。彼女を見付けると彼は馬を止めた。

と彼女は前夜も逢ひでもした人のやうに彼に言つた。

『井クトルさん、お早う――お變りはないかね？』

彼は答へた。

『變りはないよ――お前さんはどうだね？』

『あゝ、おらも丈夫だがね、うちが一人ぎりなものだから、田地の事が氣がかりでならねえだよ。』



そこで二人は其のまま長い間しやべりながら、重い荷馬車の輪に凭りかゝつてゐた。男は時々帽子を擧げては額を搔いてゐた。そして女が、赤い頰をして　熱心にしやべりながら、自分の考や、計畫や、將來の目論見やを話してゐた間ぢゆう、考へてゐた。しまひに、彼は低い調子で言つた。

『うむ、それやアしてもいゝ。』

と、彼女は田舍の人が手打をする時のやうに手を擴げて、そして訊いた。

『承知したね？』

彼は彼女の擴げた手を握つた。

『承知した。』
『ぢやァ、次ぎの日曜日ときめるね？』
『次ぎの日曜日ときめる。』
『ぢや、左様なら、ヂクトルさん。』
『左様なら、マダム・ウルブレエク。』

## 三

この日曜日は村の祭の日であつた。ノルマンディで『集り』と呼んでゐる守護聖徒の一年一度の祭りの日であつた。

この一週間の間變な恰好をしてゐる車に乗つて、縁日商人や、富



籤屋や、射的場を開く者や、他の娯樂物を見せる人達や、百姓達が『化物製造人』と呼んでゐる香具師やの一所不住の家族達が、鼠色や栗毛の馬にそろ〳〵と引かせながら大道をやつて來るのが見られた。

ふは〳〵してゐる幕を張つた汚ない野獸の運搬馬車は、車輪の間に頭を垂れて、早足にちよこ〳〵と走つてゐる陰氣な樣子をした犬と一緒に、村役場の前の草原に、次ぎ次ぎに引き込まれた。やがてテントが銘々の假りの住居の前に張られた。そしてこのテントの中に、村の餓鬼共の好奇心や羨む心をそそるやうな金ピカ物が布の穴から見えてゐた。

祭の朝になるや否や、すべての假小屋が開かれて、ガラスや瀬戸物の立派な物が並べられた。そして百姓達は彌撒への道すがら、早やもう、嬉しさうな顔付をして、これらの小やかな店を眺めてゐた。それは續く年々にもう度々見たものであるに拘らず。

午後は早くから草原に人が集つた。近くの村といふ村からは、百姓達が、搖籃のやうに搖れるとがた〳〵音のする幌のない二輪馬車で、女房や子供達と一緒に搖られながら、やつて來た。彼等は友達の家で軛を解いた。で何處の場庭も、鼠色の、高い、痩せた、いびつな、海の底から出て來た長い爪の生えた生物のやうな、妙な恰好をした手荷物で一ぱいであつた。そしてどの家族も、子供を先きに、



大人は後についてにこ〳〵しながら、落ちついた足取で『集り』に來た。擴げた手は、赤い骨張つた大きな手は、働くことに慣れてゐて偶の休みに却つて疲れたやうに見えてゐた。

輕業師は喇叭を吹いた。木馬につれて鳴る手風琴は、その高い急調な音を空中に送つた。富籤車は布を裂くやうなひゆうといふ音をさせた。そして絶えずパチ〳〵といふ銃の音も聞えてゐた。そして

そろ〳〵と動いてゐる群集は、どろ〳〵してゐる糊のやうに、羊の群の動くやうに、無闇に突き進んでゐる頓間な鈍い動物のやうに、假小屋の前を靜かに通つて行つた。

娘達は、互ひに腕を組みながら、六人か八人位の群になつて、歌

を歌ひ續けてゐた。若い衆達は耳まで帽子をかぶつて、其の後から、からかひながらついて行つた。糊でごわ〳〵してゐる彼等の上衣は、青い風船のやうに膨れてゐた。

近在の者はみんな其處にゐた——主人達も、雇人達も、下女達も。

アマブル爺さんも、舊式な綠色いフロックコオトを着て、『集り』を見に出掛けた。彼はかういふ場合に出ないことは決してなかつた。

彼は富籤を見たり、射的場の前に立ち止つて射的を批評したり、中でも、板に刻んで彩色した一寸法師の明いた口の中へ大きな木の球を投げ込む極めて簡單な遊びを一番面白がつたりしてゐた。

不意に、彼は肩を輕く叩かれた。それはマリヴォアアル爺さんで、



かう叫んだ。

『やあ、とつさん！　一ぺえやれよ。』

そして二人は野天に置いてある田舍料理屋のテエブルの前に坐つた。

二人は一ばいの酒を飲んだ、續いて二杯、續いて三ばい。そしてまたアマブル爺さんは『集り』の中をうろつきに行つた。彼の考はいくらか亂れて來て、何故とも知らずににこ〳〵してゐた。彼は富籤の前で、木馬の前で、殊に射的場の前でにこ〳〵してゐた。彼は其處に長い間ぢつとしてゐた。誰かゞ憲兵か司敎かを、彼が本能的に信じなかつた二つの權力を倒すのを見ると大喜びに喜んだ。やが

て彼はまた料理屋へ歸つて行つて、氣を鎭めるやうに一ぱいの林檎酒を飲んだ。遲くなつた。夜が來た。近所の者が來て彼に氣をつけた。

『とつさん、家に歸らねえとシチユウにおくれるぜ。』

そこで彼は家の方へ向つて出掛けた。柔かな闇が、春の夜の暖かな闇がそろ〳〵と地上におりつゝあつた。

入口に着いた時に、彼は明りのついてゐる窓から、家の中に二人の人を見たやうに思つた。彼はびつくりして立ち止つたが、やがてはひつて行つた。そして井クトル・ルコがテエブルに坐つてゐるのを見た。じやが薯のはひつた皿を前に置いて、息子が坐つてゐた其の



同じ場所で夕飯を食べてゐた。

と、不意に、彼は出て行かうとでもするやうに、向き返つた。夜はもう眞暗であつた。セルストは跳び立つて、彼を呼んだ。

『早くお出でよ、とつさん！　お祝ひじまひの旨いシチユウがあるだよ。』

そこで彼は不精無性に戻つて來て、男と、女と、子供とを順々に見ながら坐つた。それから、いつものやうに靜かに食べ初めた。

井クトル・ルコは全く打ち寛いで、時々セルストと話をしたり、子供を膝に抱いて、接吻したりしてゐた。そしてセルストはまた食べ物の給仕をしたり、飲み物を注いでやつたり、彼と話してゐる間は

滿足さうに見えてゐた。アマブル爺さんは二人が何を言つてゐたかは聞かなかつたが、ぢつと目を据ゑて二人を見てゐた。

夕飯を濟ますと（彼は何にも咽喉を通らなかつたほどに、胸の苦しいのを覺えた、）彼は立ちあがつた。そしていつものやうに屋根裏の方へはのぼつて行かずに庭の戸を明けて、外へ出て行つた。

彼が行つてしまふと、セルストは、いくらか不安な氣がして、訊いた。

『とつさんはどうするんだらうね？』

ヰクトルは無頓着な調子で答へた。

『心配するなよ。草臥れりやア歸つて來らあ。』



そこで、彼女は家の中を片附けたり、皿を洗つたり、テエブルを拭いたりした。其の間に男は靜かに着物を脱いだ。そして彼女が以前セセエルと一緒に眠つたあの暗いくぼんだ寢床の中へはひつた。

庭の戸がまた開いて、アマブル爺さんがまた姿を現はした。彼はひつて來るや否や、年取つた犬がふす〳〵臭ひを嗅ぐやうな樣子をして家中を見まはした。彼はヰクトル・ルコを搜したのであつた。が彼の姿が見えなかつたので、テエブルから蠟燭を取つて息子の死んだ暗い押入の方へ近づいて行つた。その中に彼は男が夜具の下に横はつてもう眠つてゐるのを見た。と聲の爺さんは靜かに向き直つ

て、蠟燭を元の所に置いて、庭の方へ出て行つた。

セルストは仕事を濟ませた。彼女は子供を寢床に入れて、何もかも片附けて、そして井クトルの傍へ身を置く前に舅の歸りを待つてゐた。

彼女はぢつと椅子に坐つたまま、手も動かさずに、ぼかんとした目を据ゑてゐた。

彼が歸つて來なかつたので、彼女は堪り兼ねたじれつたさうな調子で呟いた。

『ほんとに碌でなしの爺さんたら、蠟燭が四錢もとぼつちまふぢやないか。』



井ルトルが夜具の下から彼女に答へた。

『出て行つてからもう一時間以上にもなるぜ。戸口のベンチにでも寢込んだんぢやアねえか、見ろや。』

『今行つて見るよ。』と彼女は言つた。

彼女は立ちあがつて、明りを取つて、そして闇の中を見る爲めに手を翳しながら、出て行つた。

彼女は戸の前にも、ベンチの上にも、爺さんが暑い日にともすれば坐つてゐた肥溜の傍にも何にも見なかつた。

所が、また家の中へはひらうとして、ふと目を家の入口にかぶさつてゐる大きな林檎の木の方へやると、不意に彼女は二本の男の足

が自分の顔の高さにぶらさがつてゐるのを見た。

彼女は恐ろしい叫び聲を出した。

『井クトルさん！　井クトルさん！　井クトルさん！』

彼はシャツのままで飛び出して來た。彼女は他の言葉を發することが出來なかつたので、頭を背けて見ないやうにしながら、腕を伸ばして木の方を指さした。

何を彼女が意味してゐるのか解らなかつたので、彼は見付ける爲めに蠟燭を取つた。そして下から照らした簇葉の中に、アマブル爺さんが馬小屋の繩で首をくゝつてゐるのを見た。

梯子が林檎の木に架けられてゐた。



井クトルは急いで鉈を搜して來て、木にのぼつて、繩を切つた。

けれども爺さんはもう冷たかつた。そして恐ろしいしかめ面をして氣味の惡い舌を出してゐた。

（終）

大正七年六月一日印刷
大正七年六月四日發行

日曜日の散歩 奥付
定價七十五錢

著作權所有

譯者 前田晁
發行者 東京市日本橋區本町三丁目八番地 大橋新太郎
印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 高橋季吉
印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所
發行所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

# 近代西洋文藝叢書

1 クウプリン作 昇曙夢君譯 決闘 附生活の河
2 フロオベエル作 生田長江君譯 サラムボオ
3 シュニッツラア作 楠山正雄君譯 廣野の道
4 モウパッサン作 中村星湖君譯 死の如く強し
5 ツルゲーネフ作 相馬御風君譯 處女地
6 ドストエフスキー作 片上伸君譯 死人の家
7 ダンヌンチオ作 森田草平君譯 快樂兒
8 ズウデルマン作 小宮豐隆君譯 罪（カツツエンシュテーヒ）
9 トルストイ作 阿部次郎君譯 泥濘・結婚の幸福
10 ゴーリキー作 鈴木三重吉君譯 懺悔
11 ピエルロチ作 吉江孤雁君譯 氷島の漁夫 附埃及行
12 ゴンクール作 前田晁君譯 陷穽

全部十二冊完成
菊判總クロース函入
天金縁空押模様摺込
正價各壹圓五十錢
送料各十二錢

東京 博文館 本町





# 泰西文壇の精華

前田晁君譯 短篇十種 キイランド集 四六判三百廿餘頁 正價五十錢 送料金六錢

前田晁君譯 短篇十種 チエエホフ集 四六判三百五十頁 正價五十錢 送料金六錢

相馬御風君譯 短篇六種 ゴーリキー集 四六判三百十二頁 正價四十五錢 送料金六錢

吉江孤雁君譯 短篇三種 ツルゲーネフ集 四六判三百五十頁 正價四十八錢 送料金八錢

博文館

森田草平君譯 ■軍事小說 **祖國の爲に** 正價七十錢 送料六錢

長瀨春風君譯 ■ **二人探偵** 正價七十五錢 送料六錢

家庭小說 **小公子** 若松賤子女史譯 正價五十錢 八送料

ロビンソン **絶島漂流記** 高橋雄峯君譯 正價五十錢 八送料

東京市本町 博文館發行



フランク、アランソン ロム バード氏著 ■ **マクベス** 全一冊 中判洋裝 正價壹圓 六送料

小日向定次郎君註 英語世界叢書 **戀と戰** 正價三十五錢 大送料

深澤由次郎君註 英語世界叢書 **からたち花** 正價三十五錢 八送料

フランク、アランソン ロム バード氏著 ■ **リヤ王** 全一冊 中判洋裝 正價壹圓卅錢 ノ送料

四版

田山花袋君著□

一日の行樂

三六判五百餘頁
壹圓廿錢
送料八錢

# 旅

（五版）

田山花袋君著

洋裝三六判六百卅頁
正價壹圓廿錢
送料八錢

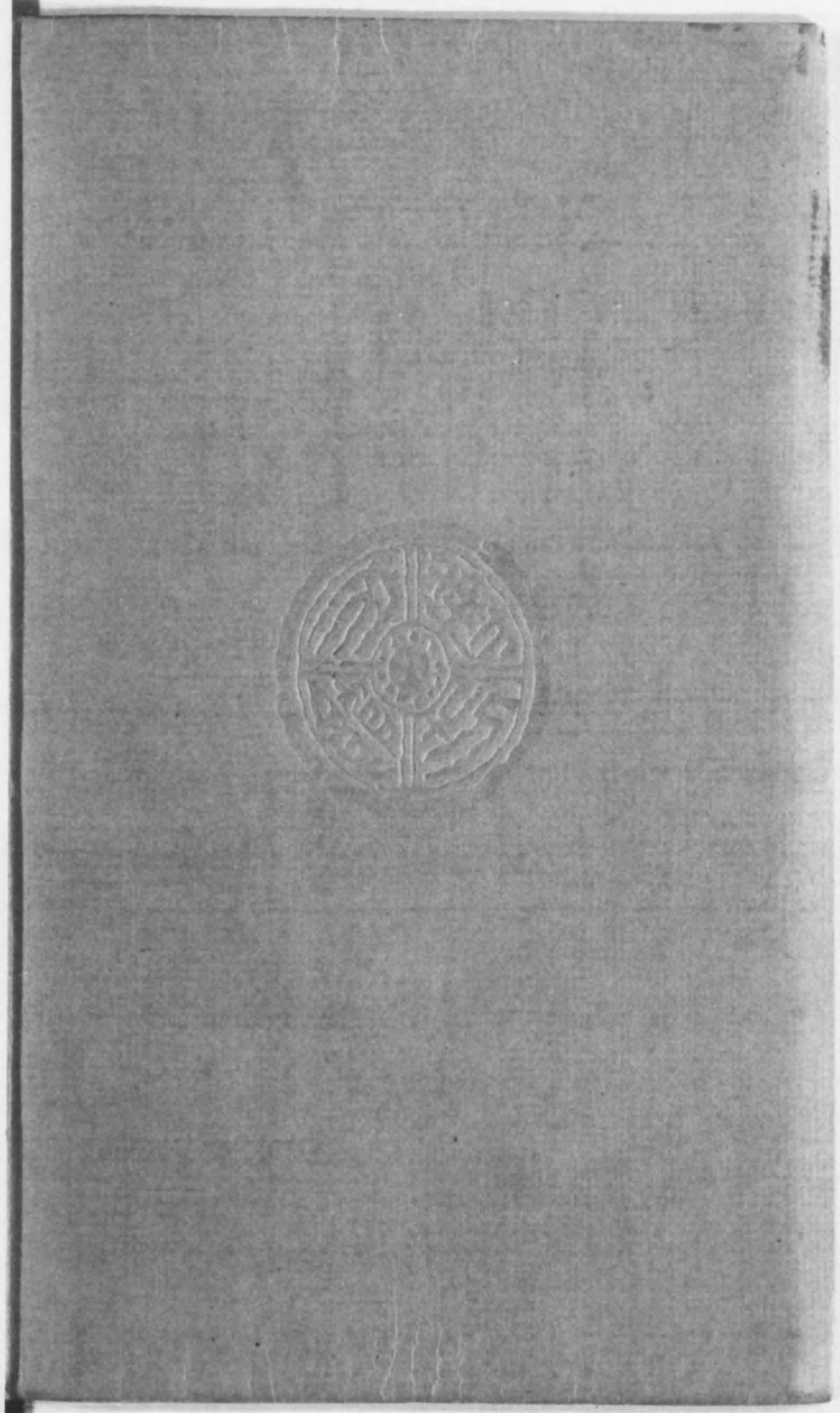
東京日本橋區本町
博文館
振替東京二四〇番

七版

神谷有終君著□

東海道旅の友

車窓の名勝觀

三六判二百六十頁
五十五錢
送料六錢

終